

---

# モスラが好き 2

crea

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モスラが好き 2

### 【Nコード】

N9853C

### 【作者名】

crea

### 【あらすじ】

福永武彦・中村真一郎・堀田善衛という大作家の共著による「発光妖精とモスラ」が原点である、未来への子供の意志の象徴としてのモスラ。三人のモスラフリークである女子大生が、運命の系に導かれるようにして出会うことになる。「貧乏の勧め」を家訓とした生活を実践していた田所令子。正規雇用社員であった父親が年々冷遇の憂き目を見ることになった塩屋夕子。幼い頃から未来の夢を見続けていた今田麻由香。彼女の夢は、遙か未来の冷え切った地球に始まり、麻由香の成長とともに近未来の人類が生存可能な地球へと

遡っていた。三人はそれぞれに、現在流布している若者のカッコ良  
さやセンスの概念と一線を画していた。

## 第一章

## DREAM IN THE DREAM

十一月のある夜、大学一年生になった今田麻由香は、暖かいベッドの中で夢を見ていた。

その夢は近未来の出来事で、獄中にいる麻由香が最後の夢を見ている設定だった。

朝早い、見覚えのある海辺の町の風景に、麻由香は子供の影を探している。小学生の頃から見続けている麻由香の夢は、遙か未来の冷え切った地球から始まって、臨界温度を越えた海水温度の上昇で、大陸棚全てを覆った動物性プランクトンによる人類存亡の危機へと徐々に混沌とした現代へと遡っていた。人類が滅亡した地球を別にすれば、麻由香の夢にはいつもニュータントと呼ぶことにしている子供が登場していた。しかしその子供は、麻由香が子供のときそうであったように、いつも独りぼっちだった。

遙か昔、麻由香が大学一年生だった冬に、母親のフォードエスケイプ・アクアファイルのルーフにボードを積んで、この海岸ヘサーフィンに来たことが思い出された。麻由香を含めメンバーは四人だったが、女の子二人は良く覚えていのに、男の子のことがどうしても思い出せない。名前は…まあ龍之介でいいや。

麻由香はその男の子を龍之介と命名した。

「顔でかーい！顔でかーい！」

後部座席のメグが、お気に入りのアラレちゃんの主題歌を口ずさんでいる。

「ガールフレンドいる？」

メグは思い出したように、助手席で借りてきた猫状態の龍之介の肩を突つついた。

「いないけど……」

「全寮制のフリースクールにも女の子いるんでしょ？」

「いるけど、そんな余裕ないから……」

「一体何がそんなに忙しいのよ？」

「受験勉強とか……」

「大学行くんだ？」

「一応……」

「志望校は？」

「麻由香さんと同じ大学」

「へえっ！麻由香先輩の大学！ってことは私たちの志望校じゃん。ねえ涼子」

「小うるさいメグと一緒になんて、受かったとしてもちよっとねえ」  
車窓の波を追いかけていた涼子が笑いながら言った。

運転席の麻由香が（私じゃん！）「だったら、あなたのお姉さんとも一緒だということね。私の父がお姉さんに話したことについて何か聞いてる？」と問いかけた。

「はい、正月に家へ帰ったとき、姉も帰っていたので。中学生の頃から僕に依存していたことで、登校拒否という事態を招いてしまったと言われたと。僕はそんな風には思っていないが。それと、もう僕に依存することはないので、安心して同じ大学の建築学部へ来るようにと。僕は人と係わるのが苦手なので、大学なんかへ行っても友達も作れないだろうし、それに僕の家貧乏だから学費も出せないだろうと言いました。姉はアルバイトで学費を捻出しているようですが、僕にはそれも無理だと思えるんです」

「ふうん、貧乏ねえ……。あなたのお姉さんを見ると、テレビなんかに出てるセレブとかいう女の子も真っ青って感じだけど。確かに化粧もしてないし、身に着けているものはいたって普通だわね」  
「はい。中学校にいたときは、血が繋がっていないだろうとよく言われました」

「そうよねえ…それであなたは大学に行かずにどうする積もりだっ

たの？」

「フリースクールを出てからは、取りあえずアルバイトのようなことをしながら、先のことを考えてみようと思ってたんですが、姉には僕の家のように、将来親を当てに出来ない家庭に育った人間に、モラトリアムはないと言われました。結婚も出来ないし、親がいなくなれば、今の賃貸マンションの家賃すら払えなくなって、一生を最低賃金のまま、ネットカフェかブルーシートで終えるだけのことだとも……」

「言えてるわね。そんな生き方を否定する訳じゃないけど、自分を誤魔化しながら境遇を肯定して生き続けることになるなら、悲惨過ぎるわ。それでお姉さんと同じ大学へ行こうと決めたの？」

「どうせなら僕はIT関連の専門学校へ行きたいと言ったんですが、今どきのコンピュータとかの専門学校のカリキュラムは、クライアントサーバ型ネットワークに終始しているから、苦労して卒業した頃には既に淘汰される運命だと。だったら建築の勉強をしながら、独自にインデックス・ファブリクスの勉強もすればいいと言われました。学費は私が何とかするし、そうすればモスラのご加護もあるからとも……」

（同じ大学の同じ学部を勧める理由がモスラのご加護？夕子ったら……。このところ未来住宅の設計で悩んでいるかと思えば、こんな手があったって訳ね……。思いつきり依存する積もりじゃない。インデックス・ファブリクスなら、うちの大学が一番力を入れている分野じゃん。私が選んだ経営学部では、学長自らが陣頭指揮を執って、来るべきハード・ソフト一体情報社会の出現に備えているというのに。それがどうして建築学部な訳よ）

麻由香はつぶやきにもならない言葉を頭の中に描きながら運転していた。

「あなたの学費も出せるなんて、お姉さんは個人的に結構裕福なんだ？」

「それが、僕にもよく分からないんです。大学へ行くようになった

ときも、両親は学費が払えないと言ってたのに、平気な顔をして全部自分で何とかするからと言って笑ってました」

「あなたのお姉さんって、見掛けはこれでもかかっていうくらいお嬢さんだけど、生活力あるんだ」とは言ったものの、麻由香には龍之介の姉がどのような方法で、二人分の学費を捻出するのかなどということは、どうでもいいことだった。

「あつ、見て見て！低気圧の位置からいってもあの辺りの波、結構いいんじゃない？」

いい波ウオツチャーの涼子が沖を指差しながら言った。

「おーおー、オンショアでダンパー気味だけど、他のスポットにはセット入ってなかったしねえ。ちょっと辛いけどがんばろう、ねっ 龍之介」

「おつ、おー！」

メグに発破を掛けられた龍之介は、意味も分からないまま同意していた。

いい波を探して海岸線を巡り、辿り着いたのはリーフのサーフスポットだった。

麻由香たち女子三人組は車内でフルスーツに着替え、寒さと怪我予防のためウェットスーツと同じ素材のブーツを履いていた。龍之介は車外で借り物のフルスーツに着替えていた。

ウェットスーツはただでさえ窮屈な素材で出来ている上に、麻由香の知り合いから借りたものは少し小さめなので、龍之介は背中 của ファスナーを上げるのに手間取っていた。車から出て来たメグが「龍之介は面の皮からして薄そうだもんね」と言いながら、龍之介の首にワセリンを塗ってからファスナーを上げた。

三人は、しばらく波の状態を確認してからサーフボードを担ぎ、小さな岩に足を取られないように注意しながら波打ち際へと歩き出し、龍之介もその後に従った。

「足の裏が痛いつてあんだ、グローブは持って来てるのにブーツ持って来てないのね。一月にサーフィンするならブーツもいるでしょ。」

陽平おじさん貸してくれなかったの？十一月に二回連れて行ってもらったって言ってたけど、そのときはどうしてたのよ」

麻由香が問いかけると、龍之介は「足のサイズが合わなかったから、使わなかった。それにビーチだったので、冷たかったけど痛くはなかった」と答えた。

「このスポットはリーフでしかも浅瀬だし、波も頭を超えるのが来ているし、ヘルメットもないし……ワイプアウトしたとき頭を怪我しないようにね。そこまでいかなくとも足の裏を切っちゃうかも……。まあ、今日のブレイクなら海底の状態がいい場所にエントリー出来ると思うけど。陽平おじさんからボトムターンも出来るようになったって聞いたけど、ライディングではあまり海岸に近付かないで、早めにプルアウトするようにしてね」

メグと涼子はエントリーのポイントを決めると、それぞれ別の方へとゲティングアウトして行った。真つ白なショートボードの上で、胸を反らせパドリングしながら沖へと向かう彼女たちは、水鳥の羽に乗って地球を遊ぶ可愛い小動物のようだった。

麻由香に促され、龍之介は足首にリーシュコードを繋いだ。波のブレイクの状態を見ていた麻由香は「ゆっくりでいいから付いて来てね」と言っ、パドリングを始めた。ゲディングアウトしている途中、セツトが来ると龍之介は上手くローリングスルー出来なくて、麻由香に大きく水を開けられた。その度に麻由香はサーフボードに跨り、波を待つときのウェイティングの姿勢で、龍之介が追い付くのを待っていた。

龍之介はポンポコリンククラブのおじさんたちに二回サーフィンの指導を受けているが、そのときは波が小さくてブッシングスルーで対応出来たのだろう。だが、今日は波が大きい上にオンショアのせいでダンパー気味になっているので、水深のあるコースでカレントを上手く使えないと、沖へ出るまでに相当時間と体力を消耗してしまうことになる。

パドリングはスムーズに出ているところをみると、基本的なこと



はちゃんと教わっているらしい。ライディングしているサーファーが近付いて来たときの非難の仕方、自分がテイクオフするときのドロップインの禁止など、頭で考えて理解出来ることについては、自称プロサーファーがいるポンポコリンクラブのメンバーが指導したのであれば、何も問題ないだろう。

だが、今日のサーフスポットでは技術的な経験が重要となって来る。どちらかと言えばローカルのサーフスポットなので、初心者同伴の場合は遠慮するのが礼儀だが、幸い今日は他のサーファーはいなかったし、他のサーフスポットの条件が良くなかったのでここを選んだ訳だ。

龍之介はリーフのスポットが初めてで、その上波も軽く頭まであったので、ワイプアウトすれば海底の岩に叩きつけられる恐れがあった。おまけに、波を待っている間も注意しないとカレントが速く、うかうかしていると漂流する可能性がある。

麻由香は、やっとのことでエントリーポイントに到着しウェイティングしている龍之介の隣で、カレントによりポイントがずれて来ると、元の位置に戻るよう促した。そして、セットが入ると、何番目の波に乗るようにと助言し、パドリングを始めるタイミングを教えた。

波が途絶ええいる間、麻由香は沖を見ながら歌を歌っていた。その歌は安室奈美恵のものだったが、歌詞はまるで違っていた。

……世界中の星空が 眠りに就いても

忘れないでねいつだって 私が見てる

あなたの笑顔誰にも渡さないわ

I'll follow you

つまずいても

戻る場所は

あなたがいる景色

You never say to me  
さよならなんて

If I'll just follow  
just follow you

あなたがくれたその優しさ 宝物よ  
だから今その涙 隠さずに  
心塞ぐときは隣にいるわ

I'll follow you

夜を 夜を越えて

行方を照らす

微かな光届ける

You never say to me  
悲しみなど

If I'll just follow  
just follow you

世界はあなたを

独りにしない

寂しくて

振り向けば 愛が 愛が

I'll follow you

呼んで 呼んでみてね

必ずそこに

あなたの居場所がある

You never say to me

ごめんなんて

I'll just

just follow you

just follow you

just follow you

just follow

follow you

……

結局その日の麻由香は一度もテイクオフしなかった。そのことを龍之介は気付いていなかったし、めいめいのポイントで地球と戯れているメグと涼子に至っては、全く気にしていなかった。麻由香は自分では認めていないが、親しい人からは苦労性であると認定されていた。

## 第二章

### 未来授業

あの日サーフィンをしていた海と同じ海のはずなのに、リーフでありながら砂浜のように見える海岸は、近づくに連れて異臭を放つ動物性プランクトンの屍骸からなっていて、群れを成したカラスが遠巻きに餌の有りを窺っていたが、すぐに諦めて飛び立った。カラスたちは町には留まらず、立ち枯れの樹木に覆われた、山の方へと去って行った。

山の麓には、コンビナートを形成する大規模なプラントが建ち並び、波の仕業ではない本物のパイプラインが、サーフィンをしていた頃の麻由香が波を待っていた辺りまで延びていて、海水面に浮遊するプランクトンを吸引している。海を浄化するための施設だとしたら、あまりに巨大で、あまりに微力であると思えた。

晴れ渡っている空は、見たこともないくらい青く澄んでいて、黄砂を混ぜたような色の海と、遠くの方で交わっていた。おはようを言っただけだというのに太陽は、容赦なく真昼の輝きを放っていた。それらの風景は、希望などという甘えの全く許されない現象であると同時に、既に一つの終焉を迎えてしまった事実の語り部であるように思えた。

そのうち、何処からともなくスピードスケートの選手さながら、頭からすっぽり覆い隠す白っぽいコスチュームを纏った子供たちが現れ、やがて蟻が群れを成すようにひとかたまりとなって行進を始めた。

僅かに露出した眼の部分だけ、銀色のサングラスで守られていた。はつきりと確認は出来ないが、身長の高い子から順番に並んでいて、最後の子との身長差はかなりのものだ。中学三年生から小学一年生くらいであろうか。整然と行進は続き、やがて全ての子供たちは、学校とおぼしき建物の中へ呑み込まれてしまった。

夢の中の麻由香は、教室の中を透視していた。

そこには、中学三年生から小学一年生までを人括りにした授業風景があった。子供たちはサングラスを外し、頭の部分だけをコスチュームの束縛から解放していた。教壇の前に立っているのは、色白で如何にも聡明そうな雰囲気を漂わせた、二十歳そこその先生だった。先生は子供たちと同じコスチュームで、出欠を取っているところだった。順番に返事をしている子供たちの顔色も、陽射しを避けて育つて来たことを証明するように蒼白だった。

先生は出欠を取り終え、欠席者が一人いたので、事情を知っている子がいるかを確認した。

夢の中の麻由香は、耳を澄ました。

「ひと月前に人を殺して逃げていた親戚のおじさんが捕まったんだって」と、誰かがささやいた。

「電話くらいしてくれればいいのに」と、先生がつぶやいた。

「嘆願書っていうのを作ってるから忙しいんだと、うちの母が言っていました」と、違う誰かが大きな声を出した。

「そう……静かにしましょうね」と、先生が指を口に当てながら言った。

「先生、そのおじさん死刑になっちゃうの？」

また別の子供が、興味深そうな眼をして言った。

「そうね、正当防衛以外では余程の不可抗力が認められなければ、一年以内に死刑が執行されることになるわ。そのおじさんは盗みに入った家のご主人を殺したって聞いているから、残念だけど嘆願書は役に立ちそうもないわね」

先生は、仕方のないことだというように、ため息混じりに説明した。

滞りなく授業が始まった。子供たちは誰も教科書を持っていない。先生はテレビモニターのスイッチを入れると、教壇の上に置かれた

パソコンのキーボードを叩いた。

（私の大学での通信に関する授業でさえ、情報を得るためにパソコンなんて利用しない方法に準拠しているのに、未来がこの有様ということは、日本は大きな波に乗り損ねたんだ。というより、金融経済を操作するものによって、乗ることを許されなかったんだ）麻由香は夢を見ながら、唇を噛んでいた。

モニターの画面には宇宙から見た青い地球が映し出された。画面の下には「次世代のサステイナブルエコノミー」というテロップが流れていた。察するにそれは、国から提供された情報をハードディスクにダウンロードした、啓蒙を目的とした教材のようだ。先生が手にしている数枚のペーパーは、恐らく同時にプリントアウトした、指導マニュアルだろう。

収録時間三十分程度の教材の内容はといえば、サステイナブルエコノミーが叫ばれた時代から現在に至るまでの、国と民間とのコラボによる大々的な取り組みの経過と、不可避ではなかったにも拘らず避けられなかった、現在の惨状に関する分析が、主たるものであった。

モニターを消した先生は、指導マニュアルに用意されている幾つかの設問を、子供たちにぶつけた。

「ええつと、まず『次世代のサステイナブルエコノミー』を見終わって何か感想ありますか？」

「学校の給食や夕御飯がご馳走だった」

「綺麗な海だった」

「お魚がいっぱい泳いでいた」

「子供も泳いでいたし、裸だった」

「太陽が優しかった」

「高層ビルが新しかった」

「車がたくさん走っていた」

「テレビゲームをしていた」

「デモをしていた」

「シロクマがいた」

子供たちは、思い思いに感じたことを述べた。

「そうですか。今とは随分違っていますね」

先生はそう言ってからしばらく、マニュアルに眼を通していた。

「前にも社会科の授業で勉強しましたが、さつきみんなが感想を言ってくれた自然や生活が、何故こんな風になってしまったのか、理由の分かる人いますか？」

先生の質問に何人かの子供が手を挙げた。

先生に指名された一人の子供が「デモをしている人が映っていました、あの人たちのようにサステイナブルエコノミーの考え方に反抗的な人々がいたからです」と、答えた。

「そうですね。では、サステイナブルエコノミーと、それに反抗した人々との考え方の違いが分かる人いますか？」

先生の質問に対して、一人の見るからに年長で、リーダーシップを取っていきそうな男の子が、「はい！」と言って立ち上がった。

「説明してください」

先生に促されて、男の子が話し始めた。

「サステイナブルエコノミーとは、政治家と経済学者と科学者と、それにNGOなどが意見を出し合って、環境のことを考えながら持続可能な経済を構築し、発展させようとする考え方です。アメリカや中国は環境問題を放置して経済発展ばかりを推進しましたが、我が国は地球の環境も考えつつ経済成長を目指しました。ところがNGOといってもいろいろあって、経済を発展させることなんかどうでもいいという、自分勝手なグループがあり、上手く機能することが出来なかったのです。そのせいで経済成長が滞り、鉄鋼は勿論のこと、自動車産業までも中国に取って代われ、結果として、環境保護に投資することも出来なくなりました。もつと美しくもつと豊かになれる国の政策が実を結んでいれば、国際連合の常任理事国にもなつて、世界のリーダーシップも取れたのにと思っていると残念です」

「そうよね。では、その自分勝手なNGOについて分かる人はいま

すか？」

「首謀者は女性で側近にも女性が二人いました。NGOを組織して国民の不安を煽ったり、ことあるたびにデモをして、それを制止するために出動した機動隊に石を投げつけたりもして、みんなに迷惑を掛けたので、騒乱罪とかが適用されて逮捕されました。確かに殺人は犯してませんが、ことの重大さから死刑との意見もありました。しかし、前例がないということで裁判員が躊躇したことにより、無期懲役になりました。民主主義だ、発言の自由だと理由を付けて、そのグループの活動がしばらく放置されていた間に、経済は破綻してしまい、国としても環境問題への取り組みが出来なくなりました」

さっきの男の子が、着席したまま答えた。

「はい、よく出来ました。忘れていた人は覚えておくように、今日の授業はテストに出しますよ。それでは、その頃の世界の状況をお話しておきます。」

アメリカはドル高政策を続け、サステイナブルエコノミーを実践することのないまま、原油価格の高騰により過剰となったオイルマネーを流入し、一方では中国を始めとするBRICS諸国へ資本投下し、環境悪化と中国の経済成長をもたらしました。アメリカでの土地バブルの終了を合図に、急激なドル安となりましたが、その頃アメリカ資本の多くは海外へと流出していました。

日本の輸出産業は壊滅し、その上ドル建て海外資産の空前絶後とも言える損失等が発生しました。その頃、東南アジア諸国は中国の傘下であり、それまで余裕のあった食料はほとんどバイオエタノールの生産にシフトされ、食料の調達さえままならない日本は、未曾有の食糧危機に陥り、その翌年には、三百五十万人以上の餓死に思うわれる死者が出ました。

我が国が壊滅的な状況に陥ったとき、アメリカでは資本の多くがBRICSや、それ以外の新興経済国に流出し、世界企業経済としての基盤が出来上がっていました。ユーロ諸国では、京都議定書以降、アメリカや中国の経済政策に対抗する以前に、既にグローバル



経済の土俵を降りて、東欧諸国と連携しリージョナブル経済圏を形成していました。

我が国の輸出産業はグローバル経済に適応し、経済を発展させることが可能であったにも拘らず、反抗勢力への対応の遅れで、サステイナブルエコノミーが実現することなく、何人かの役人が引責処分されたと聞いています。

私たち大人は、昔の失敗を繰り返さないように、再びサステイナブルエコノミーに取り組んでいます。あなたたちが将来どんな職業に就くかは分からないけど、政治、経済、科学、NGOのどの立場になったとしても、みんなで協力してより良い豊かな、昔のように国際競争力のある日本を築くように努力してください。他に何か質問ありますか？」

（やっぱりそうなっちゃったか。私たちのせいで、サステイナブルエコノミーが実現しなかった？言ってくれるじゃない。持続可能な経済？何よそれ、その時点で資本主義なんて終わっちゃってるじゃない。後進国に寛大を装う京都議定書なんて、一九九〇年までに環境問題がある程度クリアした、すでに経済の行き詰まっている最先進衰退諸国の、姑息な経済政策だったじゃない。思惑通りには行かなかったみたいだね。

だけどアメリカだけは、強いドルがある限り、新興国が発展することによって莫大なメリットを享受することができたのよ。アメリカはネオコンによる中東での武力行使とドルの操作で、新興国と共に経済成長するトリックを行使出来る唯一の帝国だったから。

日本は新興国に対して経済援助なんて言葉を借りながら、一方で植民地のように搾取しようとしていただけじゃない。でも、ODAにしても有力者たちの資本蓄積に貢献しただけで、やがては日本の思惑とは無関係に独自の経済成長を遂げるようになった。飼いだのような扱いをするから、指を咬まれることになっちゃったのね。

だって核保有国でもない日本に威厳なんてないもの。北朝鮮が中国の傘下にあるということは、日本よりも中国との関係を優先する

アメリカは、北朝鮮に反発する日本を切り捨てるのが得策だということは当たり前じゃない。

日本もユーロ諸国のように、グローバル経済とは無関係に、人間として対等な立場で東南アジア諸国とリージョナブルな関係を築いていれば、最も悲惨な状況だけは回避することが出来たのに、自業自得ね……）麻由香は夢の中で自問自答していた。

「はい、先生！」

小学一、二年生くらいの女の子が一人、手を挙げた。先生は少し迷惑そうな顔をした。他の子供たちはというと、「あーあ、またか」というような反応だった。

「何か質問ですか？」

先生が仕方なく指名すると、その子は「先生は彼氏いますか？」と、唐突な質問をした。

「はい、いますけど……」

先生は、どのような質問にも誠実に対応することをモットーにしているらしく、優しい口調で答えた。

「もし結婚されるとしたら、子供は何人くらい欲しいですか？」

「今の時代に育てるのは大変だけど、やっぱり一人くらい欲しいわね」

「お子さんは幸せになれると思いますか？」

その子は先生が善意で答えてくれるのをいいことに、立て続けに質問を浴びせた。

「さあ、分からないけど……なれるといいわね。みんなが頑張ってくれるから、きっとなれるわ。それじゃ少し休憩した後で農作業の授業が始まるので、長靴に履き替えておくようにね。それと、担当の先生の言うことを良く聞くように。それから、今日は中国からみんなへのプレゼントがある日だから、東君、帰るとき配ってあげてね」

「はい分かりました、確かに」

返事をしたのは、さつき発言していたリーダーだった。

「でも……」と、さつきの女の子が席を立てて発言した。

「おじいちゃんが、その時代にはサステイナブルエコノミーのような、保守的な政策は時代遅れだったと言っていました。」

女の子の発言に教室内がざわめいた。

先生は少し眉をひそめて「あなたのおじいさんって、確かふた月くらい前に殺されて、犯人も分からないままだったわね。お気の毒に……あの時代は、外国の情報も含めて、インターネットが検閲もなしに利用できたから、間違った情報に振り回される人が多かったの。デモをしていたNGOの人々や、おじいさんも……今なら、ちゃんとした情報以外は削除されているから、先生も安心してください。じゃあみんな、服を破いたり怪我をしないようにしてください」

先生はコスチュームで頭の部分を覆い、銀色のサングラスを掛けながら注意事項を述べた。子供たちも先生にならって身づくろいした。

先生が教室を出るとき、的外れな質問をした女の子が先生に駆け寄り「サステイナブルエコノミーで、未来が幸せになれるんですか？」と、つぶやくように言って、答えも待たず銀色の長靴に履き替え、八割がたが田んぼになっている校庭の方へ走って行った。

「おじいちゃん先生、こんにちは」

「こんにちはマユカちゃん、二日続けて一番だねえ、もう少しみんなと遊んでいればいいのに」

その女の子もマユカと呼ばれていた。（麻由香の夢に登場する二ユータントと呼んでいる子供は、みんなマユカという名前で、何らかの意味で独りぼっちだった）

今日植えるための苗の準備をしているおじいちゃん先生も、当然のように皆と同じ格好をしていた。少し東北訛りのあるおじいちゃん先生は、似合っていない銀色のサングラスを太陽に反射させて笑っていた。

「お話することないもの」

マユカは、畦の上に綺麗に並べられた苗の一束を手に取り、なぐめながら言った。

「そうか、お兄ちゃんやお姉ちゃん、優しくしてくれないのかい？」  
「別に優しくなくてもいいけど……ねえ、先に植えてもいい？」

「駄目駄目、そんな勝手なこととして、苛められたりしたら大変だよ」  
おじいちゃん先生が少し咎めるように言うと、マユカは苗を元の場所に戻して「みんな歳が離れているし……お母さんも心配しているけど、苛めなんてないの」と言った。

間もなく、長靴を履いた子供たちが出て来て、おじいちゃん先生の前に集合した。マユカもその前列に加わった。

「先生、よろしくお願いします」と、一番前でリーダーの東君が言った。

「はい、よろしく。今日はこの田んぼに昨日と同じ要領で、一人一条を植えることにします。年長の人から順番に、苗を取りに来てください」

列の後ろの子供から順番に苗を受け取り、田植えが始まった。マユカが植え終わって田圃から出た後、まだ終えていない年少の子供たちの分を、上級生が手助けしていた。

農作業の授業が終わり、長靴やコスチュームの泥を水道水で洗い流すと、子供たちは再び校舎内へ戻り、長靴を履き替えて先生のいない教室へ入った。誰も汗をかいだ様子がないのは、彼らが身に付けているコスチュームが、余程通気性があり、しかも撥水性に優れた材質で作られているのだろう。

教壇の横に、中国からのプレゼントだという大きな箱が置かれていた。その中に入った紙袋を、リーダーが年少の者から順に配った。袋の中身は、飴やクッキーなどのおやつだった。

中国の製品だからといって誰も躊躇する様子はなく、すぐ口にはおはる子もいたが、大抵の子はそのまま持って帰るようだった。

「整列！」

リーダーが号令を掛けると、みんな廊下に出て朝来たときと同じ

ように群れを成した。

子供たちのグループは、帰り道で二台の車とすれ違った。周到な紫外線対策が施されている以外、某社や某社のスタイルそのままに日本色の強いデザインだったが、片方の車には英語の、もう一方の車には中国語の、見たこともない大きなエンブレムが、これ見よがしに配されていた。

### 第三章 日常

夢から醒めた麻由香は、目覚めた場所が獄中でないことを確認するために、部屋の中を見渡した。

そこには大学一年生の麻由香の日常があった。

「今日は月曜日で、お母さん病院だっけ」

麻由香は、まだ鳴っていない目覚まし時計のボタンを押し、パジャマのまま机に向かい、パソコンを開くと夢の内容を書き込み、父親が経営する病院へ送信した。それからプリントアウトした用紙を持って、ダイニングキッチンへと向かった。

「おはよう、お父さんお母さん」

麻由香は夢の内容が書かれた用紙を父親に手渡しながら挨拶した。

「おはよう麻由香。ボーイフレンドとは仲良くしてるかい？」

麻由香の父親は、赤パプリカと黄パプリカの入った野菜サラダにバルサミコドレッシングを振りかけながら言った。

「してるしてる、親交してる」

「してるしてる、ボーツとしてるでしょ、早く顔洗ってらっしゃい」  
ちょうど、麻由香のトーストを皿に置いていた母親が言った。

「はい」

麻由香は洗面所で顔を洗い軽くうがいをした後で、鏡に映った自分の顔を確かめるように見た。そこには、夢見る大学一年生の麻由香がいた。

「今日は繭ちゃんどうだった？」

食卓に着いた麻由香にコーヒークップを手渡しながら母親が尋ねた。

麻由香の夢にいつも出て来るマユカという少女のことを、今田家では「繭ちゃん」と呼んでいた。

「うん、もう近未来じゃなく目と鼻の先の未来になってたよ。でもやっぱりニュータントは繭ちゃんしかいないの。政治は情報規制を

敷いたトップダウンファシズムだから、現在のボトムアップファシズムと比べれば、みんながコントロールされることを承諾している分、明快で気持ちいいかも。

幻想にしろ、一つのナショナリズムが維持されているから、繭ちゃん以外の人間には日本人としての保障が与えられているの。今の世の中、政治はボトムアップの形態を取っているけど、それ以上にパブリシティーされているから、やいのやいの言う人間が一億人いたって政治は変えられないわ。

情報に翻弄されて右往左往しているだけだもの……まあ、それがトップの狙いでもあるんだけど。今朝方の夢で謎は解けたわ、要するに日本は私が見ていた夢のシナリオどおり走り続けるしかないみたい」

コーヒーを口にした麻由香は、ひとつため息を吐いてからトーストをほおばった。

夢の中の自分が牢獄に繋がれていたということは口にしなかった。「アメリカと中国資本の日本車が……いよいよ遙か未来から現代まで遡って来たという感じだな。一応これは、守秘義務ということ……それにしても、近未来の夢においてもだが、お前たちの活動が反映されていないのには、不思議な気がするなあ……」

麻由香の父は夢の内容に目を通してから、少々納得の行かない表情を浮かべ、用紙を四つ折りにして、スーツの内ポケットにしまった。

「きつと尻すぼみになっちゃうのよ、私って小学生の頃から気まぐれだったじゃない。それより陽平おじさんは？」

麻由香は夢から話を逸らすように、母親に尋ねた。

「今日は病院へ行く日だから、先に食事済ませて、オスマン帝国がどうのこうのとか、ぶつぶつ言いながら部屋へ戻って行っただわよ。第二次世界大戦直後から始まって、一体何処まで遡る積もりなのかしら。麻由香の見る夢とはまるで逆なんだから、笑っちゃうわね。しかも近頃は異国の物語りになっちゃうてるし、一体どうなってる

のかしらねえ陽平さんの頭の中は……そうはいつても、本人の意思じゃないから分かるはずないわね。だいたい遺伝性アルツハイマー発症している身で、前日の夢のことなんかちゃんと覚えているのかしら。この家に来てから外へ出てないし、引き籠もってちゃ余計にひどくなるかも……ねえあなた、小遣い少しくらい渡したほうがいいかしら？」

麻由香の母にとっては、オスマン帝国の台頭などは世界史における偶然の産物であり、日本ましてや自分とは、何の関わりもない存在であった。だが、過去の人物の一生が、現在の人間のテキストと成り得るのであれば、一つの国家の誕生から滅亡までの歴史が、現代国家の未来への指針とならないとは、限らないだろう。何故なら国家も人間と同じく、転換期に対応している理論などなく、過去の様なケースを検証しつつ、手探りで実践する他はないからである。「そうだなあ。金がなきゃ、外に出て気分転換も出来ないか」

両親の会話を聞いていた麻由香は「陽平おじさんもだけど、お父さんもお母さんも、能天気さでは負けていないわね。小遣いなんか渡す理由もなければ、渡してもどうせパチンコして五十肩がひどくなるだけじゃない」と言って、小さくため息をついた。

「それもそうよね。でも、引き籠もってちゃ病気の進行が……現に夢だつてつじつまがあってないようだし」と、母親が心配そうに言うとうと、麻由香は「そんなのお父さんに任せておけばだいじょうぶよねえ？」と父親の方を向いて言った。

「まっ、任せなさいって。えーっと、その夢についてはだな……」

麻由香の父は総合病院の経営者兼院長で、元は外科医であるが、麻由香が小学生の頃に自殺未遂をしかしたのを契機に、臨床心理士の資格を取り、今は発達心理学と教育心理学の見地からのカウンセリングを行っている。

父親の、頼りない言い方に対して、麻由香は「心配いらないわよ。陽平おじさんの夢も、ついにそこまで来たかつて感じね。内容を聞かなくとも、フォーカスを絞ってみると、私の夢とすごくシンクロ



しているもの。ただ、その先は如何に？って思いもあるけれどね」  
と言ってから、思い出したように「あっそうだ、今日友達二人来るかも知れないから」と付け加えた。

「あら、月曜日なのに珍しいわね。メグちゃんたち？」

「後輩じゃないの、大学の同級生」

麻由香が言うとお勤しようとして席を立つた父親が「へーっ。ドリーミング・シンドロームの麻由香に同級生の友達が出来るってことは、その友達は余程の親和性を持つてるということだなあ。どうせお前のことだから、男じゃないよな」といかにも、残念であるかのように言った。

「女よ。一人は、確かに親和性を備えているわ。でも、もう一人は全く逆ね、持っているとしたら神代の神話性ってとこかしら」

父親は「そうか、女か……」と見え透いた失意の表情を浮かべた。  
「いくら親和力があつたって、巫女と女神の二人を相手にしなきゃならないなんて、世の中には司祭のような人もいるもんだなあ。それはそうと、わしも友達連れて来るから合コンしようや」

父親はしゃあしゃあと本音を切り出した。

「友達つたって、どうせ陽平おじさんと祐介おじさんでしょ。罰当たりな人間ばかりじゃない。神罰が下つてもいいんなら挨拶するくらい別に構わないと思うけど……。お酒は控えてね」

「お神酒か赤ワインにするからだいじょうぶだって。よっしゃー！あ、お母さん、今日は大変だろうから、晩飯食つて来るわ、ってことでよろしく」

現金な父親は、そう言い残すと意気揚々とエレベーターに搭乗した。しばらくして、マセラティのエンジン音が、いつもより声高に響いたかと思うと、すぐに遠のいて消えた。

「行つてきまーす」

齒磨きを終えた麻由香は、廊下の突き当たりにある階段を下りて、自転車に乗り大学へ向かった。今朝見た夢の後では、朝の陽射しの優しさが、とても大切なものと思えた。

## 第四章

### ねえおじいちゃん

悲喜こもごもの小世界の外で、慈愛に満ちた晩秋の夕暮れが放つ光は、パチンコ店にいる客の誰一人にも届いてはいないようだった。パチンコという彼らの欲望は、何も本源的なストレスを相殺する必要から生じたものではなく、パチンコそれ自体に射幸心を煽られ発生したものだ。そして、打ち続け、負け続けることにより増幅するストレスは、パチンコ台の支配下での相殺は不可能である。

「でも世界はまだ続いている、チャンスがなくなつた訳ではない」  
田所令子は、パチンコ屋でアルバイトをしている最中に、心の中でそんな訳の分からない言葉を呪文のように繰り返していた。祖父が亡くなってからもうすぐ一年が経とうとしているが、亡くなる直前の病院での祖父との会話が、夕暮れ時になると今でも鮮明に蘇ってくる。

「そろそろ夜は冷えてくるね」

令子は、個室になつて病室の窓のカーテンを引きながら、ベッドに横たわっている祖父の顔を見た。窓から差し込む晩秋の夕陽が、頬の肉がすっかり落ちてしまつてもなお、柔和さを失わない祖父の表情に彩を添えていた。

「受験勉強は進んでいるか？」

丸椅子に腰掛けた令子に祖父が言った。

「高校生になつてからは、勉強のことは言わないんじゃないの？」と令子が言うと、祖父は「ああそうだったな」と言って笑った。祖父は夏の終わりから入院していた。今年八十歳になつた祖父は肺癌で、そのことは既に祖父にも告知されていたが、意に介していいようだった。

「相変わらず冴えない格好をしてるな、無理しなくてもいいのに」  
祖父は令子のみすばらしいまでの服装を見て、申し訳なさそうに

言った。

「チープな感じが新しいの、おじいちゃんには分からないんだよ」  
「そっか、それならいいんだが」

祖父はそれ以上何も言わなかったが、令子の服装は流行などとは無縁のものだということは祖父にも分かっていた。

令子が生まれるずっと以前、祖父が会社を退職して以降、祖父の家族（祖父、祖母父の三人）は祖父の取り決めた「貧乏の勧め」に則って生活して来たのだ。

どのような貧乏かというと、まず持続的な空腹感を抱くことが最優先だった。空腹であれば、食欲に勝る欲望以外に囚われることもないという「正しく欲望する生活」という理念に基いているとはいえ、家族にしてみればさぞ迷惑であったことだろう。広い庭の大部分は家庭菜園となり、令子が物心付いた頃には既に祖母は亡くなっていたが、祖父、父、母、要するに家族全員が農作業の達人と化していた。令子にしても小学校を卒業する頃には、すっかりその構成員となっていた。

令子は通学するにもみすばらしい格好をしていたので、家に遊びに来た友達は大きな家と広い菜園を眼にして、例外なく驚き、学校では「令子ちゃんのお母さんはシンデレラに出て来る意地悪な継母に違いない」という風評が立った。

様々な理由で、或いは理由もなく苛められる子はいたが、令子には苛められた記憶というものがなかった（小学生のとき、一度そのような状況はあったのだが、令子は忘れているというより、そのときにすら気付きさえもしていなかった）王子様に巡り会うまで継母から虐げられ続けたシンデレラは、貧しくとも母親の愛情に包まれて育った子よりも、同情を引き易かったのである。

家庭での食事は、菜園で取れた野菜料理と、その時々 of 廉価な魚を様々な方法で調理したものが通常の夕食だった。

もっとも、毎月一度は家族揃ってレストランで夕食を取ることになっていたので、贅沢な料理を知らない訳ではなかったが、令子に

はあまり馴染まなかった。

小学生の頃、令子は母から冗談めいた繰れごとを聞かされたことがある。父と付き合い始めて間もない頃、月一の行事であるレストランでの食事に招待され、まんまと引ッ掛かって結婚したと言うのだ。祖父の入院まで続いた月例行事は、シャトー・ラトゥールの好きな祖父が、唯一捨て切れなかった贅沢であつた。祖父は、ボルドーのヴィンテージ以外のワインは好きではなく、ロマネコンティードも飲んだことがなかった。祖父にとってラトゥールは、世界で一番好きな食べ物だつた。

おそらく月一回のレストランの費用だけで、一カ月の分の食費の半分以上を占めていただろう。「ハレの日」的な要素を含んでいたと言えないこともないが、令子はその都度「貧乏の勧め」と矛盾しているなと感じていた。だが、祖父が亡くなつて一年が経とうとする今では「貧乏の勧め」とは、お金があるうと無かるうと、欺瞞に満ちた資本主義システムに振り回されないことだつたんだなと理解出来た。

大手広告代理店に勤めていた祖父が突然退職したのは、会社が空前の成長を遂げていた一九七三年の十二月のことだつたと聞いている。その時もちょうど令子の父が高校三年生で、受験勉強の真最中だつたそうだ。

「私は家族の受験の邪魔ばかりしているな。」

祖父が申し訳なさそうに言つた。

「ねえおじいちゃん。何故会社を辞めちゃつたの？」

それは令子が以前から疑問に思っていたことだつた。中学生のとき父に尋ねると「その頃ちょうど団塊の世代の若手社員が台頭して来て、リストラされたんだつてさ。」ということだつたが、令子は全く納得していなかった。

祖父は暫く考え込むように眼を閉じた後ゆっくりと話し始めた。

「一九七三年だつたかな、オイルショックで原油の輸入が危機状態

になった年だ。トイレットペーパーの買占め騒ぎもあった。コインロッカーに嬰兒が置き去りにされていたという報道には驚いたものだよ。光化学スモッグが問題になり始めた時期でもあったなあ。ニクソンショックというのもあって、ドルと金の交換が停止になった年でもあったよ。将来、実物経済が金融に呑み込まれるであろうという危機感が芽生えた時代だった。経済成長の意味が問われると同時に、孫の行く末が心配になったものさ。最も令子はまだ生まれてなかったけど。そんな時、業界の友人にノストラダムスの予言についての本を見せられてね。ノストラダムスは令子も知っているね。

「うん、知ってる。」

今では死語だが、世の中が世紀末ブームだった頃「ノストラダムスの大予言」は、小学生の間でも大変な話題となっていた。しかし西暦二千年を通り過ぎると、コンピュータの二千年問題同様、誰も口にしなくなっていた。

「彼は本を開き一九九九年七月のくだりを指して、ノストラダムスからは予言と警鐘の連鎖を読み解かなければならないというような意味のことを言ったんだ。その時には意味が分からなかったし、一週間後に彼は死んでしまったけれどね。」

「その人って、小学生の頃モスラを観に連れて行ってもらったときに、おじいちゃんが持っていた写真の人？」

他の映画は令子がせがんで連れて行ってもらっていたが、モスラシリーズだけは、いつも封切られた初日に祖父の方から誘ってくれていた。モスラ2を観に行ったとき、祖父は誰かの写真を膝の上に組んだ手に持っていた。

「そうだよ。彼が逝ってしまってからちょうど四半世紀経った日が、モスラ2の封切り日だったのは感慨無量としか言いようがなかったよ。その頃になってようやく彼が言っていた警鐘の意味が分かったよ。今なら令子にも分かると思うが。」

「うん、その人って凄い人だったんだね。」

「今でも鮮明に覚えているが、彼が亡くなる数カ月前、豊かさの側面について私に笑いながら話していたよ。『俺は地球が無敵だという条件の下で、流行を追うこと、消費することが豊かさだという刷り込みに加担して来た。』

資本主義」マクロなネズミ講だからな。自分が欲しくもないものに魔法の化粧を施してさ。資質として豊かでない人間がターゲット・オーディエンスだった。中でも最も力を注いだのが、ステレオタイプの統合化だ。ジェンダー、年齢、バックボーンなどを細部に渡って考慮すれば、商品売り込むのも大変だからな。

男・女、大人・子供、巧みにパブリシティーすることで、その程度のステレオタイプの区分で十分な市場環境を整備して来た。勿論一〇%の経済的下層部と、一%の上層部の者を除いてのことさ。しかも、それは予想以上に成功したと思う。まあ、日の出ずる国の神話を喪失した人間なんて、金に任せた贅沢くらいしか拠り所がないから、当然と言えば当然の結果だな。

ところが、公害やオイルショックで、地球と経済成長は無限ではないと思い知らされて……。それ以上に予想外だったのは、日本国民が金という最悪のアイデンティティーを、世界に向けて叫び始めたことだ。惨め過ぎるよなあ、馬鹿だよなあ俺も……。

この先どうすればいい？ 最善の方法論を俺は手にしている。それは魔法ではなく真実だ。しかし、昨日まで先頭に立って旗を振っていた俺が、どの面さげて伝えればいいのか。

近い将来俺はリタイアするだろう。謝罪と示唆を込めた、ほんの小さなメッセージに未来を託して」と。

彼のメモはメディアによって公表されたが、リプレゼンテーションされたメッセージは彼が望んだ形ではオーディアンスに届かなかった。時代は何も変わらなかった、むしろアクセルを踏み込むことを選んだ。

他に残された彼の遺品といえば、カメラと数枚のレコードだけだった。葬儀の後、私は彼の母親から一枚のレコードを貰い受けた。

それはブッカー・リトルのものだった。その後すぐに私は会社を辞めた。相変わらず彼が開発した戦略に固執するパブリシティーには、私自身も辟易していたからね」

祖父の枕元では、今もブッカー・リトルがスコット・ラファロの奏でるベースに煽られながら、颯爽とトランペットを吹いている。そのCDは令子が、入院して以来レコードが聴けなくなった祖父のために、買って来たものだった。

令子は、物心ついてから今日まで、変わらずに祖父のことが好きだった。物を買ってくれたり、小遣いをくれた訳でもないのに小学生の頃など友達と遊んでいるよりも祖父に付き纏っていることが多いことが多かった。「ねえおじいちゃん」と言うのが小さい頃から令子の口癖だった。そのあとに「ピーピーエムって？」とか「ポリアンナしんどろおむって？」とかの質問を浴びせるのだ。

「令子はパーセントって知っているね」

「うん。百分率のことでしょ」

「ピーピーエムはパーミليونと言って百万分率のことなんだ。大気中の二酸化炭素の濃度とかを調べるとき百分率では間に合わないからね」

「今日学校でホームルームの時間に、先生がギターを弾いて歌ってくれたの。パフという英語の歌だったけど、先生が日本語の歌詞カードをくれて、そこにピーピーエムって書いてあったの」

令子が小学校三年生のときの担任は定年間近の男の先生だった。校長先生より年上で、父兄の間では好ましく思っていない向きもあった。親の影響からか、子供たちも先生のことを少し馬鹿にしているようなところも見受けられた。

「先生は何故校長先生にならないの？」などと皮肉っぽく質問する子もいた。

令子は、親譲りと思える狡猾さが覗く眼をしたそんな子の喋り方に寒気をもよおすことが度々あった。

「ねえおじいちゃん。先生は何故校長先生になれないの？」と質問したとき、祖父は「令子はなつて欲しいのかい？」と質問を返して来た。

「なつて欲しくないけど……」そう答えると祖父は「令子のような子供がいるからなりたくないんだよ、きつと」と言つて笑つた。次の日祖父が「これは友人の教育長に聞いたんだが……秘密だぞ」と任用試験を受けるのを断つていることを教えてくれたのだ。昔、中学校の校長だつた祖父の友人が、いやいやなつた教育委員の互選により、教育長をさせられていたのは事実だが、任用試験の話が事実どうかは知らない。

「ああ、それはピーター・ポール＆マリーという一九六〇年代のアメリカの男二人女一人のグループの名前だよ。その頃の高校生や大学生は学園祭などでもよく歌つていたよ」

「ふうん。先生がくれた訳詩カード読んだけど、パフって可哀相な歌ね」

パフという歌の歌詞は、少年がパフというドラゴンと友達になり、自由に世界を駆け巡るが、やがて少年はドラゴンのことを忘れ去り、ドラゴンは寂しく眠りに就くという内容だつた。

「誰が可哀相なんだい？」

「パフのことを忘れてしまった子が」

「そうか……。令子は賢いなあ」

「どうして？私、遊んではっかで勉強してないよ」

「視座が自由だということだよ」

「しざつて？」

「令子にはちゃんとしたりテラシーが備わっているということだよ」「りてらしーつて？」

「うーん……。もうすぐ学校で習うこともあるかと思うが、方法論としてだから何の役にも立たないだろう。リテラシーの基本はその人の心の資質にあるからね。今はそんな言葉があるとだけ覚えておけばいい」



そう言った祖父は笑いながら令子の頭を軽く撫でた。令子にはりてらしーが何ものかなんて分からなかったが、仮にそんなものが備わっているとすれば、おじいちゃんの孫だからだと思っていた。

「ほうほうるんって？ししつって？」

祖父と令子の会話は、いつもそんな風に際限なく続いて行くのが常だった。

同じ頃令子は、先生から「田所さんのポリアンナシン드ロームの影響は凄いなあ」と言われた。三年のとき同じクラスになった、お金持ちで成績が良くて、喘息だったので、体調が悪いと体操を休み、授業中にも咳き込むことがある女の子がいた。その子はよく「病気が移る」とか言われて苛められていた。令子は休み時間にみんなが走り回っているとき、じつと席に付いたままのその子の横で馬鹿話ばかりしていた。その子の家へも学校帰りによく遊びに行ったが、その子の親が先生に勉強の邪魔だからと言い付け、先生から注意されたので行けなくなった。学校でその子とばかり一緒にいたことで、令子もからかわれたり無視されたりした。だが令子はそんなことを全く意に介さなかった。理由は明白だった。令子にとって一番大切なものは、大好きで尊敬もしている祖父だったからだ。令子にとって同級生に苛められることなど、祖父に相手にされなくなることには比べるとほんの些細なことだった。何らかの理由で祖父がいなくなったらと考えただけで、令子は悲しい気持ちになった。

令子にとって祖父はパフだった。あの少年はドラゴンと決別した後どうなったのだろう。いつかドラゴンのことを思い出し、自分が置き去りにして来たものを懐かしく思うことがあるのだろうか。それともドラゴンのことなど忘れ去ったまま老人になっているのだろうか。その老人は祖父とは全く違う人間のように、令子には思えた。令子は友達やその子の親からの仕打ちにもめげずに、休み時間にその子の横で馬鹿話を続けていた。やがて友達も令子に対抗するようになり、その子に話しかけるようになり、笑いを取ると自慢げに令子にVサインを出した。先生がその子の親に状況を話してくれてから

は、家へ遊びに行くことも認められた。

そんな時、先生が令子にポリアンナ・シンドロームの話をしたのだった。祖父に質問すると、「『少女ポリアナ』という物語の主人公の行動が引き起こす波及効果から生まれた、二十世紀初頭の心理学用語で、日本では十年くらい前に流行ったことがあったな。」と言って令子をビデオショップへ連れて行き、十一巻もあるビデオを買ってくれた。祖父も知らなかったようだが、一九九八年は「愛少女ポリアンナ物語」という十年以上前のテレビアニメのビデオがちょうど発売された年だった。

令子が祖父に、そのような高価な物を買って貰ったのはそのときが初めてで、最後だった。令子はそのビデオを喘息の子の家に預けて、学校帰りに一緒に観た。その子は学校以外への外出を止められていたからだ。その子は小学校を卒業すると、両親と一緒に沖縄へ行ってしまった。その子は「愛少女ポリアンナ物語」をすごく気に入って「ポリアンナって令子みたいだね」と言っていた。令子も物語りを気に入っていたが、本当に感動したのは第二部のオープニングテーマ「微笑むあなたに会いたい」とエンディングテーマ「しあわせ」だった。

祖父の前で二つの歌を口ずさみ「ねえおじいちゃん。この歌いいでしょ」と言うと祖父は「令子は歌手は無理のような気がするが、すごい作詞家になれるよ」と言った。それからというものの、中学生になるまでは毎日のように歌詞を作って祖父に見せていた。今から思えば稚拙な歌詞だったと思うが、祖父は添削することもなく「このフレーズ貰ってもいいか？」などと言っていた。会社を辞めてからの祖父は、細々とはあるが作詞を生業としていた。

「明日は学校休みだから、朝から来てもいい？」

「ブラッド・メルドーの新譜、出てたっけ？」

「うん買って来る。一緒に聴こうね」

それからの令子は祖父が亡くなるまで毎日病院を訪れた。令子が

最後に祖父と話したのは十二月に入って街にジングルベルが鳴り始めた頃だった。

午後五時に病室に入った令子が、カーテンを引こうとするのを制止した祖父は「今日はそのままでもいい」と言った。

祖父の横で令子は相変わらず「ねえおじいちゃん。パフはまだ湖のほとりに住んでいると思う？」などと質問していた。

「パフは幼生のままだし、モスラは繭の中だろう。パフもモスラも子供たちが未来を思う願いから生まれる希望だからな」

いつものように穏やかな表情で令子に笑い掛けた後、祖父は静かで深い眠りに就いた。令子が少し震える手を口元にかざしても、空気は何も答えなかった。その代わりに、エリック・ドルフィーのサックスと、ブッカー・リトルのトランペットが、祖父と令子がいる空間を一九六一年のファイヴ・スポットにタイムスリップさせて、微かに揺らせていた。まるで、令子の祖父へのレクイエムであるかのように。

令子はナースステーションに通報してから、家へ電話を掛けた。

両親が病院へやって来るまでの一時間を、令子は窓に映るライトアップされた街を見て過ごした。寂しい気持ちは日に日に募って来るだろう。だがその時令子が流していた涙は、祖父が今日まで側にいてくれたことへの感謝の気持ちだった。「ねえおじいちゃん……ありがとう」

慌ただしい何日かが過ぎ去り、息を潜めたクリスマスが終わった翌日、令子は久しぶりに祖父の部屋に入った。そこは小学生の頃から令子にとつての聖域だった。雨が降る日も風の日も、真夏日も真冬も、花粉が飛び交う日も友達と喧嘩した日も、祖父と話をしてるうちに「今日も一日楽しかった」という気分になれた。

今思い返してみると、令子にとつてのパフは祖父だったのだ。祖父のいない部屋、祖父がもう使うことのなくなった机、令子は祖父の椅子に腰掛け眼を閉じた。「ねえおじいちゃん……」と呼び掛けてみても返事はなく、冷え冷えとした空気が祖父の不在を一層確かなも

のにしていた。

令子は涙が溢れそうになった眼を開け、もう一度部屋の中を見渡した。本棚には祖父が好きだった本とレコードが並び、別の棚にはCDや、令子が修学旅行で買ってきたお土産の置物やらが並んでいた。机の上には時代遅れのワープロとプリントアウトされた何枚かの歌詞、その隣にはA4用の茶封筒が置かれていた。茶封筒にはザヴィヌル様と書かれたその下にパストリアスと書いてあった。令子が高んだらうと思って封筒の中身を取り出すと、それは原稿用紙二百枚分からなるモスラ4のシナリオだった。祖父がいつの間にも何のために書き上げたものか、今となっては知る術もない。

モスラ4 二〇二三年、一九九九年の警鐘が「喉下過ぎれば熱さを忘れる」の法則により、単なる寓話と化して以降の最後通告の年、第一に環境破壊が産んだデスギドラ、第二に環境汚染が産んだダギーラ、そして第三には過剰に対する無秩序な統制が産んだキングギドラにより、地球は壊滅の危機に瀕していたにもかかわらず、未だモスラは現れていない。

言うまでもなくモスラは子供たちの見方であり、苛めっ子、苛められっ子、元気な子、おとなしい子、全ての子供たちを助けてくれるはずなのに、二〇二三年の地球には存在していない。モスラは絶滅してしまったのだろうか？否、生まれていないのだ。負の要素から生まれるものを怪獣と呼ぶなら、正の要素から産まれるものがモスラなのだ。

モスラとは、未来の地球に希望を見出すことの出来る、子供たちのリテラシーの総体なのだ。様変わりした地球の上に、相も変わらず子供たちは溢れかえっているが、キングギドラに取り込まれることにより、殆どの子供たちが傀儡化していた。だが、残された未開の地に、正しいリテラシーを持つ子供がいさえすれば、地球上の何処かの島に、既にモスラは存在し、のんびりと羽を伸ばしているのではないか？それならば、地球の未来を憂える必要はないのではな

いか？否、そんな子供（モスラ4では、ニョータントと呼ばれている）がいたとしても、マイノリティーである限りモスラは永遠に繭から出て来れないのだ。

妖精が三体、旅立ちの準備をしていた。それは、大人たちが忘れてしまった、それ故に子供たちに引き継がれるはずもない未来への意志を、ネイティブ・アメリカンの間ですら、今や昔話でしかない未来との対話を、全ての子供たちの心に蘇えさせるための旅であった。しかしながら、既に子供たちの純真は、希望に満ちた未来を疑うことすらない程に汚染されていた。与えられる現実を拒否し、未来の真実を見つめることなど、デューティー・フリーが信条の彼らのリベラルに、反旗を翻す行為でしかなかった。全ての大人のみならず、大多数の子供に行く手を阻まれることとなる、厳しい旅が待ち受けていた。

## 第五章

### パチンコ

令子はこのパチンコ店で、女性ホールスタッフのアルバイトをしている。ホールスタッフの仕事は決められたブロック内のパチンコ台の管理と客へのサービスである。連続でフィーバーした客がいれば既に満杯となった約二千個入る箱を客の座席の後ろへ下ろし新しい箱を客の前に置いてやり、終了するときには全ての箱を計数機まで運んでレシートを発行してやるのが主な仕事である。重労働なので時間給は千三百円となっている。令子は今年大学に入学して下宿生活を始め、その後すぐにこのアルバイトを始めた。月曜日の定休日以外は毎日午後五時から九時まで働いている。

令子はこのアルバイトを始めて半年以上になるが、大学では経営学部 に在籍し、講義を休むこともなくそれ以外の研究活動も行っている。毎日は多忙を極めている。

令子は苦学生ではなく親からはキャッシュカードを持たされているが、アルバイトを始めてからは利用したことがない。祖父亡き後も「貧乏の勧め」を実践しているのだ。もっとも、学費や下宿代は親の銀行口座から引き落とされているので、普段の生活は時給千三百円×四時間×二十五日のバイト収入でお釣りが来る。令子がパチンコ店でアルバイトするのには他に特別な理由があった。

令子の父親は、祖父の生前から、隠れて競馬やクラブ通いはしていたが、パチンコはしない。祖父亡き後その理由を尋ねたところによると「自分の欲望の尻尾を追い駆けて遊ばされているようなものだから」ということだった。然しながら実情に明るくない令子にしてみれば、競馬もクラブ通いも同じようなものと思えた。

今になって言えることだが、パチンコほど巧妙に、ストレスを再生産することで欲望を持続させる娯楽は、世界中探したとしても（麻薬以外には）見当たらないだろう。それにしてもパチンコ市場は三十兆円以上もあり、土木建築市場が約五十兆円食品市場が約百兆

円であることを考えると、とんでもない巨大レジャー産業といえる。令子はパチンコにはきつと魔力が備わっているとしか思えなかった。令子は幼い頃から折に触れて消費活動に興味を抱くことがあった。テレビゲームやボージョーヌーボー（古き良き時代のことだが）の発売日に行列が出来ること、中でもパチンコ店へ通う客の心理は最大の謎だった。パチンコ店でアルバイトするようになって最初に驚いたことは、客の平均年齢が予想よりも遥かに高かったことだ。ウィークデイであれば三人に一人は六十歳を超えている。公的年金の支給額が年四十兆円だから、単純に計算すると約二五％はパチンコ市場で消費されていることになる。

そんな客の中で一際異彩を放つ人物が、今日もパチンコ台に向かっている。五十歳を少し過ぎたくらいの、年金を支給されるにはまだ早いと思われる人物だ。

もう晩秋の気配が漂っているというのに、陽平はいつもながらのアロハシャツ姿で、同じパチンコ台の前に座り続けている。

「今日も営業妨害してますね、資産家さん」

すっかり顔なじみとなってしまった令子は、陽平の隣で連続してフイーバーしている客の、パチンコ玉が溢れそうになった箱を降ろす作業をしながら、少し皮肉めいた笑顔で言った。

今日の陽平は、一万円くらい投入したところで一回だけフイーバーしたきり、出球は早や打ち尽くして、すでに何万円か投入している。そのどこが営業妨害なのかと首をかしげる動作より早く、令子は背を向けてコールランプの点滅している台へと急いでいた。

客が多い日のホールスタッフは重労働だ。客がその台を打ち終えたときには、積まれた箱を抱えて計数機へ運ばなければならない。パチンコ玉一個が五グラムだから二千個入るとして、一箱の重さは十キログラムとなる。陽平は小柄な女性ホールスタッフが、一度に四箱も抱えて運んでいる姿を目にしたとき、パチンコ店は新人研修か何かで、ウェイト・トレーニングを実施しているんだと、勝手に

決め付けていた。

陽平は、シャツの胸ポケットに手を入れ、取り出した最後の一万円札を、再び胸ポケットに押し込み、パチンコ店を後にした。

パチンコをするときの陽平の所持金は十万円である。昼過ぎに店へ行き、打つ台といえば一番端っこで、各パチンコ台の上に設置されたカウンターで、パチンコ台のデジタルがある程度回転している台を選ぶと、何があるうと台を移動することなく打ち続けるのである。そうして、所持金がなくなれば、何らかの仕事を終えた疲労感で充足したかのように、帰路に就くのだ。

今日は、たまたま車のガソリンが少なくなっていたのを思い出して、一万円残しておいただけのことだ。もつとも、いつも所持金がなくなる訳ではない。月に一度くらいは十万円くらい儲かることもある。

このところ陽平は、この店以外でパチンコをしていない。従って、定休日である月曜日が陽平の休日でもある。

それでは、陽平が月にどのくらいパチンコにお金を費やしているかといえば、月に二十五日通うとして、おそらく百万円程度だろう。セルフのガソリンスタンドで給油しながら陽平は、ホールスタッフに「今日も営業妨害している」と言われたことを思い出していた。

翌日の土曜日、陽平が祐介から電話で起こされたのは午前六時だった。

「サーフィンイコウヤ」

祐介は陽平の幼なじみだが、高校を卒業して以来付き合いがなかった。

それが何年か前、その頃陽平が身を寄せていた家に電話があり、その第一声がやはり「サーフィンイコウヤ」だった。

遙か昔、陽平と祐介とは同じ高校に通っていた。休日に波がありさえすれば、手作りのサイドライドキャリアを装着した自転車にボードを積んで、仲間たちと近所の海岸へ出かけたものだ。その頃はイ



インターネットの波情報などなくて、波当番という奴がいた。この町にはもうサーフィンの出来る海はない。祐介は土曜日と日曜日には波情報をチェックして、どこかにいい波があれば、誘いの電話を掛けて来る。

高校を卒業すると、他の仲間は大学へ進学したが、祐介は消息すら不明となっていた。本人いわく、「セキドウニチカイトコロデサーフィンシテタ」らしい。陽平は進学が決定していたにも拘らず、直前に両親を事故で亡くし、大学の門をくぐることはなかった。その頃この町には大学がなく、仲間はみんな遠くの町へ旅立って行った。

陽平はこの町の海が護岸工事により波を失うまで、アルバイトをしながらサーフィンが続けていた。

「肩が上がらない」

「ゴジウカタハヤクナオセ」と言っただけで電話が切れた。

先週の土曜日にも電話があり、二人は同じやり取りをした。

祐介がこの町に戻ってから、サーフィンを触媒とする、高校時代の仲間で、今も地元に残っている者が集うようになった。

去年は五月から十二月の始めまで、祐介のキャンピングカーで四国・東海・日本海のいたる所を巡った。高校生だったあの頃キャンピングカーがあれば……全員が祐介になっていただろう。

齢五十を過ぎると、十二月の日本海でサーフィンをした夕暮れ、冷水シャワーを浴びるのは一種の苦行だった。その日以来春まで、ポンポコリンクラブではサーフィンという言葉はタブーと化した。

そして春が来て、ようやくサーフィンが雪解けとなった頃、陽平の肩は凍りついたように動かなくなっていた。サーフィン仲間の一人が、院長兼経営者である病院で五十肩と診断された。原因は運動不足とパチンコ以外の何者でもなかった。半年以上も過激な運動を続けた後、何カ月もパチンコばかりしていたのだから、無理もないことだろう。

今のパチンコ台には当たり前のように、高齢者向けの画期的な機能が備わっている。

リーチが掛かったときなど、画面にボタンを押せと指示が出て、エッサーとばかり受け皿付近にあるボタンを連続して叩くことで、ボケ防止・五十肩防止になるのである。これはパチンコ愛好者へのサービスと言えないでもないが、ようするに高齢者が身体を壊すとパチンコ店が困るのだ。

五十肩になってからの陽平は、リーチが掛かると画面の指示に従い、ボタンを叩くようになった。叩いたからといってフィーバーし易い訳ではないが、高齢者にとっては健康上のメリットがあるし、高齢者でないとしても、それなりにストレスの発散は出来るだろう。パチンコ店の客の中には、台が壊れるのではと思うほど、ボタンを叩き続けている人がある。そんなにストレスが溜まっているなら、海へでも行つて「バカヤロー」と叫んだ方がいんじゃないかと思うが、パチンコ店の店員は、もちろんそんなことを勧めたりしない。電話の後、陽平はワープロで簡単な文章を作成し、メールで送信すると、ミルクとトーストだけの朝食を取った。その後、読みかけだった本を、三時間くらいかけて二十ページほど読み進み、昼前に家を出た。

途中、ファストフード店でミックスサンドとアイスマイルクの昼食を済ませ、その五分後にはもうパチンコ台の現金投入口に一万円札を滑り込ませていた。

リーチが掛かり、ボタンを叩いている陽平の肩を誰かが軽くきんと叩いた。

陽平がパチンコ台から手を放して振り返ると、若い女性が指をヒラヒラさせて愛想笑いをしていた。

「ボタンを押さなくてもいいのですか？」

五十肩のリハビリなどいつでも出来るので、敢えて叩く必要などない。

陽平は黙っていた。

私服なので判りづらかったが、よく見ると昨日のホールスタッフだった。陽平はこれまで午後五時以降の制服姿しか見たことがなかった。

「お茶しません？」

陽平は答えず、再びパチンコ台のハンドルを手にした。

「お話したいことがあるんです」

陽平は誰であろうと、積極的に近付いてくる人間が好きではなかった。というより、一般的な会話そのものを嫌っていた。

パチンコの画面を見つめる陽平の目の前に、不意にモスラのDVDが現れた。

「お話がしたいんです」と真剣な顔で令子は言った。

陽平は上皿に僅かに残った玉を打ち終え、返却ボタンを押しカードを取り出して、カウンターの近くに設置された現金交換機へ向かった。

陽平が返却された九千円を手にしたとき、令子はカウンタースタッフと言葉を交わしていた。その女性は、令子より少し年長で、この店で陽平が話し掛けることのある唯一の存在だった。

パチンコの出玉は、等価交換の店を別にして、現金化するより景品と交換する方がはるかにお得だ。その当たり前のことを陽平も知っている。だからCDとかDVDは極力この店で手に入れるようにしているが、陽平の希望するものが置かれていることはほとんどない。そんな時、そのカウンタースタッフに相談すると、すぐに確認をとってくれるのだ。一昨日も、モスラのDVDは要望にお応えしかねますと言われたばかりだった。陽平と目が合ったとき、カウンタースタッフは笑顔で軽く会釈した。

店から出た陽平は車の方へ歩み寄った。

「パンダですね」

陽平の後を付いて来た令子が、薄黄緑色の車を見て言った。

「なぜこの車を選んだのですか？」

助手席に乗り込んだ令子の問いかけに、陽平は答えなかった。

「選んだ理由はこうでしょ。今のパンダは同クラスの日本車とデザインもさしてかわらない。燃費悪いけど価格だって少し高いだけだとかね」

陽平は何も言わず、車を走らせた。行き先は昼食を取ったファストフード店。

二人はアイスコーヒーを注文した。

「さっきはごめんなさい。人のセンスをとにかく言ったりして。まっ、ディーラーはしっかりしているし、カラーリングがいかにもエーゲ海的っていうか、その他にも購入理由となる要因はありますし……」

「借りてる」と、陽平が口を開いた。

「借りているって、いつまでですか？」

「ずっと」

「割高になると思いますけど。」

「ただで」

「諸経費は？」

「ガソリン代払ってる」

陽平がそう言うと、令子は「それはそうでしょうけど」と笑った。実際のところ、その車は無償で友人から借り受けているものだった。

高校を卒業して以来、陽平は友人というものに縁がなかった。その友人は高校時代の同級生で、昨春からサーフィン繋がりとなっている。昨年の秋、十年以上も乗り続けた車がいよいよ駄目になったとき、ちょうどその年に大学を卒業して、夏の終わりから海外留学している息子の車があるぞとキーを渡され、その日から一年以上の間ずっと乗り続けている。

「私、こういうものです」と、令子は慇懃な態度で、モスラのDV D二枚と名刺を差し出した。

「モスラ？」と、陽平は目を瞬かせ彼女を見た。

「いえ、私はモスラじゃないです。というか、モスラは好きですけど。パチンコ店の経営方針に興味があつて、あの店でバイトしているんですけど、カウンタースタッフに資産家さんがモスラのDVDを欲しがつておられたとお聞きしたので……。もう購入されました？」

「まだ」と言つて、陽平はDVDごと名刺を受け取つた。

モノクロのカードに 大学経営学部田所令子と素っ気ない字体。その他には携帯電話のアドレスの記載があるだけだった。可愛げのない名刺の必要理由は何だろう。

「経営心理学を専攻していて、これはという経営者に会つたとき、この名刺をお渡しして、取材させていただいたりするんです。それと末端の消費者や利用者にも……。」

陽平は名刺をそつちのけに、DVDのパッケージを手にとつてながめていた。モスラ対ダガーラ、モスラ対キングギドラ、二枚のDVD。

「こんな話嫌ですよ……。あの、DVD貰つていただけます？そんなにな度も観るものでもないし、同じものを友人も持っているのになさらないください。」

「貰わない。借りておく。買つてから返す」

「よかった。資産家さんのことだから断わられたらどうしようかと思つていました。でも車は借り物なんです。まことに失礼ですけど、何かお仕事……されていませんよね。」

お金持ちであることは確かだ。変わり者ではあるが、異常者には見えない。取材とは別に、令子にはそこまで観察する必要があつた。しかし今回は、対象が一体何者であるかが全く見えてこない。令子が類推可能な範疇に納まつていないように思われる。令子は、個人的にもう一步踏み込んで観察してみたいという衝動にかられていた。陽平は突然席を立つと、呆然とする令子を尻目に、入ってきた時とは逆のコースをたどり、ドアの外へ出で行つた。テーブルの上には、置き去りにされた名刺とDVDがあつた。

令子が何らかの対応を考えるより早く、陽平は戻って来た。名刺を取りに行ったのだった。

陽平の名刺を受け取った令子は「ポンポコリンククラブ会長九条陽平 入会不可」と、小さな声で読み終わると「九条さんですか」とつぶやき、その後少し首をかしげながら「ポンポコリンククラブって何ですか?」と質問した。

「サーフィンクラブ」

「入会不可っていうのは?」

「会長が人見知り」

「会長って九条さんじゃないですか。人見知りなのに会長なんですかね」と、笑いながら言った令子は「綺麗な名刺。背景の海、これって日本の海じゃないですよ」と、名刺への感想を付け加えた。

その名刺はサーファアの祐介が遊び心から作成したもので、人に配ることなど想定していないが、電話番号やメールアドレスは記載されている。砂浜に突き立てた四本のセミロングボード、背景の海は合成されたもので、一体どここの海かなんて陽平が知る由もない。

令子はパステルからもう一枚名刺を取り出して陽平に差し出した。そこにはレインボーカラーの空にキラキラ鱗粉を振り撒きながら、どこかで呼んでいる子供たちのもとへ向かっているかのようなモスラがいた。モスラサークル代表レイコという文字の下にはホームページアドレスが記載してあった。

「著作権のこともありますし、本当にプライベートなものなんです。でも、名刺で負けたくありませんし……」

珍しいことに陽平が少し笑った。

「あのっ、ホームページにはアクセスしないでくださいね。私を含めても会員二名のサークルで、二人ともアルバイトやらで何かと忙しくて、もう一人の会員は汐屋タ子といって……まだ立ち上げてないんです。すみません」

令子は話がどんどんそれて行く自分に動揺していた。

「少しだけ質問してもいいですか?」と令子が切り出しても、モス

ラの名刺が気に入ったらしい陽平は上の空だ。

「パチンコ店でのことなんですけど……」

相変わらず聞く耳持たぬ状態の陽平だったが、令子は構わず話を続けた。

「九条さんは毎日来られていて、いつも端の台に座っておられますね。それと、リーチが掛かってもボタンを叩いてみたり、知らん顔してたりと、そんなところが印象に残っているんですけど……。何か理由はあるのですか？」

言うまでもなく、令子は陽平を取材の対象とみなしていたが、普段のそれとは少し違っていた。

失業対策の一翼を担う超巨大産業パチンコ。日本史上最大の内需循環型サービス業。何と言おうと、今や日本固有の文化であることを、誰もが（世界も）認めるパチンコ。

グローバル経済が叫ばれ始めて二十年以上経過した現代、中東の反米勢力を弾圧することにより、アメリカは原油の高騰を自国の経済発展の原動力とすることに成功した。強いドルという概念が漸く定着し、歴史的に例を見ない輸入超過の経済でありながら、オイルマネーの流入による内需拡大が実現しているのである。

アメリカは、自分で強いと言うから強いドルで、中国株を大量に買い漁ることになる。ドルのメッキが剥がれるまでに、どれだけ中国株を保有できるかに、今世紀のアメリカの命運が懸かっているだろう。一九九五年以降、アメリカは海外の新興勢力への証券投資を行い、国境を越えた正にグローバルな経済の中心となるべく、世界通貨ドルの強みを最大限に利用した政策を実行しているのだ。アメリカは、世界のどの国も征服することなく、世界経済に君臨する方法を完成させようとしている。

日本においてもグローバル経済に則った企業が、輸出を拡大させた功績により、経済は成長している、にも拘らず内需が拡大しないのは何故か？アメリカはオイルマネーを初めとする世界の通貨を集

中するシステムを確立したことにより、内需さえもがグローバル経済の一翼を担っているのである。輸入超過になればなるほど、回りまわってアメリカへと世界の通貨が流入するのである。

アメリカ国民が金を使い、豊かな暮らしを実現すればするほど、アメリカ経済は成長し続けることになるのだ。もちろん原油産出国のオイルマネーがアメリカに還元されるシステムが有効である限りという条件の下で。

日本ではどうだろう。グローバル企業がいくら好調と言っても、利益の大半は株主に還元されるので、賃金は上がらず、内需に還元されることはない。当たり前のことだが、アメリカで賃金の上昇が経済発展にリンクしていることが、日本では通用しないのである。グローバル企業といえど従業員の要望に応じることが出来ない現実があるのだ。

日本に存在するグローバル企業の繁栄は、日本国民の生活とは全く無関係なものなのだ。賃金も上げれない状況で、日本の内需はどうなるのか？輸入や石油と無関係なサービス業によってのみ、内需循環は可能と言えるだろう。より低賃金でより多くの労働者に雇用の機会を与えることが、日本という先進衰退国家の平等であり、これ以上のものは幻想に過ぎない。

少子化問題が叫ばれているが、将来労働人口が増加すればどうなるのか？待ち受けているのはリーサルウェポンとしての所得税の減税と消費税の増税である。

パチンコがなくなれば日本は超不景気に見舞われることになるだろう。後ろめたさを抱きつつも、背に腹は替えられない。それを政治と呼ぶことにしよう。ストレスのはけ口？やったー！その大義名分を財布に貼り付け、心身共にストレスの貯金箱と化しているのは？ましてや毎日五時間以上もパチンコ台に向かっている人に至っては！パチンコとは給与所得・年金所得の過剰で足りない部分を射幸心を煽ることにより回収し、成長もないままに内需を活性化するシステムである！ホールを駆け回りながら、令子はいつもそんなこと



に思いを巡らせていた。

客が少ない平日でも、端の台は結構人気がある。経営者は端の台が十台あるとすると、二台はサービス台として客の気を引く。だが、端の台で四百回（千円で二十回転として二万円）くらいデジタルを回転させてもかからない台は危険だ。ひどいになると二千回転させてもかからないことがある。

普通パチンコ店は、一回もかからないのに二千回転するまで一人が打ち続けることなんて想定していない。入れ替わり立ち代り、何人も人が打っている間に閉店時間が訪れることとなる。最後にその台を打った人は、もう少し打ち続ければ爆発していたかも知れないなど、後ろ髪を惹かれる思いで家路に就くのだ。毎日人目に付く端の台に座り、かなり高い確立で十万円を摩っている陽平を目の当たりにすれば、他の客のモチベーションは低下せざるを得ない。これ即ち営業妨害と言えないだろうか。

令子は、まだ一回もかかっていない端の台に陣取り、飽きもせず大火傷を負っている陽平の、パチンコ経営者のセオリーに挑戦するかのような打ち方に興味を抱いていた。こうなると経営心理学というより、単に心理学の疑問であった。

「端の台は自由、五十肩だから気が向いたときに叩く」

令子の疑問は、そんなにも短い一言で解消される運命だった。そんなにまでしてパチンコをする理由は、と問いたいところだが、「パチンコが好き。」で片付けられるに違いない。

「営業妨害はしていない」と、珍しく陽平の方から口を開いた。

昨日のことを気にしているんだ、意地悪だったかなと令子は少し後悔した。

「いえ、それは経営者側の都合ですから気にしないでください。つまらないことを言つてごめんなさい」

そんな令子の言葉を気にも留めず、陽平は話を続けた。

「みんなの悪運を僕が背負っていると、お客さんは信じている」  
なるほどと令子はうなずいた。他の客にとって、陽平はイエス・

キリストなのだ。今日出勤したら、真つ先にマネージャーに報告しよう。「営業妨害なんてとんでもない、あの方をどなたと心得おる」と。これで明日からは、店からコーヒーの一杯でも差し入れがあるかもしれない、驚くだろうな。そんなことを思いながら前を見ると、陽平は半分眠っていた。パチンコしてる時は居眠りなんかしていいのにと令子は思った。実際には、断続的に最低でも延べ一時間はきっちり眠っているのだが。

令子が陽平に興味を抱いた理由は他にもあった。

「モスラ好きですか？」

陽平はやや虚ろな目を二回パチパチさせた。DVDを欲しがっていたくらいだから嫌いなはずはないにしても、パチパチさせるのは大好きってことだ。令子は陽平のことを理解したようで、何だか嬉しかった。そして、そんな自分が不思議だった。

アイスコーヒーを飲み終えた令子は、独りのときのようにぼんやり窓の外を眺めていた。何もかもが許されている。うるこ雲が笑っていた。

令子はあることで少し迷っていた。それはモスラサークルの片割れ、汐屋夕子との協定に関してのことだった。

## 第六章

### 夕子との遭遇

今年の六月、下宿生活にも慣れ、経営心理学の取材も開始したある日の朝。電車から降りてキャンパスまでの道のりを、いつもどおりたらたら歩いていった令子の背中をつんつんしたのがモスラで、声をかけてきたのがモスラのぬいぐるみを手にした夕子だった。

「あーっ！あーっ！……。知らない人！」

令子は振り向き様に夕子を指差して、初めて会った人への驚きを表すように叫んだが、実際はそうではなかった。

令子は彼女を覚えていた。彼女は昨日通学電車の中で、人目をはばからずボロボロ涙を流していたのだ。乗降客の多い時間帯なので、二両編成の電車に空席はなかった。とは言っても会社などへ通勤する人はほとんど逆方向なので、電車に乗り合わせているのは大学生か、もう一つ先の駅にある女子高の生徒たちだった。しかもほとんどの女子高生が、自分自身を題材にしたスーパーフラット・アーティストだったので、未だ「貧乏の勧め」を実践している令子には、なおさら居心地が悪かった。

鮮やかに染色された頭髮、個性的な化粧とピアスとネイルアート、同じ制服であるはずなのに、恐るべきアイデンティティーにより、それぞれに全く違ったスーパーフラットの極みともいうべきコーディネートが施されていた。

中でも令子が眼を奪われたのは、今どきガングロ？と言いたくなるくらい真っ黒な顔をした二人組みだった。しかも、その二人組みは明らかに令子のことを意識していた。どちらも如何にも健康そうで、笑顔が可愛かった。身長は一人が令子と同じ百六十五センチくらいで、もう一人はそれよりも十センチくらい低く、かもし出す雰囲気、令子が大学に入って最初に知り合った友達と、どこことなく似ていた。

彼女たちが目立っているのは、何も色が黒いから、奇抜ないでた

ちをしているからという訳ではなかった。他の女子高生と違って、あるときはノートに見入って、考え込んでみたり、そうでないときは、譜面のようなものを見ながら、リズムを取ってみたり、時々はお互いのノートを交換して、意見を述べ合っているようであったりと、ガングロ二人組みの周りには、常に何かしら緊張が漂っていた。そして、時折令子の方に少し挑発めいた視線を投げ掛けて来るのだ。たまに眼が合った際に、令子は慌てて下を向き、息苦しさに耐えていた。令子は彼女たちの正体を掴みたい衝動に駆られたが、もちろん話しかける勇気など、持ち合わせていなかった。

その車両の中で、令子はみずばらしい服を着たダサイお姉さんと化してしまっていた。だが、そこはポリアナ効果の継承者を自負する令子であるので、素朴なお姉さんとして注目されているんだろうくらいに考えるようにしていた。ところが昨日は、乗車して一駅過ぎた頃から全く様子が違っていた。ガングロ二人組みはもちろんのこと、他の女子高生たちの視線も、あからさまに令子の方へと注がれていた。

令子の座席の前で、吊革に右手を絡ませている女子学生を見上げたとき、謎は解けた。危うく身震いしてしまいそうに整った顔、その驚くほど大きな眼からは、信じられないくらい大粒の、まあいいダイヤモンドのような涙が、堰を切ったようにこぼれ落ちていた。

女子高生たちは令子ではなく彼女を見ていたのだ。そして、奇跡の証人となってしまった彼女たちは、その幸福あるいは絶望にとまどっているようだった。涙の粒は令子の膝の上に置かれたシヨルダ―バッグにもポツポツ落ちていた。令子が思わず差し出した手のひらにポタリと落ちた涙は暖かくて、少し胸が痛んだ。迷惑だとは思わなかった。ハンカチを貸してあげようかと思ったがやめた。そのままにしておくことが自然だと思えたからだ。その感触は、一日中令子の手のひらに残っていた。

そして翌日、振り向けばそこに夕子がいた。

「それ見して」

彼女は令子のショルダーバッグに恥ずかしそうにぶら下がっているモスラのストラップを指差した。

令子は立ち止まり、ストラップをほどいて彼女に見せた。

「交換して」

そう言うよりも早く、彼女は令子の手からストラップを奪い取ると、モスラのぬいぐるみを差し出した。令子は同じストラップを何個か持っていたので、何ら問題はなかった。ただ、ぬいぐるみを入れた令子のショルダーバッグから、モスラの触覚と頭の一部がのぞいていたこと以外には。

令子は午前中二度の講義をモスラと共に無事切り抜け、待ち合わせていたキャンパス内のラウンジで夕子と昼食を取った。名前とお互いの電話番号やメールアドレスを交換した以外、自己紹介など一切しなかった。ただ、夕子が「ブラームスはお好き？」と冗談のように尋ねたときに、令子が「好き好きだあい好き、マツケラスの交響曲第四番とかさ。」と自己紹介代わりに答えると、夕子は「へーっ、あんたもマツケラス好きなんだ。サーなんて卿付きのおじいさんなのに、若い指揮者に比べても全然重厚じゃないもんねえ。あのウキウキ感って絶対に流行ると思うんだけどなあ。思わない？」と言って、打ち解けたように笑った。

「流行んない。流行っちゃったら困るし」

「それもそうか。みんながいいと言ってるからいいなんてことになると、モスラ、ブラームス、マツケラスの法則は崩れちゃうよね」

「夕子って意外とアカデミックなんだ」

令子がそう言うと、夕子は「モスラのどこがよ」と、反論してから「アカデミックと言えば、今年も梅雨がないじゃない。梅雨入り発表なんてしてるけど、当たらないのよねえ。環境と経済に最早アカデミックなんて通用しないことに一刻も早く気付くべきよ」と言った。

「天気予報も資本主義も末期ともなれば、流動環境学、流動経済学

としての解を求めるべきなのに、オーソリティーなんて拠るべきところがないとただの飼い犬だもの。気付いていたとしても、政治とか経済はネオコンの手先に牛耳られているしね」

それ以外は、食事中も食後にアイスコーヒーを飲んでいるときも、会話の中心はモスラだった。ガメラやゴジラが子供の味方なんだといくら主張しても、本質は怪獣であることに変わりはない、モスラだけはモスラという唯一無二の存在だなどと。

その時、僅かばかりの沈黙が流れた。お互いに何か忘れている気がした。

「キングコング」

二人の言葉はシンクロしていた。確かに子供の味方であり唯一無二の存在だ。しかも世界標準ときている。沈黙が流れた。二人は少し悔しかった。

「でも可愛くない」

二人の言葉はマナカナしていた。夕子はマナカナとは全くタイプの違う超美人だった。令子はマナカナよりほんの少しブスだった。

そしてもう一点意見が合ったのは、二人ともモスラが実在することを主張してはばからなかった。大学生にもなってそんなことを本気で言う人間が、自分以外にいたということが、令子にとって不思議であり驚きだった。

程なく、令子は周囲の空気が普段と違っていることに気付いた。

ラウンジの片隅のテーブル。令子と夕子が熱く語り合っているその場所だけが、ぽっかり浮かび上がって、まるでシャボン玉の中にいるようだった。遠巻きに観察しているような、男子学生の好奇に満ちた視線。少し妬ましそうな女子学生の視線。おかしいことに、女子学生の視線の先にいたのは令子の方だった。そうか、みんな夕子とお近づきになりたいんだ。令子は改めてその端整な顔立ちを見つめていた。芸能人でもないのに、一挙手一投足注目を浴び続ける日常ってどんなだろう。そんなことを考えていると少し気が滅入った。

「なによ」

夕子は重くなった空気を察知して、少し苛立ったように令子を睨んだ。

「友達になつてね」

笑いながら令子が言つと、夕子は平然と「あんたは親友」と言つてのけた。

親友という言葉の裏に潜む夕子のはかりごとに、素直な令子が気付く由もなかった。

令子の下宿は夕子の下宿より一駅遠くにあつたが、令子は出来る限り時間を合わせて夕子と一緒に通学するようになった。夏休みが近くなる頃には、昼食中にもシャボン玉現象は起きなくなっていた。

あるとき夕子が言つた。

「あんたのくすみパワーつてすごいよね。そのみすばらしい格好のせいもあるけど、何かそれとは別の天性の素質のようなものを感じちゃうわ」

令子は「えっへーん！」と胸を張り、テレビの宣伝でゴジラの真似をして口から放射能を吐き出す、キッズキッズの真似をして見せた。夕子は笑っていた。令子以外観客のいないステージで、けらけら笑っていた。賑わうラウンジの中にあつて、二人は今や普通の女友達に過ぎなかった。とんでもなく華やかな夕子と、対極にいる令子。靈感というものを持ち合わせた人間がいるとしたら、夕子の放つ全てのオーラが、まるで宇宙のガス状星雲がブラックホールに飲み込まれるように、令子に吸収されている現象を目の当たりにすることだろう。

しかし、ラウンジにも通学電車の中にも、街角の雑踏にもそんな人間は存在しない。もしいるとしたならばつきり言える、その人間はきっと腰が抜け、救急車で病院送りになることだろう。

## 第七章

## ダンス

夕子はダンスが異常に上手かった。夏休みが終わって間もない日曜日、電話で「今日のお昼、私の部屋でモスラサークルの会合するから、たこ焼きの材料買ってきて」と呼び出された令子が夕子の下宿を訪ねたとき、何もない部屋に安室奈美恵のSOMETHING BOUT THE KISSが流れていて、普段着のままの夕子が踊っていた。振り付けは夕子独自のものであり、それは誰にも真似の出来ない、この世に存在し得ないような危うさを放っていた。十畳ばかりの限られた空間で、時間という概念さえが不確かに揺らいでいた。何故そんなに上手く踊れるのか、夕子が話してくれた理由は単純なものだった。

夕子は踊ることが好きで、中学生の頃何人かの同級生と一緒にジャズダンス教室に通っていた。同級生たちはレッスンを重ねることに上達し、夕子は付いていくのに四苦八苦していた。学校での休み時間の教室、放課後の公園、同級生たちは夕子が出来ないところを教えてくれた。夕子は毎日学校へ行くことが楽しくて仕方なかった。ある日のレッスンが終わってから、夕子は同級生と共にダンス教室の先生に呼び出された。芸能プロダクションからの勧誘の話だった。最初の内はしゃいでいた同級生たちだったが、詳しい話を聞くうちに静かになっていった。それは夕子を中心とするダンスユニットの計画だった。夕子はグクリとした。すぐに「私には出来ません。みんなで……」と言ったが、凍りついた時を元に戻すことは不可能だった。永遠に。

帰り道、同級生の誰も言葉を交わさなかった。友達の中にいて友達にはぐれ、平穏な日々が壊れ去る予感。夜の闇に紛れて夕子は泣いた。大人たちは何て身勝手でもごい仕打ちをするのだらう。夕子はまだ子供なのに。翌日からクラスで夕子へのいじめが始まった。



クラス全員が夕子をしかとし続ける毎日。夕子はダンス教室を止め、それからずっと独りぼっちで踊ってきたのだ。夕子は誰も恨んだりしていなかった。ただ、大人たちの行為が悔しかった。

その後、同じプロダクションから直接夕子の両親に、アイドルにスカウトしたいとの話があったとき、彼らの態度が横柄で会ったにも拘らず、両親が彼らを門前払いしなかったことが理解できなかった。それは、夕子の家庭が外から見た目にも貧しいと侮られていて、そのせいで両親の対応も卑屈になっていたのだろう。もしかすると、そんな時モスラに助けを求めているのかも知れない。

夕子は高校時代もシャボン玉の中で過ごしてきた。別に何の問題もなかった。大学へ入学し、下宿生活も一応快適と言えるものだった。それがある朝、通学電車の中で令子を見かけた。と言うより、令子の膝の上に置かれたバッグにぶら下がっているモスラを見かけたと言う方が当たっている。

その瞬間中学時代からの記憶がフラッシュバックして、涙が止まらなくなってしまう、次の日、一番お気に入りだったモスラのぬいぐるみを手に、昨日と同じ電車に乗り込んだ夕子は、探偵のように令子の姿を追いかけて、一晩考え抜いた作戦どおりに声をかけたと言っただ。

あのぬいぐるみ、一番のお気に入りだったんだ。そんなことを思うと令子は泣きたくなかった。でも今の夕子は笑っている。お気に入りモスラを手放しても笑っている。それでいいや。夕子の話を聞き終えて令子は笑った。安心したように夕子も笑った。

「設計事務所って大変なんじゃない？」

風情があると爪楊枝を使ってたこ焼きを食べながら、令子は尋ねた。「人間関係がつてことよね？」と夕子はすかさず聞き返した後で「ただのハードルよ。目的があって建築学部へ入った訳じゃないわ。あんたの場合は結構好きでやってるみたいだけ。」と言った。

「建築の勉強は好きじゃないの？」

「すつごく嫌い。だからこそいいんじゃない」

「そっかー」

令子は夕子と同じことを、かつて母親に言われたことを思い出していた。それは令子がまだ中学生だった頃のことだ。

「好きな科目は零点でもいいのよ。だけど嫌いな科目は百点を取らなきゃ許さないから。あなたは全部嫌いでしょ。だから全部百点取りなさい」

それなのに決して勉強塾へ通うことを許さなかった。そのくせ、勉強以外の教室へは好きなだけ通わせてくれて、一カ月くらいで飽きて止めることになっても、咎めることはなかった。おかげで、中学高校を通じて、クラスメイトが勉強塾へ通っている時間帯にはスポーツ、音楽、美術等様々な分野の教室を巡り、勉強する時間といえば、遅い夕食後就寝までの二時間程度でしかなかった。夕食にはおじいちゃんが付き合ってくれて、令子は相変わらず変な質問をしたりしていた。

令子はテストで百点を取る為に最も有効な自分なりの方法を実行した。学校の授業で疑問に思ったところを、夕食後の一時間を費やし、徹底的に解明するのだ。大抵の疑問についてはそれで解決できた。残りの一時間は、授業を受けた範囲を全て暗記することに集中した。殆どのクラスメイトは疑問に思うことがあれば、塾で質問して解決しているので、家では暗記することに専念できるのは非常に有利だと思えたが、その類のテストの結果において令子が特に劣っているという訳でもなかった。

毎朝目覚めるたびに、記憶の引き出しが増えているように思えることは、常に新鮮で気持ちのいい出来事だった。しかし、そんな気持ちになれたのは令子が高校生になってからのことで、その頃にはもう母も、百点取りなさいとは言わなくなっていた。

中学生の頃は母親が、テストで百点を取ることに固執しているのが、解読しようのない大きな矛盾となって、いつも令子の脳裏に付

き纏っていた。実際のところ令子には百点を取る為に努力することの意義がどうしても見出せなかった。

中三になったとき、令子はクラスメイトに何の為に勉強するのか、嫌ではないのかと質問してみたことがある。進学校へ入って目標とする職業に就く為というのが大半を占める答えだった。目標があるので勉強が嫌ではないというのもまた、大半を占める答えだった。

令子には何になりたいなどという目標はなかった。自分自身そんなことを考えてみたこともなく、両親から擦り込まれた覚えもない。幼い頃から令子は、好きなことだけをして育ってきた。きっちり躾けられた記憶があるのは、歯を磨くこと、それに外出後の手洗いとうがい、あとは青信号でも左右を確認して渡ることくらいだ。それらのことに手ばかりがあつたときだけ、母は令子をきつく叱った。

たまに母親のお手伝いの真似事をすることもあつたが、特に褒められることもなかった。令子にとっては単なるお遊びだったので、寧ろ叱られないことで嬉しかった。それが中学生になった途端、有無を言わずに百点を取りなさいである。テストの結果百点を取れなかった科目（勿論全科目である）があると、毎回母に説教された。何のための勉強かとの理由付けをすることもなく、勉強塾へ通うことも認めてくれず、なんとも理不尽な仕打ちに耐え兼ね、一度だけ「百点を取ったからってどうだって言うのよ」と涙ながらに母に詰め寄ったことがあるが、母は「どうもならないわよ」と答えただけだった。どうしても収まりが付かない令子は、その日遅く帰宅した父に再度問いかけた。

父は少し考えて「実際、世の中には理不尽なことの人が多いんだ。団塊以前の人たちに聞くとところでは、学校だって昔は理不尽の巢窟みたいなものだったって言うからなあ。なんならおじいちゃんに聞いてごらんよ。今は理不尽に慣れる機会がないから、納得が行かないことに様様な形で抵抗するんじゃないかな。その反動で子供同士が理不尽な関係に陥ってしまうんだろうなあ」と言っただけだった。

高校へ入学してから祖父が、令子が中学生のうちはそうするように父と母に命じたのだと教えてくれた。

その理由は、勉強というストレスを与えられて、それを相殺するための様々な趣味を体験することにより、自分が本当に欲望する対象が理解できるようになるというものだった。

青年期の初期段階である中学生時代に、親から勉強というストレスを与えられ続けた子供は、典型的なパラノイアに向かい、多様化するこれからの時代では通用しない人間になり、また、自由奔放に育てられた子供は、これからの情報過多の時代には、あまりにも多様化した欲望の表層を渡り歩くだけの人間になってしまふというのが祖父の見解だった。

中学生にはまだ、自分から進んでストレスを引き受けることの意味が理解できないので、何の抑圧もない状況では、数限りない欲望の表層で溺れるしかないのだ。泳ぎ方を知らない幼稚園児が、浅いプールで溺れてしまうように。

現在の日本が遭遇しているのは、正に祖父の危惧していたとおり  
の状況に他ならない。塾へ通わせる余裕もなくなった家庭の子供は、  
数限りない欲望の表層ばかりを追い求める人間に育つしかなく、家  
庭教師を雇う余裕のある家庭の子供は、勉強が好きにでもならない  
限りは、その大きなストレスを相殺する何かを与えられないのであ  
れば、パラノイアとして大人になるか、悪くすれば誰かが代償を支  
払うことになるだろう。

ストレスに立ち向かっていない子供は、何故欲望の表層で溺れる  
しかないのだろう。それぞれの欲望の対象には大抵、掘り進むに連  
れて純度の高くなる金鉱のように素晴らしい部分があるのに、今の  
自分が理解できる以上のものを求めようとはしないのだ。ストレス  
に立ち向かう訓練が出来ていない子供は、欲望にもちゃんと立ち向  
かえないで、怠惰から認知的儉約を実行してしまうのだ。

ポップカルチャーに真剣に挑んでいる子供や大人が、日本経済の  
メサイアになる可能性を指摘する風潮は見当違いではないだろう。

実際、ポップカルチャーの地平は永遠の表層、即ちスーパーフラットであり、文化としての芸術よりも、商品としての芸術なのだ。然しながら、この地球上に、商品としてのポップカルチャーが経済効果をもたらず場所は、無駄遣いにより資本主義が成り立っているアメリカ合衆国以外には存在しない。資本主義が本来の勢いを発揮している中国等の国家では、規制が不可能という大義名分の下、コンテンツの模倣が横行するばかりである。

高校生になった令子は、自主的に自分に対してストレスを与えることの効用を理解していた。令子を通った数多くの教室の中で、ストレスを相殺出来る対象は高校を卒業するまで続いたジャズダンスだけだった。かれこれ五年間、週二回レッスンしていたという自負もあり、時間が許せばインストラクターのアルバイトもしてみようとも思っていたくらいだ、少なくとも夕子の踊る姿を目の当たりにするまでは。

令子は大学にはいつてから、まだ誰にもダンスを習っていたと話していないことで、救われた気分になった。別に、夕子に見栄を張っている訳ではなく、このことに関してだけは、夕子の神聖な領域を、稚拙なステップで踏みにじりたくないと思えた。仮に今もしも、夕子が「一緒に踊らない？」なんて言ったら、穴があれば何処であろうと潜り込んでしまうことだろう、猫に睨まれた二十日鼠のように。

「一緒に踊らない？」

「……………」

令子は口に運んでいたたこ焼きを、爪楊枝ごとテーブルの上に落とした。

「ななな、なによ突然に」

令子の視線は、手近な穴を求めてさまよった。

「なによって、いいじゃない素人なんだから上手くやろうなんて思わなくなっただけさ。踊ってみれば結構楽しいよ」

さすがの夕子も、あまりの令子の動揺振りには、少し驚いたようだった。

令子は仕方なく経緯を説明した。もちろん、ついさっきまでインストラクターになるうと考えていたことも含めて。

「ふうん。ジャズダンス習ってたんだ。芸能プロとか来た？」

夕子は少しだけ意地悪そうな眼で尋ねた。

令子はプルプルと首を振った。

「そうよね、下手でも美人なら寄って来るものね。まったく……」その言葉がフオーローになっていないことだけは、はっきりしていた。

夕子は、令子の前では自分が美人であることを、強調してはばからない。そんな夕子を令子はうんうんと頷きながら見つめていた。まるでモナリザを見るときのように。その日以来、夕子が令子の前で踊ってみせることはなかった。

令子は、今でも夕子が踊っていた夏の終わりの、夢のような出来事がありありと思い出せる。夕子のダンスは、令子のクオリアの第一ステージから第五ステージをフル稼働させる。ステージの段階は違っても、フル稼働という意味合いではモーターと同類のものであった。

現状での令子の限界が第五ステージであれば、それ以上のステージである可能性もあるということだ。令子のクオリアのステージは、祖父と話したり、音楽を聴いたりすることで、自然と身に付いたものであるが、夕子のダンスを目の当たりにして以来、努力して向上させる方法があるのなら、是が非でも取り組みたいと思っている。しかし今のところ、いつも祖父が言っていた「貧しくもニュートラルであれ」に勝る近道は発見出来ていない。

「ダンサーになる気はないよね」

令子が尋ねると、夕子は「ダンスは私に与えられた唯一のゲージユツだから、売り物にする気はサラサラないわ。路上ライブならま

だいいけど、後でややこしくなるに決まってるし」と答えた。

「じゃあ何を生業にして生きて行くつもり？」

「英国あたりで尼になるか、若しくは宇宙一の売春婦ってとこね」

令子は「えーっ！えーっ！」と、またもやたこ焼きを落とし、速やかに「駄目だよそんなの」と言おうしたが、その言葉が陽の目を見ることはなかった。「だったら他に何かあるのよ。私に何をしろと言うのよ」と夕子に詰問されたとして、それ以上に適切と思える職業が、即座には思い浮かばなかったのである。その結果、とんでもないことになるとは、なおさら思い浮かばなかった。

## 第八章

### 援交斡旋協定

陽平は窓の外を見ていた。正確には見ているように見えた。うろこ雲の形がさつきとは少しだけ違っているように思えた。空気は正常だった。依然として、とてつもなく平穏だった。

「あのー……」

令子は再びパスケースから、今度は名刺判の写真を取り出し、DVDの上に置いた。

「ちよつとよろしいでしょうか」

令子は少し大きめの声で言った。陽介は令子の方へ向き直った。

令子は今置いた写真を指差して「その人、汐屋夕子といって私の友人なんですけど、一度会っていただけませんか」と早口で一氣に言い終え、安堵のため息をついた。

二度もたこ焼きを落とした日、二人の間である協定が結ばれた。

内容はといえば、夕子が英国あたりで尼にならない代わりに、令子が取材した相手を紹介するというものである。その日、夕子に「行くよ、英国に行って尼になっちゃうよ。明日にでも大学なんか止めて、英国に行っちゃうよ」と脅迫され、承諾せざるを得なかった不平等協定である。はつきり言って売春の斡旋を請け負わされた訳だ。相手は、大企業でないにしろ、優良企業の経営者なので社会的信用に関しては問題ない。令子の目から見て余程問題があるか、女性の場合を除いて、全て紹介する決まりである。

もちろん令子も、はいそうですかと引き下がった訳ではない。

「夕子自身がゲージョツみたいなものののに、それを売りものにするなんて、矛盾してるよ」と食い下がってはみたが「容姿なんてスパーフラットの範疇でしかないわよ。等身大のフィギュアに負けてるし」と切り捨てられ、ぐうの音も出なかった次第である。



令子はまた、消費者や利用者にも取材しているが、協定では例外を除き全て女性と見なしてもよいと謳われている。例外とは言うまでもなく資産家のたぐいである。

「会う」と、即座に良平が答えたことは、令子にとって以外だった。陽平の人となりから類推して、「会わない」と答える筈だと高をくくっていたからだ。協定を結んで日も浅いが、既に令子は何人かの男性を夕子に紹介してきた。彼らは写真を見ただけで全てを察し、また紹介者が令子であることに安心したので、後は夕子の援助交際用電話番号を伝えるだけでこと足りた。特に名刺のようなものを用意しなかったのは、その方が秘密めいた匂いがして楽しいからという夕子の提案だった。

夕子は、中世以降のヨーロッパにおけるフリーメイソンの活動について、令子に話してくれたことがある。そこにはシャボン玉なんて存在なくて、例え夕子が自由奔放に振舞ったとしても、周囲の空気は微動だにしないということだった。

「将来二人してフリーメイソンの世界に侵入することになったら、決して私から離れちゃ駄目よ。立場がまるで逆転してあんたなんかきつと窒息するか、さもなきゃせつせとシャボン玉をこしらえることになるから」と言うときの夕子は母親の顔をしていた。

果たしてそうだろうかと令子思った。仮にダヴィンチやモーツァルトの時代に夕子がいて、共にフリーメイソンの活動をしていたとすれば（もつとも、ダヴィンチの時代にフリーメイソンは誕生していなかったはずだが）モナリザの顔が夕子で、世界遺産になっている。ピアノ協奏曲代二十七番が、夕子のせいで姿を変えオゾン層を突き抜け、宇宙と交信している。そんなことを空想する令子の頭の中で、この世のものであり得ない音楽が響いて消えた。令子はピアノのレッスンを三年間で放り出したことを、初めて後悔していた。

しかし、その音楽を令子自身が欲している訳ではなく、今の日本

はモーツァルトが持て囃される条件が整い過ぎているので、一儲け出来るかもというような、姑息な考えでしかなかった。

令子が中学生になり勉強を強要され始めてからしばらくの間、夕食時には母の好きなモーツァルトが流れていて、ストレスの表層部分を解消する音楽として機能してくれた。しかし彼の音楽は、勉強することによるストレスの全てを相殺するものではなかった。

高校へ入学してからの令子は、強要されることがなくなったにも拘らず、勉強することですら自身にストレスを課すようになっていた。その頃には、祖父が聴いていたジャズやブルームスが、令子のストレスの大半を解消してくれるようになっていた。モーツァルトがヒーリングミュージックとして商業ベースに乗る意味を理解できるときには、祖父の部屋にモーツァルトがいないことなど、何ら支障のないこととなっていた。

これは今は亡き祖父の見解だが、大脳皮質にはクオリアが発動するためのステージが何段階かあって、表層から少し進んだ欲望に反応すると第一段階のステージでクオリアが踊り始め、深層の欲望に近づくに連れて第二段階、第三段階と進んで行くということだった。

一体第何段階まであるのかと令子が尋ねたとき、解らないという答えが返って来た。クオリアステージ仮説については、大脳生理学に基く科学的な実験を行った訳ではないが、祖父と令子の大脳皮質が体験した事実であることは間違いない。

体験の中では、面白い現象が幾つかあった。モーツァルトの音楽では第一ステージにも満たないものから第三ステージまでのそれぞれで、クオリアが踊りだすのだ。要するに大脳皮質に第一ステージしか用意されていないことも、それなりに欲望が満たされるということだ。

音楽においては、ほとんどの場合第三ステージでクオリアが発動するのであれば、第一ステージまたは、第二ステージのクオリアしか持ち合わせのない場合、発動することはないのだ。また、第三ス

テージのクオリアが発動した場合、第一ステージと第二ステージのクオリアは沈黙しているはずなのだ。そこに、モーツァルトの音楽に神秘性があるとすれば、その一点であろう。クラシック音楽の愛好者や、プロの演奏家に異論がある場合は、すみませんでしたと謝るしかない。

ブラッドメルドーを第五ステージで聴いたからと言って、他の第五ステージの音楽や、また音楽以外のもので、第五ステージに位置するものに、クオリアが発動するかと言えば、全くの所そうではない。例えばブラッドメルドーの音楽に限ってみても、令子にして、未だどのステージも発動しない曲があり、それが第五ステージであるか、それ以上のステージであるかは謎である。

祖父の一般クオリア理論によれば、第五ステージが発動するようになったときには、第四ステージまでの全てのものについては、必ず発動するはずである。ただ音楽に限っては、ジャンルが違えばとてつもなく例外が存在する。これもまた祖父の見解であるが（歌詞を別とすれば）音楽に関してのクオリアが最も関連性に乏しい。その理由としては、それ自体メタフィジックスであるからだ。

令子の祖父は、既に資本主義の終焉を迎えた日本の将来に、クオリアが必要であるにもかかわらず、トップに君臨する者（でも操り人形）たちの都合で、未だ排除に腐心している社会システムを指して、クオリアの危機と呼んでいた。

令子はずっと男女共学の学校へ通っていた。小学校の間は全く気にならなかったが、中学へ入った頃から男子生徒の行動が、女子との間で根本的な相違があることを発見した。今振り返ってみるとその理由は以下のようなものだった。

行動を女子に限ってみれば、第一に、勉強（秩序に耐える訓練としての、欲望を満たすため以外の努力全般を指す）のストレスを抱え、発生する欲望をクオリアのステージ（体力を消耗するスポーツ、勉強すること自体に欲望を見出す研究者の立場を含む）で相殺しよ

うとしている子。

第二に、勉強のストレスを抱え、発生する欲望をクオリアのステージ以外（商業ベースに乗ったスーパーフラットなゲージユツを含むマスターベーション）のものに向けてしまい、相殺出来ずにいる子。

第三に、勉強しないで、大したストレスもなく、小さな欲望をクオリアのステージ以外のものに向けている子。

ところが、男子の場合は決定的に異なっている。女子の第一、第二、第三パターンのそれぞれに、望もうと望むまいと性的衝動という非常に大きなストレスが付加されているのである。それによって、男子の行動には女子とどれ程の相違が現れるのだろうか。

まず、第一のケースを男子に当てはめると、性的衝動によるストレスが加わった分だけ、クオリアのステージに向けられる欲望が大きくなる。それによって、クオリアのステージが飛躍的に成長する可能性を秘めているのだ。

第二のケースでは、勉強と性的衝動の相乗作用による膨大なストレスを、相殺どころか助長してしまい、資本主義という秩序が生産する何万種類の欲望に翻弄される、典型的なパラノイアと化してしまう。第二のケースに属する人間は、資本主義の公理に基づく秩序に生きているので、無理が生じたときには、ノイローゼとなって自分を責めるか、分裂を発症し、社会を含む全てのものを否定することになる。ノイローゼの場合は秩序を肯定しているので、資本主義の秩序を順序立てて正当化することにより、社会に適合した一般的に理想とされる人間となるか、適合出来ずに自己否定の塊となり、自殺することになるかも知れない。分裂を発症するのは、元来資本主義の公理に否定的であったにも拘らず、親の強制などにより、無理矢理良い子になっていたのだから、資本主義の正当化などを説くことは逆効果であり、結果としては精神崩壊となり、殺人も含めた非社会的行動に及ぶことになる。

第三のケースでは、ストレスの質が強制された秩序ではなく、性

的衝動であるので、精神的に問題があったとしても、フロイト的な分析で対応することが間違ではないだろう。

社会に出た場合は勉強の部分が社会に置き換わるので、第三のケースだけが問題となってくる。ここでも男子の場合を考えてみると、第二ケースで判断すべきだが、根本的に違った側面が浮かび上がってくる。

中学、高校を通じて社会的秩序に基いた生き方を学んでいないので、社会と対峙した瞬間から分裂を発症し、共存する道はオタク化する以外には残されていない。ストレスに消費行動という麻薬を与え、精神を麻痺した状態に保ち続け、限界になれば精神的な治療を施し（分裂しているので、社会に適合するのは困難であるから、単に休息を取るに過ぎない）

これこそが行き止まりの資本主義にあつてなお、過剰な消費を生産するために求められる人材だと言える。休息を取ることでは回復しなければ、親の保護から抜け出すことの出来ないパラサイトと化するのである。

これらは学校での生活を無視しているが、仮に勉強でのストレスを与えるものであっても、厳しくすることを避けて悪戯に時間を束縛するだけのものであっても、それでは第二のケースと第三のケースを、より推し進めることになるからである。

クオリアのステージを活用する第一のケース以外に、資本主義の呪縛から解き放たれる道はないのであるが、ほとんどの親がクオリアの第一ステージすら活用していない状況では、望むべくもないことである。

学校の先生にしても第二のケースで育てられ、ノイローゼと分裂の狭間でもがいている状況である。

運良く、第一のケースで育つて来た先生がいたとしても、国が定める学校教育の基本方針が極めて資本主義的である。クオリアの磨ける土壌は一家相伝ともいえるのが、消費的欲望の氾濫する情報過多時代における日本の惨めな現状である。

クオリアに関する欲望の数は、過去からのスタンダードなものを含めてもそんなに多くなく、限られた者が生きる証として創造しているに過ぎない、にも拘らずクオリアに関係のない欲望の数は、消費的であるのでスタンダードを無視したとしても、膨大な量が存在し、全ての産業により生産され続けている。このような現代日本社会に生きる子供たちが、偶然クオリアに巡り会い、第一のケースで育って行く機会はゼロに等しい。

夕子に男性を紹介した後のことについて令子は一切関与していなかったし、その必要もなかった。後に厄介な問題など起きるはずがないからだ。それは、社会的信用を大切にする人々をターゲットにすることの、重要なメリットでもあった。

今回も協定どおり任務は遂行された。後は夕子の電話番号を伝えれば、それで一件落着、何の問題もない。令子は、そう心に言い聞かせようとしたが、試みは成功しなかった。

二人は出会ってしまっただろう。そして夕子は……。上手くいこうといくまいと、それはとても不幸なことに思われてならない。きつと夕子は令子のことを責めるに違いない。どうしてそんな人を紹介したのかと言って。

覆水盆に返らず……。令子は携帯電話で時刻を確認した。午後四時を少し過ぎていた。

「もうアルバイトに行かなくちゃ……。申し訳ないんですが、パチンコ店まで乗せていただけますか？」

令子は車窓に浮かぶうろこ雲の形を確かめるように、ぼんやりとカーオーディオから流れる音楽を聴いていた。最初に乗車したときからずっと、浜崎あゆみのイマチューアーが鳴っている。ディスプレイに目をやると、リピートの文字が点灯していた。

「あゆ、好きなんですか？」

「イマチューアーは好き」と、陽平は答えた。

「あつ、そうなんですか」

令子も大好きな曲だった。

明日からは、もう二度とこの人に声をかけたりすることはないだろう。もしかすると、店からコーヒーを差し入れすることになって、持って行ったときに「お疲れさまです。コーヒーでもいかがですか」というくらいはありかな。そんな取り止めのないことを令子は考えていた。

「これ、さっき紹介した汐屋夕子さんの電話番号のメモです。他のと一緒にしときますね」

令子はDVDと、さっきの名刺を自分の膝の上に置いていた。

「その子美人」

「そうですね」と、半ば投げやりに答えた令子は、気持ちの一部が萎えていくようで妙な息苦しさを覚え、助手席側の窓を少し開けてみた。空気が動き、車内には遠い海の気配が流れ込んだが、心の中までは届かなかった。

パンドラの箱を開けてはならない。全ての箱は邪心という現実に満たされている。人はただ、箱の表面に描かれた幻想を、見ていればいい。そしていつか気付くことだろう、自分も幻想に過ぎなかったことに。

「モスラサークルこれで三人」

令子の耳に、それは遠い潮騒のように響いた。

陽平は汐屋夕子のことを、モスラサークルの片割れであるただけ認識していたのだ。

## 第九章

## HOTEL MARINE WIND

翌日の日曜日、パチンコ店に自転車を置いた令子を拾って、パンダは昼下がりの国道を走っていた。

小高い丘の上にあるホテルに向かう車中、令子は迷っていた。

取り敢えず夕子には電話で、先方がそのホテルのロビーで会うことと、最初は令子も同席することを希望していると伝えてある。もちろん先方がそんなこと言う訳がない。苦肉の策として令子の一存で考案したことだ。

夕子は「午後三時に待ち合わせ？ なのよそれ、おやつでも一緒にやってこと？ それにどうして観光ホテルなのよ。普通そんなところで商売しないしょ？」と訝しげに聞き返したが「先方の車でホテルまで行って、ロビーで引き渡した後、私はタクシーで帰るから、その後のことは二人で決めて頂戴。先方は決して怪しい者ではないから。お願い。ね！」と頼み込んだ。

夕子は未だかつて陽のあたる場所で、その手の男と会ったことがない。サングラスと帽子といういでたちで、訳知りの白タクを利用し、男の指定する場所へと向かうだけだった。令子に紹介された男たちの多くは、家の外に自分が自由に利用できる部屋を確保していた。夕子はその部屋での仕事が終わると、再度携帯電話で近所で待機している白タクを呼んで下宿へ戻るのだが、自由に使える部屋を持つていない男の場合は、その男の車に乗り換えてモーター車へ向かうこともあった。その時は最寄の駅まで送らせて、電車で帰ることもあった。

「まあいいや。今更どうのこうの言っても始まらないし、だけでも分あんと一緒にタクシーで帰ることになると思うから、よろしくね」と言っただけで夕子の電話が切れた。

令子は、モスラサークルの名刺に、入会不可と記載していないのを悔やんでいた、と言うより、つまらない負けん気を出して、名刺



を渡してしまったこと自体を悔やんでいた。もともとモスラサークルなんて機能していない。名刺は夕子が面白半分にやつつけ仕事でこしらえた物だし、未完成のホームページだって、会員を募る類のものではない。

それに陽平の服装ときたら、世間は晩秋だというのに、時代がかったアロハシャツにジーンズ、足もととは見るからに安物のビーチサンダルと、まさにポンポコリンサーファーと呼ぶにふさわしいでたちである。この風体からして、事情を説明したとたんけんもほろろに追い払われるという結果になるのは火を見るより明らかだ。その時は私もパンダに乗って帰ろう。そして陽平を慰めてあげよう。ホテルの駐車場に到着する頃、令子はようやく覚悟を決めることにした。

車を降りた二人の頭上には、僅かにたなびく絹雲のせいで、とても高く感じられる秋晴れの空があった。青い海風は、波乱含みの展開を予告するかのように、きらきらと令子の髪に纏わり付いた。陽平のアロハシャツがヒラヒラとはたいて、それこそ系の切れた風のように、このまま何処かへ飛んで行ってしまうのではと思われた手には名刺らしきもの……当然ポンポコリンクラブのものだろう。

風のせいで誰も利用していないテニスコートを横切り、ホテルの正面玄関へと向かった。ポーチにはMARINE WINDと、個々に独立した文字を配した銀色の看板が、太陽を反射する鏡のオブジェのようだった。

大きなガラスの自動扉を二回開閉させると、ロビーの奥の方に、玄関に向いたソファに腰掛けている夕子の姿が、目視ではつきりと確認できた。今日は帽子もサングラスも身に着けていない。従って、遠目にも不機嫌であることは、疑う余地もなかった。

夕子は少し近視だが、サングラス以外は眼鏡もコンタクトレンズも利用していない。

恐る恐る二歩三歩と近付いて行き、夕子の目にもはつきりと二人の

姿が識別出来ると思われる距離に足を踏み入れた瞬間、やにわに立ち上がった夕子は脱兎のごとく駆け出し、ロビーのほぼ中央にある大理石張りの大きな柱の陰に身を潜めてしまった。それこそ、狐に追われた野兎が巢穴へと逃げ込むように。どのような手順で切り出そうかと試算していた矢先、令子はゴングもなり終わらないうちに先制パンチを受けたボクサーのように、目の前が真っ白になった。

十秒後、顔だけを覗かせた夕子は、あまりの出来事に啞然として立ち尽くしたままの令子と目が合うと、右手で手招きした。

気を取り直した令子は「ちよつと待っていてくださいね」と、陽平を窓際のソファに腰掛けるよう促して、柱の陰へと足を踏み入れた。そこにどのような難題が口を開けて待ち受けているのか、想像も付かなかった。

「あんまりじゃない。いくらなんでもこんな対応の仕方である？ そりゃあの人は見るからにうだつの上がらない感じの人だけだ。だったら余計にひどいじゃない。あなたがそんな人だなんて……信じられない」

令子が夕子に食って掛かるなんて、未だかつてないことだった。

「私がそんなことするはずないでしょ。ちよつと驚いただけだからそれが作威的な行動でなかったとすれば、夕子の驚きはちよつとどこの騒ぎでないことは明らかである。涼しくもない柱の裏で、

夕子の顔はいつもにも増して蒼白で指先は微かに震えていた。

「ねえ、あの人って経営者？」

令子はプルプルと首を振った。

「じゃあ何処で知り合った人なのよ」

令子は今までの経緯を説明した。もちろん、陽平が援助交際のことを理解しないままに、モスラサークルへの入会希望者としてここにいることも含めて。

夕子は何かをふっ切れたように話し始めた。

「よかった。マジ世界の終わりかと思っちゃった。もうだいじょうぶ、心配させてごめんね」

夕子は「ふうっ」と深呼吸して、意を決したように陽平のところへと向かった。

陽平はソファに腰を下ろし、巨大なガラスのスクリーン一面に広がる空と海を見ながら、その中に溶け込んでいた。夕子は陽平の視界を遮ることをためらうようにして立っていた。

令子は、いよいよ審判のときが来たかと陽平の隣に座り、いざというときには陽平の耳を塞ぐ準備をした。陽平が夕子に何を言われようと、その場を追い払われようと、今回に限っては陽平の味方でしょう、半分は私の責任でもあるのだから。令子は心の中でつぶやいていた。

「あの、よろしいでしょうか？」

まだ景色の中にいる陽平に、夕子がおずおずと話しかけた。令子の予想とは異なる展開だった。

陽平は立ち上がり、夕子に名刺を差し出した。

「ご丁寧に恐縮です、素敵なご名刺ですね……。九条陽平さんですね」

夕子は、サーフボードと海が配されたポンポコリンクラブの名刺を見ながら言って、

「モスラサークルへ入会されたいと代表から聞きました。あの、どうぞお掛けください」と続けた。

促されるままに陽平は令子の隣に腰を下ろした。夕子はガラスのローテーブルを隔てた向かいのソファに座った。

「モスラサークルといっても代表と私の二人きりですし、特に目立つた活動をしているという訳でもないんです。それでもいいと言うのなら、私は全く異存ありません。代表もそう考えているようです」

「いいの？」と、あっけに取られたように令子が聞き返した。

「もちろんよ。よろしく願います」

夕子は陽平の方に向き直って、深々と頭を下げた。

「よろしく願います」とオウム返しをして、陽平も頭を下げた。

令子は思わぬ展開に、代表としてどのように振舞えばいいのか、とまどっていた。夕子は何を考えているのだろう。モスラサークルなんて、ただ名刺を作って遊んでただけなのに。未完成のホームページと言ったって、会員を募るためのものじゃないって夕子は言っていた。それなのに何故？しかもこんなオジサンを……。まっいいか、私は別に構わないし、それに入会したからといって、元々活動なんてしていないんだから。単に私の顔を立ててくれただけのことよね……

自分なりの結論に至った令子は携帯で時間を確認した。まだ午後三時半だった。パチンコ店でのバイトは午後五時からだが、夕子を下宿へ送り届ければちょうどいい時間になるだろう。今日からは陽平にサービスのコーヒーを運んでもいいことになっていた。ただ、サービスであることを他の客に気付かれないように、その役目は令子が責任を持って遂行することになっていた。

「それじゃ、九条さんの入会も決まったことだし、このへんで……。あの九条さん、先に夕子を下宿まで送っていただけますか？」

ホテルに入るまで令子が重い気分で見上げていた空は、変わらずに青く高く、筆で払ったような絹雲がたなびいていた。正面から吹く悪戯な海風も、なにか優しく、微かな波の音が三半規管の奥に響いたとき、埋もれかけた記憶から海潮音の一節が浮かび上がってきた。これっていい詩ね、と令子が幸せな気分に浸っているうちに、他の二人は随分前を並んで歩いていた。会話を交わしている様子もないのに、風景の中に違和感なく溶け込んでいる。二人で援助交際なんてことにならなくて本当によかったと令子は思った。同時にまるで親子だなとも思った。束の間の親子ってどこか。

令子 생각이 巡らせている間に、駐車場に行き着いた。

パンダの前まで来ると「私、助手席がいい」と夕子が言った。

夕子の方が先に降りることになるのと思ったが、彼氏でもない人の隣にどちらが座ろうと大した問題ではないので、令子はそれに

従った。

車が走り出すとすぐに夕子が「パチンコ店に行ってください」と言った。

「あなたもパチンコするの？」

後部座席の令子は身を乗り出すようにして聞き返した。

「今日はもう予定もないし、九条さんはされるんですね、パチンコ」

「はい」と陽平は返事をした。

カーオーディオからは、いつものとおりイマチュアーが流れていた。

夕子はその曲を聴くといつも、中学生の頃、弟の龍之介の部屋でCDを聴きながら、二人して大声を張り上げて母親から叱られたことを思い出す。

「イマチュアー好きですか？」と夕子が言った。

「はい」と陽平は聞き分けのいい子のようにだった。

「だと思っていました。ずっと」

令子は夕子の話が少し変だと思ったが、大して気にはしていなかった。

## 第十章      夕子と陽平

パチンコ店に到着し、ロッカールームで制服に着替えた令子は、五時にはまだ早いのでマネージャーのところへ行き、陽平にコーヒーを運ぶ件について確認するために、モニタールームへ入った。

「あの子は誰なんだろう」

マネージャーはモニターの前で腕組みをして、しきりに首を傾げていた。

あの子とは、言うまでもなく夕子のことだ。普通、特定の個人について詮索することはないが、それは仕方のないことだろう。夕子はちゃっかり洋平の隣に座って、ことあることに声を掛けているかと思えば、洋平がボタンを叩くのを不思議そうに見ている。何はともあれ目立っているのは間違いない。洋平にはくすみパワーなんて備わっていないのだから。

「キリストの娘でしょ。多分」

令子は友達ですと言いかけたが思い止まった。面倒に巻き込まれること請け合いだったからである。

「そうかなあ。全然似てないけどなあ」

「キリストですから、マリア様からの隔世遺伝でしょ、それよりサービスのコーヒーは今日から運んでもいいんですか？」

令子は用件を告げた。

「ああそうだったなあ……いや、今日は止めておこう」

俺が行くよとか言って、二人分のコーヒーを持って行くかと思いきや、その点はシビアだなと令子は安心した。

「じゃあ、親子で来られた日のサービスはなしですね」

「そうだね」

「交替してきます」

まだ少し早かったが、令子は夕子のことも気になっていた。夕子は何故わざわざ陽平の隣でパチンコしているのだろうか。援助交際

が目的？まさか、そんなことはあり得ない。そんなことの為に陽平に執着する理由は、全くと言っていいほど見当たらぬ。モスラサークルに至っては、休みの日、たまに会合とか言つてご飯を食べたりするだけのことだし、そんな中におじさんが加わつて、楽しくなるとは到底思えない。

令子はホールスタッフとして忙しく立ち回る合間に、夕子の様子を伺つていた。もうある程度のことは飲み込めたようで、陽平を煩わすこともないようだった。リーチのときなどには、ボタンをこれでもかとばかり勢いよく叩いていた。令子といふときの夕子は、令子のくすみパワーに保護された範囲で、ある程度自由に振舞つてはいるが、陽平の隣にいる夕子は、好奇の眼に晒されたとしてもお構いなしという風だった。

陽平は、夕子がボタンを叩いているとき、少し迷惑そうな表情を浮かべていたが、たまに一緒になつて叩いていることもあった。似たもの親子という感じだなと、令子は思った。夕子に他意はないのだろう。単に陽平の隣でパチンコがしてみたかったのだろう。それはパチンコでなくてもよかったのかも知れない。むしろ、ない方がよかっただろう。

一時間くらいすると、夕子は席を立ち令子の傍へやつて来た。  
「もう帰る」

ぶつきら棒に夕子は言った。

「飽きちゃった？タクシー呼んだの？」

夕子は移動の手段としてタクシーを利用することが多かった。今日のホテルへもタクシーで来ていた。

「お金なくなっちゃった」

「えっ？」と、思わず令子は聞き返した。

「気が付くとみんな使っちゃっていたの」

「タクシー代もないの？」

「うん」と、夕子は照れくさそうに笑つた。令子には、滅多にない

その夕子の失態が、微笑ましく感じられると同時に、パチンコの魔力に改めて驚かされた。

「パチンコは楽しかった？」

「結構夢中」

有り金摩るまで打っていたにしては、夕子の言葉には熱っぽさが微塵もなかった。

「ちよつと待っててね」

お金ならロツカールームに行けば都合出来るが、令子には思うところがあった。

陽平は何事もないかのようにパチンコの画面を見つめていた。令子は陽平の肩をツンツンと指先で軽く叩いた。そして振り向いた陽平に事情を説明し、お金を貸すのではなく、車で送ってやってくれないかと頼んだ。そのとき、令子にはそうすることが一番いいように思えた。陽平もまだ一回もフィーバーしていなかった。

陽平はすぐにカードの残りを現金に交換し、急ぎ足で夕子のもとへ向かった。美人は得ねと一瞬思ったが、陽平は単にモスラサークルの仲間として行動していることを、令子は理解していた。

陽平に声を掛けられた夕子は少し恐縮したような素振りを見せたが、すぐその後に従った。令子に手を振ってパチンコ店を出て行く夕子は、やつのことで父親に巡り会えた迷子のようなだった。

夕子を助手席に乗せた車は、来た道を引き返している。

「私を見てどう思いました？」

夕子は普段はあり得ない唐突な質問をした。

「美人。今まで見たことない」

陽平が珍しく感想を述べたのに間髪を入れず夕子は「私を抱きたいて思います？」と、更に唐突な質問をした。

陽平は「僕は訳あり」と即答した後に「君はモスラサークルの先輩」と付け加えた。

「あの、送っていただきながら勝手なことばかりで失礼ですけど、



少しドライブしませんか？」

「送って貰うからって気を遣う必要ない。僕とドライブしても楽しくない」

「いえ楽しいです、少なくとも私は。モスラサークルの仲間だし……」

夕子は気を遣っている訳ではないことを強調するかのようにつづけた。

「だったらする」

車は岬を縦断する国道から逸れて海岸通へ入った。

海岸線を左手に、しばらく走るとマリーナが見えてきた。

「埠頭へは入れるんですか？」

「歩いてなら」

陽平はマリーナハウスと看板のかかった建物の駐車場に車を停めた。少し離れたところに駐車しているワゴン車のキャリアにはサーフボードが二枚並んでいた。二人は人の気配のないハウスを横目に見て埠頭へと歩いた。

埠頭の先の方で男が二人釣りをしていた。

先に歩いていた夕子が近づく気配に二人の男は振り向いた。夕子から見て、二人とも陽平と同じ歳くらいに思われた。二人の男は、まず夕子を見て驚いてから陽平の方を見て、もう一度夕子を見た。

「ハイドウゾ」

日に焼けて色が黒く、何十年も漁師をしてきたというような白髪混じりで長髪の男が立ち上がり、夕子に釣竿を差し出した。夕子はちらつと陽平の方を振り返り、陽平が頷いたのを見て釣竿を受け取り「ありがとう」と言っつて、今まで男が座っていた場所に腰を下ろした。

結局夕子は夕暮れまで夢中で魚釣りを楽しんで、クチやらアジやらを釣り上げた。というのも隣の男が付きっ切りで、面倒を見てくれたのだ。撒き餌、餌の交換は元より、釣り上げた魚の処置までし

てくれた。おかげで夕子の手は魚釣りを終えても、生臭くなること  
がなかった。

「こんなに親切にしてください、ありがとうございます」

夕子は世話をやいてくれた隣人に感謝を込めて言って、頭を下げた。夕子が魚釣りに夢中になっている間、隣人の釣竿は所在無く埠頭のコンクリートに横たわっていた。

「魚釣りはいつでもできるけど、こんなに可愛いお嬢さんの役に立てるなんて、誓って一生ないからね」

可愛いと言われたことが、夕子は嬉しかった。小学校を卒業した頃から、夕子のことをそんな形容で言い表す人のいなかったことに、今初めて気が付いた。

夕子は、はにかんだような笑顔で「邪魔ばかりしていたのに……。本当に楽しかったです」と言って、再度軽くお辞儀した後、狂おしい熱病から覚めたように、置き去りにされた陽平たちのことを思い出した。

夕子に釣竿を貸してくれた漁師らしき男は、陽平と並んで少し離れた場所に座り込み、話をしていた。全く雰囲気違った二人なのに、海の彼方へと沈む夕日で、長くなった影は調和していた。

男は時々海へ向かって右手を伸ばし、風の行方を指先で追っていた。男の髪が埠頭の風になびいた一瞬、その男は海へ帰ろうとしているかのようだった。夕子が魚釣りを終えたことに気付くと、男は立ち上がり、まだ腰を下ろして半分眠っている陽平の肩を、両手で揺さぶった。

「楽しくて、こんな時間になっちゃいました。釣り竿お返しします、ありがとうございます」

夕子は漁師らしき男にお辞儀して、釣り竿を両手で差し出した。

「タノシカッタ？ソウカイ、ウレシイネ」

埠頭で出会った二人の男に別れを告げ車に戻ったとき、ほとんど陽は落ちていた。

「おなか空いた。晩御飯食べに行く」

車が動き出すのと同時に陽平が言った。

「えっ！あの私、無一文です」と、困ったように夕子は言った。

「子供は遠慮することない。誘拐でもない。ドライブもあまりしていない。パチンコあまり負けていない」と、畳み込むような陽平の言葉を、頭の中で反復する余裕もなく夕子は「はい」と返事していた。

繋留されたヨツトの群れが遠ざかって行く。夕子はさっきの親切な隣人が話してくれたエピソードを思い出していた。

魚釣りが佳境に入ったとき、事件は起こった。二匹の舟虫がカサカサと二人の間に侵入してきたのだ。「ワッ！」と彼が声を上げた。「魚釣りされるのに、舟虫苦手なんですか？」と夕子が不思議そうに尋ねたとき、遙か遠くをさまようような眼をした彼が、舟虫が苦手になった理由をとつとつと語り始めたのだった。

彼が幼稚園に通っていた頃、同じ歳のミネちゃん（確かそうだった）と婚約していた。二人は相思相愛で、幼稚園の帰り（その頃は通園バスなんてなかった）に親に内緒のデートをしていた。

ある日、初夏の陽射しを浴びて、二人は防波堤の上を歩いていた。しばらくするとミネちゃんは疲れたみたいでその場にしゃがみ込んだ。彼の方も仕方なく防波堤の上に横になり、そのまま眠ってしまった。

ざわざわとした気配に目覚め、ミネちゃんの方を振り向いた彼は「ギャッ！」と悲鳴を上げ、危うく海の中へ転落しそうになった。そこには舟虫で埋め尽くされたミネちゃんらしき人型があった。そのおぞまし過ぎる光景は、まるでハムナプトラのワンシーン（その頃はそんな映画なかった）さながらだった。

きつとミネちゃんは舟虫に喰い尽くされてしまったんだと思った次の瞬間、むくつと起き上がった人型は、舟虫まみれのまま一歩また一歩と、足を引き摺り彼の方へ近付いてきた。

彼はもう一度「ぎゃっ！」と悲鳴を上げると、防波堤から転げ落ち、一目散に家へと逃げ帰った。その日の夜熱を出した彼は、次の日から二日間幼稚園を休んだ。それがトラウマとなり、彼は二度とミネちゃんを直視できなくなり、言うまでもなく婚約は自然消滅した。

夕子はそのエピソードを本で読んだことがあったのを思い出して、受け売りだと言いたかったが、魚釣りしたさに思い止まった。

車が見覚えのある坂を登り始めた。到着した場所はMARINE WINDだった。正面玄関のオブジェじみた銀の看板を、太陽光よりも遥かに淡いスポットライトがブルーに変えて、晩秋の夜風の中では少し肌寒い美しさだった。

「綺麗ですね」と指差した夕子は「真冬はオレンジ」と陽平がつぶやくのを聴いた。

レストランはご他聞に漏れず最上階にあった。

エレベーターがゆっくりと上昇している間に、夕子は手にしたポーチの中の携帯電話で時間を確認した。午後七時半になっていた。

「予約もしていないのに、だいじょうぶですか？」

夕子の心配をよそに陽平は「空いているからだいじょうぶ」と、平然としていた。

「チーン」と音がして、扉が開いた。

エレベーターから出ると、最上階のフロアは右手が温泉、左手がレストランになっていた。入り口にはボーイがいて「お二人様ですね、窓の側の席が空いておりますのでどうぞ」と案内してくれた。殆どの席は空いており、窓際に配置されたうち二つのテーブルだけに客がいて食事中だった。

ウェ이터の持ってきたメニューに、食事はABC三種類のコースしかなく、あとはビールやワインの記載があるだけだった。Aコース一万円、Bコース七千円、Cコース五千円となっていて、それぞれの写真が掲載されていた。

陽平が躊躇せずにCコースを二人分オーダーしたので夕子は内心ホッとした。Aコース、Bコースのヴォリュームが、夕子には荷が重く感じられたからだ。デザートは苺のショートケーキとレモンティーを夕子が選び、陽平はそれに倣った。

ガラスのスクリーンには、昼下がりにはロビーで見たときよりも広い夜空があった。海は遥か下にあつて、星座たちをたたえた空を支えていた。この辺りの海岸線は景色から抜け落ち、湾状になった彼方で、見知らぬ街が白く光っていた。

夕子は弟の龍之介のことを考えていた。この同じ空の下で、彼は何を思いながら夕食の席にいるのだろうか。もう夕食を終え独り部屋にいて、ぼんやり星を眺めているかも知れない。

龍之介は夕子より一歳年下で、現在全寮制のフリースクールにいる。龍之介の登校拒否が始まったのは、夕子が中二でちょうど同級生からの苛めが始まった頃だった。そのことについて龍之介は何も話したことがないが、きっと関連があると夕子は思っていて、今でも龍之介には負い目を感じている。

龍之介は登校拒否になつてからも、夕子のことを姉として慕ってくれた。同時に学校で無視されていた夕子にとっても、龍之介は唯一気の置ける人間だった。その頃になると、両親でさえ夕子に対して何処となくぎくしゃくした接し方をするようになっていた。

登校拒否が始まつてからの龍之介は、二週間に一度くらいクリニックでカウンセリングを受けていたが、両親が期待するような成果は上がらなかつたようだ。カウンセリングを続けるうちに、社会不適合症候群と判断された龍之介は、中学を卒業してから現在のフリースクールに入った。

休みになつて龍之介が帰省するたびに、両親は友達ができたかと聞いていた。そして龍之介が首を振ると、いつも悲しそうな顔をしていた。高校生の夕子は「そんなもの必要ないじゃない」と思っていたが、今は龍之介に友達がいることを願っていた。

テーブルの上にはすでに食前酒の小さなグラスと、オードブルの皿が運ばれていた。

陽平は食前酒には手を付けずに、オードブルをほとんど食べ終わっていた。

「ごめんなさい。窓の外の景色を見ていたら、昔のことを思い出してしまつて」

慌ててフォークとナイフを手に取りうつとする夕子に、陽平は「思い出せることがあるのはいいこと。食前酒も飲んでゆっくりすればいい」と、急きも慌てもしないといった顔で言った。

夕子がオードブルを食べている間、陽平はその様子を眺めていた。たまに夕子と目が合つても、全く気にしていないようだった。夕子も気にせずにのんびりした気分で食事を続けた。夕子は、中学校で苛めに遭っていた頃でも、家で目が合うと悪いことでもしたように、視線を逸らせていた父親に絶望と反発を抱いていたが、今度帰ったときはもつというんな話をしてみようかと考えていた。

夕子と陽平は、食事中も紅茶を飲んでいるときも、ほとんど喋らなかった。夕子が苺のショートケーキを口に運ぶのを陽平が見ている。夕子には、たとえ今何十人も人の好奇の目に晒されようと、何も変わらない自分でいられると強く思えた。陽平のいる場所で、舟虫がうろつこうと、夕子が喚こうと、周囲の人が指差そうと、そこにある空気はいつも自由だった。

夕子はゆっくり紅茶を飲み、口の周りに付いた生クリームを舌で舐め、海を見下ろし、龍之介のことを思い、陽平が苺を床に落としたのを見た。そして午後九時少し前にホテルを出て、夕子の指示通り下宿に向かった。

車の中でしばらく沈黙があつて「話は苦手」と陽平が言つと、夕子は「そうでもないですよ。六条さん」と笑った。

「私、中学二年のとき、テレビで見ましたよ。いろんな本を紹介する番組の、作家へのインタヴューというコーナーでした。あのとき

に比べると今日は饒舌ですよ」

「……」

「あのときと同じ服装なのですぐ分かりました」

「……」

車は下宿に到着した。

「今日はご馳走様でした」

夕子は運転席の陽平に軽く頭を下げ、ドアを開けた。

「ドライブ楽しかった」

「ドライブといっても行ったり来たりでしたね。それじゃまた」  
夕子はドアを閉め、車は走り出した。

## 第十一章　モスラが好き

夕子は寝室兼勉強部屋に入って、半分はモスラグッズで占められている本棚から一冊の本を取り出して机に向かい、本のページをパラパラとめくった。ある箇所を手を止め、書かれている文字を目で追った。

「まるつきり同じじゃん」

そこには舟虫の呪いに掛けられた可哀想な少女のことが書かれてあった。愛読者って結構いるんだ。夕子は本を閉じて机の上に置いた。くたびれた表紙には、モスラが好きというタイトルと、その下には作者の名前が六条陽平と書かれていた。

夕子がモスラ好きになった経緯は令子とは違っていた。令子は小学生の頃、祖父と一緒に映画館で観て以来のモスラフリークだった。夕子の場合は始めは、モスラって蛾のお化けみたいなやつというくらいのもので、幼虫に関してはむしろ気味が悪いと思っていた。

中二でみんなからシカトされていた頃、夕子は勉強を終えると、いつも深夜までダンスを踊っていた。それは夕子にとって、学校での嫌なことを何もかも忘れられる時間だった。夕子は毎日無我夢中で踊っていた。

ある日の深夜、躍り疲れた夕子が、めったに見ることのないテレビのスイッチを入れると、ちょうど新刊の小説を紹介する番組で「モスラが好き」を取り上げていた。シナリオがあつたのかどうかは知らないが、結果は行き当たりばつたりのインタヴューが夕子の興味を引いた。眼鏡を掛けた、ちょっとインテリという感じの女性インタヴューアは、「モスラが好き」を隅から隅まで読んでみたが、モスラのモの字も見当たらなかったと言って、そんなタイトルにした理由を聞いたがついていた。それに対してアロハシャツにビーチサンダルを履いた、夕子の父親よりも少し年配の、五十歳を過ぎるか過ぎないかと思われる作者（男）は「モスラが好きだから」とだけ



答えていた。

その後インタヴューは、尺取虫のように身体をくねらせたり、繭になったり、ばたばた羽ばたいてみたりして、「こういうの出て来ませんでしたよね」と念を押すように言った。既にパントマイムの見物人になりきっている作者に、インタヴューは「内容と全く関連性のないタイトルを付けるなんて、読者を軽視しているとは思えません」とやや強い口調で批判めいたことを言った。作者は「ふーん」と言っただけで、他に何の反論の弁もなく、インタヴューは終了した。その後、彼女は穴の空いた時間を埋めるために、作品の内容について言い及んだが、中学生の読書感想文ほどの切り口もなかった。彼女は目を通していても、読んではいないと夕子は思った。そして、内容の全く見えないその本は、眠りに就こうとする夕子の頭の中で、ある意味では新興宗教のように、どんどん過大評価されていった。

翌日、夕子は学校の帰りに本屋とレンタルショップへ立ち寄り、「モスラが好き」を予約し、ついでに見たことがなかった「モスラ2」と「モスラ3」のビデオを借りた。一週間後「モスラが好き」が手元に届いた頃には、既に「モスラ2」と「モスラ3」を見終わっていた夕子は、遅れ馳せではあるが令子と同じくモスラフリークの仲間入りをしていた。

「モスラが好き」を手にした夕子は、その小説の使命は既に果たされていると感じていた。タイトルどおりモスラが好きになった夕子に、もう宗教は必要ないように思えたからだ。しかしながら、読み終えた感想は「上等じゃん。」だった。

その頃の夕子は、否応なく人間社会と対峙することで傷付いていた。それは言うまでもなく、ジャズダンス教室での一件を起点とするものだった。大人社会の価値観により形成されるモラルが、子供という個を刺激し、子供社会の方向性を決定付けた上で、再び個人にフィードバックされるジレンマである。要するに、大人社会の選

択肢により子供の個性が決定する必然性だ。夕子は苛めっ子たちを憎悪も非難もしなかった。

忌まわしい現在に産み落とされた子供は、大人の出来の悪さを際立たせたコピーでしかない。夕子は大人たちを憎み始めている自分が嫌でしうがなかったが、その感情にストップをかける存在を見出すことが出来なかった。父親にも母親にも、教師にも、マスメディアにも……。

「モスラが好き」の、何人かの登場人物は、夕子の父親よりもまだ年上であつた。彼らは単に能天気なオジサンでしかなかった。「モスラが好き」は三人のオジサンと一人の少女のサーフィンライフを描いた作品だが、遠い未来と近い過去の夢の狭間で、現実というサーフボードだけが軽やかな弧を描いていた。

夕子はそれまで以上に勉強した。グローバルを旗頭にしながら、共同幻想の枠を超えられない者たちが蔓延る社会と同化してしまわないために。「モスラが好き」の後書きにこの物語はハーフィクションですと記されていた。ということは、登場人物の一人である作者の六条陽平は、小説の舞台と同じ場所で同じ暮らしをしているかも知れない。ハーフィクションではあるが一九七〇年代初頭にはサーフィンのメッカであり、現在は防波堤工事のため波が立たなくなった海岸があり、ヨットハーバーのある町で、そう遠くない距離に大学もある。

夕子は情報収集をして場所を特定し、今この町の大学に通っている。しかし、今日六条陽平に会うまでは、何の手掛かりもなく、シヤボン玉生活を続けているうちに、奇しくも令子と出会ったのである。

夕子はバスタブにお湯を入れている間、オーディオだけが置かれた広いリビングルームで、リッキー・リー・ジョーンズの歌うマイワンアンドオンリーラブに合わせ踊り始めた。ゆっくりと流れるメロディーに身体を預けていると、不意に涙が頬を伝った。中二のとき悲しくて流した涙、令子のモスラストラップに会い、思い出に流

した涙。それぞれの涙には別の泉があつて、今日の涙は五年分の感情を蓄えた最も大きな泉から溢れ出したものであつた。夕子は踊りながら、止めどなく流れる涙の分だけ、心が満たされて行くのを感じていた。

バスルームから、お湯が入ったことを知らせるアラーム音が聴こえた。

## 第十二章 バスタイム

「ふうっ」

バスタブに浸かって手足を伸ばした夕子は、少し窮屈な膝の角度で、また足が長くなっている気がした。困ったものだ……夕子は軽く舌打ちした。何もバスケの選手になりたい訳ではないし、スーパーモデルでもない、ただ、スーパー娼婦でいたいだけだ。おじさん相手に、度を越した武器はむしろマイナスになるだろう。

夕子は高校生のときすでに、高一のとき担任だった父親と言っているいい年齢の教師と、高二から卒業までの二年間月二回の契約で援助交際をしていた。月二十万円にしかならなかったが、大学へ通うための準備資金としては十分で、夕子にしてみれば最も重要な授業だった。

夕子は相手の方からは離れられないように、また夕子からはいつでも見切りを付けれるように、相手をコントロールする方法を習得することに専念した。そして得た結論の一つは、同じ相手と二年間は長すぎるということだった。

大学で教授との援助交際は考えものだなと思った。早目に関係を絶ったところで、学内に援助交際相手の教授の威光が蔓延してる状況には、ぞっとさせられるものがある。慌てることはない。大学に入ってから、しばらくはのんびりと学生生活を謳歌しよう。友達もたくさん出来るかも知れない（それはないと、すぐに打ち消した）そして、大学四年生になれば、最終標的に向けての活動を開始すればいい。夕子にとって学長に取り入ることなど訳もないことのはずだ。まずは、最高の成績を手土産に、就職の相談とかで近付き、その筋へのアクセスの方法を入手することが、夕子にとっての卒業であった。

夕子にとって令子に巡り会ったことは、予め用意されていたと思え

るような幸運だった。夕子には天賦の容姿が備わっているとは言っても、やはりフリーメイスンの重鎮を相手にするためには相応のスキルアップが必要となる。

そんな折、庶民の最高峰である橋渡し的な人々と係わりを持つ機会を与えられることは、まさに願ったり叶ったりのことであつた。それに、何よりも目先の問題として、来年大学へ通うことになるだろう龍之介の分も含めた二人分の学費を稼がなくてはならないのだ。夕子は高校のときすでに、美貌を消費財として活用することで、自分自身をプロデュースし、そしてプロモートすることを生業とすると決意していた。しかし、不特定多数の人間にアピールすることは、絶対にしたくはなかつた。

ほんの一握りの特権階級にある人間を標的とし、煩わしい注目を浴びるようなこともなく、三十歳になる前には超個人的プロダクションは、営業を終了する。その後は数少ない友人との係わりを残すだけの半隠遁生活を送るのである。夕子はスーパーフラットに関する才能、例えば美貌や流行を産み出す能力を称賛されることに嫌悪を抱いていた。それがあれば称賛に値し、なくなれば軽蔑じみた嘲笑を浴びせられる。夕子は、そんなくだらない才能など始めから持たない者の平穏な生き方を望んでいた。

それでも夕子は怠けはしない。幕を下ろす瞬間までは誰よりも努力し続ける。美しくあるため、賢くあるため、流麗であるために。三十歳以降の平穏な生活を夢見ながら。

愛なんて関係ない。ひとかけらの友情、それがあれば夕子は笑っていられるのだ。夕子が持ち得るたった一つの愛があるとすれば、それは弟の龍之介に対しての思いであろう。

龍之介にとって夕子は、ありふれた姉以外の何者でもなかつた。夕子が親友だと感じている令子にしても、彼女が夕子の特異性を認めた上で、友情が成り立っているといえる。ところが龍之介にしてみれば、夕子なんて苛められて傷付いて、大人に反発していびつな世界観に囚われた、情けない姉でしかない。

龍之介は間違いなく、夕子を可哀想だと気遣っている、唯一の存在だ。夕子はそんな弟だから愛していると思えるし、これから先もずっと愛し続けていけると断言できるのだ。

三十歳を過ぎたら凜とした家を建て、スーパの冷めない距離に龍之介の為に優しい家を建てる。お互いに一人暮らしで、それぞれに気の合う仲間を呼んだりして、楽しく過ごそう。龍之介が結婚する訳がないと、夕子は勝手に決め付けている。

今年の夏夕子が実家に帰省したとき、龍之介も夏休みで戻っていた。龍之介は全寮制フリースクールの三年生になって、少しは頼もしく見えた。家庭が貧しい以上に、考え方が貧困である両親は、そんな龍之介を見て肩の荷が下りたという風な様子だった。龍之介は少し華奢な風貌以外は、中学生の頃から何もかもが普通と言える子供だった。両親にしてみれば、龍之介が中学校へ通うようになって間もなく、登校拒否となってしまったことが信じられなかった。実際龍之介は苛められている訳ではなく、自分からクラスメイトや教師との関係を絶ったと夕子は思っていた。中二の姉がクラス中からしかとされているのは、保護者も教師も知らなくて、生徒全員に周知のこととなっていた。

夕子は、耐えながら中学校というミニチュア社会の中で、いずれ取り込まれることになる社会と渡り合うための爪を磨き始めた。それに対し、龍之介は夕子を苦しめるであろう社会に憎しみと絶望を抱き、登校拒否という結果になったのではないかと。今のところ龍之介は、フリースクールという閉ざされた暖かきミニチュア社会から自分を遠ざける必要はないのだ。そこは欲望に基づく悪意とは無縁の聖地であるからだ。しかし、聖地から一歩踏み出せば、以前と何も変わることのない社会が、ジョーズのごとき口を開け待ち受けているのだ。そんなことなど両親は何も解っていない。

夕子には、自分以上に龍之介が憎んでいる社会と共存する未来はない。それは、姉への思いやりゆえに傷付いた龍之介への裏切りだと思えるからである。

夕子の目的はただ一つ、社会の頂点に寄生して搾取し、一刻も早く龍之介が失った世界を、正しい形で返してあげることだ。

風呂から上がりパジャマに着替えた夕子は、机の上に置かれていた「モスラが好き」をトートバッグに放り込み、本棚から別の本を取り出した。それは夕子が選択した教育論の教授の著書で、メデアリテラシーに関するものであった。夕子はその講義の中で「メデアリテラシーって何の意味があるんですか」と質問して「私の本を読んでレポートするように」と申し渡された。提出期限は次回の講義まで、即ち明日の月曜日までであるが、本棚に収納したまま今日まで放置していた。読むまでもなく内容の見当は付くが、証拠となる固有のキーワードを一つや二つピックアップする必要がある。

夕子は読み終えた後パソコンを立ち上げ、二千字でメデアリテラシーの必要性を強調したリポートを作成した。それは夕子の考えとはまるで違っていたが、単位を落とす訳にはいかなかったのだ。夕子は本を読みながら、こんな面倒を背負い込むことになるなら、教授に反発しなければよかったと思ったが後の祭りだった。

夕子は大抵のことは聞き流すが、講義中に教授が自分の著書を自画自賛しながら、メデアリテラシーの必要性に言及したときに、学生が頷いて同意を示すのを見て、大人気ない行動に及んでしまったのだ。夕子はリポートをプリントアウトしながら「それでも人は騙される、真実は残酷だからだ」とつぶやいていた。

ガリレオの言葉と似通ってはいるが、全くこととなっている。ガリレオが遭遇した局面の対抗勢力は、法王から一般市民に至るすべての人々の信仰や無知で成り立っていた。夕子の対抗勢力は、一言で言えば社会の仕組みということになる。

夕子の家庭は、両親と夕子、一歳年下の龍之介の四大家族で、3LDKの賃貸マンションに暮らしていた。二〇〇〇年夕子が中学生になって間もない頃、父親が浮かない顔で帰宅したかと思うと、食

事の支度を終えた母に向かって「非正規雇用」になってしまったことを話していた。そのときの夕子は「非正規雇用」の意味するものなど解らなかったが、ただならぬ両親の狼狽振りに、喜ぶべきことではないことが起きてしまったのだということだけは理解出来た。後日母親から聞いた話によれば「非正規雇用」になった理由というのが、アメリカ支店への転勤を断ったからだということだった。

上司から転勤の辞令を渡された父は、青天の霹靂よろしく人事課に駆け込んだらしいが、人事担当者にアメリカ支店の日本人はエリート社員ばかりだから栄転だといえるのに、仮にも拒絶するようなことでもあれば「正規雇用社員」の身で甚だ遺憾なことである、と切り捨てられたらしい。

最大の問題は、父がエリート社員ではなかったということだった。高校を卒業して以来その会社で営業マンとして頑張っていた父は、中学一年生の夕子に英語の質問をされてたじとなっていたくらいで、アメリカなどという国は父にとっては火星や土星ほどに遠い存在だったのだ。

結局アメリカ支店への転勤を固辞した父は、それ以来「非正規雇用社員」の立場に甘んじることを余儀なくされ、年一回の契約更新の度に冷遇の度合いを増しながら現在に至っている。

夕子の両親は共に貧しい家庭で育ち、既に亡くなっている親から相続したものなど何もない。夕子の母親もコンビニのパートタイマーとして働いてはいるが、大学の学費などとてもじゃないが捻出出来る訳がない。

夕子は高校生になった頃から、自分と登校拒否を続けている龍之介、二人分の将来に希望を見出す方法を手探りしていた。龍之介が私設の全寮制フリースクールへ入ると決まってから、それはなお更切実なものとなった。「このままではいけない、何とかしなければ」このままでは、日本という国に生まれた恵まれない私たちの子供たちは、更に底辺へと、日々を生き抜くことさえ困難な状況へと陥ってしまう。



夕子の高校での一年間は、そんなことを考えているうちに過ぎ去ってしまった。令子がおじいさんから聞いた話によると、一九九九年は日本にとってある種の破滅が現実となった年であったということだ。

一九八六年に労働者派遣法が制定され、政令で定められた専門性のある業務にのみ、労働者を供給することが認められた。それ以降一九九九年まで派遣社員の増加に比べ、正規雇用社員は暫増に止まった。

一九九九年に労働者派遣法が改正され、ほとんどの業務での労働者派遣が認められるようになると、派遣労働者の立場は商品化され、正規雇用社員は減少の一途を辿る一方で、派遣社員は止まることなく増え続けている。

また、労働者派遣の競争が激化するに連れ、派遣社員の最低賃金化が進行している。それに伴い、正規雇用社員の賃金の切り下げ、実行不可能な無理難題を押し付けての、非正規雇用化の動向も年々顕著になっている。

親の財産や年金を当てにしていると、若者に対しての非難めいた論調もあるが、ワーキングプアである男女が家庭を持ち、子供を産み育てて行くに際し、恵まれた立場にある親が経済的援助を与えることは、当たり前のこととなりつつある。

親に寄生しなければ生きて行けない若者は、格差社会という表現を用いれば確かに底辺であるに違いない。「格差のない社会」などと政治の中で議論されるのは、こういったケースを指してのことだ。しかし、親に寄生すら出来ない若者が、ワーキングプアの状況のまま放置されているケースについては、メディアは好意的であるとはいえない。ネットカフェに暮らし、自由を謳歌しているように見えても、帰る家もなく、生活保護水準以下の仕事しかない若者は数え切れないほどいるのだ。

年金で暮らしている甘ちゃんの高齢者が「私も若い頃は同じよう

に苦勞したものだ」というのなら、現在の状況に、高校を卒業したばかりの自分を置いて、シミュレートしてみればいい。果たしてあなたは生き抜けますか？

仮に、頼るべき親もなくアルバイトで生活している貧しい青年が、何処かの政党の思惑で政治家になったとしても、彼はワーキングプアの意見を代表などしてくれないだろう。真に虐げられつつある者の未来を摘み取ることで、民主主義的奴隷制度を構築しなければ、資本主義経済を維持出来ない状況では、ワーキングプアの問題と真剣に取り組む政党などないのである。

スラム街に育って周囲の応援を受けながら、NBAで活躍する選手になるのなら、それはアメリカンドリームだろう。スラム街に育って周囲の応援を受けながら、有力な政治家になったのなら、彼らのために力を尽くさなければ、それは詐欺というものだろう。

他の国で有効な教育がどの国でも有効とは言えない。(メディアリテラシーなんて教育はカナダとかではさぞかし為になるでしょう。植民地などという意識もなく、独立国家であると自負しながらも、世界中で唯一の傀儡国家日本……。傀儡政権なら同じ国の中の覇権争いであるだけ、まだましね) そんなことを思いながら夕子はあくびをしてベッドに潜り込んだ。

「おはよ」

夕子は開いたドアのすぐ左手の座席に座っている令子に声を掛けた。令子の前に立ち、吊革用のパイプに指を掛けた夕子は、機嫌良さそうな笑顔を浮かべていた。薄い水色のブラウスの袖口から覗いた手首、ステンレスのパイプに絡ませた指、エーゲ海の底に沈む、失われたヴィーナスの片腕のことが令子の頭をよぎった。

「おはよ。昨日はおかしなことになってごめんね、あの後ちゃんと帰った？バイトで遅くなったので電話しなかったけど、夕子の様子いつもと違ってたし」

「デートしてホテルへ戻ってご馳走してもらったよ。」

「それから？」

令子は声を潜めて言った。

「それから？」と夕子は鸚鵡返しをした。

「その後は？」

「下宿まで送ってもらった」

「ふうん……。良かったじゃない」

その言葉は令子自身に向かって言っているようでもあった。

「モスラが好きって知ってる？」

「九条さんが？知ってるわよ、当たり前じゃないそんなこと」

「モスラが好きという小説よ、彼は作家でペンネームは六条陽平なの。私が中二の頃ちよいブレイクしたんだけどなあ。モスラフリークの令子が知らないってねえ」

中二といえば、令子が勉強漬けの日々を送っていた頃だ。

「……ふーん…そうなんだ。知らなかった」

令子は少し悔しそうに言って、九条陽平さんが作家だと言われても全然ピンとこないなあと思いながら、昨日の夕子の様子を振り返っていた。

「夕子、始めから知っていたのね」

「はい、マイフェイヴァリット小説ですから」

「『モスラが好き』か、不覚……」

モスラフリークを自認する令子に取っては、少なからずショックな出来事だった。

「今じゃどの店にも置いてないみたいだし、モスラは登場していないよ……。それよりちょっとこれ見てよ」

夕子がトートバッグから取り出したのは一通の封筒だった。

「なに？」と受け取った令子は「 助教授様って…変」と夕子を見上げ、声を潜めて「まさか夕子、私に斡旋しろと？」と言った。

「いつも顔を合わさなきゃならない人間は必要ないって言ってるでしょ。それに女だし、リポートよ」

令子は紙切れ一枚のリポートに目を通し「このお座なりなりリポートを、添削しろとでも？」と言った。

「まさか、ただ悪意のようなものが感じられないかと思ってさ。優でなきゃ単位取っても意味ないし」

「その意味では完璧ね」

令子や夕子にとつて、この手のリポートに関しては、決して正論にこだわらないことこそ、優を取るためのセオリーだった。

令子は紙切れを封筒に入れ、夕子の手に戻した。何のペナルティかは知らないが、この紙切れ一枚で帳消しになることは間違いなかった。

電車から降りるとき、夕子は乗り合わせた女子高生の誰にということもなく手を振った。女子高生たちもまるで夕子がクラブの先輩であるかのように笑って手を振っている。令子という夕子は後輩に慕われる綺麗なお姉さんという感じだが、一人のときはどうしているのだろう。令子にとって興味はあるが、夕子には完璧な処世術が備わっているので心配はしていない。

朝一番の講義が始まった。夕子はリポートを提出するために前列に席を取っていた。九月から使用しているテキストはやはり教授自身の著書である「恣意的教育論」というタイトルの本だ。初めてタイトルを見て夕子は、恣意的って誰がよと思った。

ペラペラとページを繰ってみると児童・生徒が恣意的である教育のことらしい。今の時代、最低限学校は抑圧の場であるべきだろう。家庭でさらに抑圧するか、抑圧と解放を与えるか、または、解放のみを与えるか、それは親次第というものだ。

夕子は最近テレビで見たシーンを思い出していた。それは、たくさんの子供たちが好き勝手に意見を交換する番組のことだった。そこでは足の不自由な子、目の不自由な子、自閉症の子、苛められていた子、様々な子供たちが、自分の体験談を話してそれについて意見を述べ合っていた。

足の不自由な子が、外の世界で不都合と感じていることを話した後で、ある女の子が「私たち健常者には経験がないので分からないことですが……とにかく私たちは、何らかの障害を持つ人たちのことをもつと理解して、共に生きて行くための環境づくりを心がけなければならぬと思います」と発言した。

そこでまた別の男の子が「僕は心身に障害はありませんが、障害のある人たちも、その障害についての自己認識を深め、社会の中で生きていけるように努力するべきだと思います」と発言した。

それを聞いて夕子は「てめーら、自分のケツの八工を追いやがれ！」と言いたい思いに駆られたが、思考回路に以上を来たしているとしても、出来の悪いコピーである彼らを責めるのは、お門違いだということとは自明の理であった。果たして何をもって健常者なのか、夕子は自問していた。

彼らに健常者などという有り得ない妄想を抱かせているのは誰だ。障害のある子供たちが社会に適応するための教育を受けている間に、自分のことを健常者と言い切る子供たちは何を与えられているというのだ。仮に健常者なる子供が存在するとして、彼らにとって社会はいとも簡単に対応できる生易しいものなのか。社会は生きている、そして健常者などと思ひ込めるパラノイア的人間は、致命的な程に社会を知らない。

講義が終了した。夕子は助教授に駆け寄り丁寧にお辞儀してリポートを手渡した。今日の講義は何も聞いていなかったたので、新たなリポートを提出する羽目にはならなかった。

### 第十三章 令子・夕子・麻由香

昼休み、食堂には先に来ていた令子が、向かいに夕子の席を確保して値段の安いＡランチを食べていた。月曜日にはいつも、令子の隣には麻由香という女子学生が座っていた。彼女も令子と同じ経営学部で、この町の女子高からただ一人の入学者だった。

麻由香は、令子が通学電車で眼にしている彼女たちと、同じ高校の出身だとはとても思えない程、地味な出で立ちだった。中学生と見間違えるくらい子供っぽい容姿の麻由香は、装飾や化粧にはまるで縁がなく、小麦色に日焼けした顔と真っ白い歯が印象的だった。可愛い服を着て笑顔で秋葉原へでも繰り出せば、夕子と言えど影が薄くなってしまっただろう。しかし、麻由香はいつもいたって無表情でむすつとしているばかりだった。

夕子はＢランチのトレイを持ったまま麻由香に「こんにちは」と軽く挨拶して席に着いた。麻由香はおずおずと「こんにちは」と挨拶を返したが、それは相手が夕子だから物怖じしているという訳ではなかった。

麻由香にとつては、令子以外の人間は皆、変に大人びて近寄りたくない存在なのだ。夕子には、自分もその他大勢に過ぎないということが、面白い経験だった。

麻由香は自宅から自転車で通学していて、昼食も家で食べているが、月曜日は母親が留守ということで、学生食堂で食べている。

入学してすぐ、令子は忙しい身の上なので、意識して友達を作らないようにしていた。それがいつの間にか、月曜日の昼に麻由香に付き纏われることになっていたというのだ。

本来、麻由香は独りが好きらしく、普段は令子に近付いたりしないのだが、食堂へ行くときだけは、一人では心細いらしい。だから食事中も滅多に言葉を交わさない。

「これ、貸したげる」

夕子が令子のトレイの横に置いた本を見た麻由香は、フォークとナイフを持ったまま、団栗をほおばり過ぎた仔栗鼠が周囲を気にするときにするようなしぐさで「モスラが好き」と夕子とを交互に見た。

令子はその麻由香の様子には気付かず「今朝言つてた本ね、何だ持つて来てたんだ、ありがとう」と言つてシヨルダーバッグの中に入れた。

「朝渡せば令子にリポート読ませる時間なくなつていたからね」

「そういうことか……。ちゃんと提出した？」

「ええ、でも教育論単位落としてもいいような気がするの」

「まあ好きにすればいいことだけど、それにしてもたかが授業じゃない。夕子が演技する余裕ないなんて珍しいこともあるものね」

令子は少し意外そうに言つた。

「教授や学生のことはどうでもいいんだけど、みんな子供にフィードバックされて行くと思うとやりきれないの。黙殺するって共謀者つてことじゃん。教育論なんて選択しなきゃよかった。令子の言うとおり日本では成り立たない学問よね」

「ええ、連綿と受け継がれて来た戦前の歴史を、否定することから始まつた教育だもの、所詮は骨抜きつてことじゃない。ミイラ取りがミイラつて感じ？大切な役割に気付きもせず、どうでもいいような二重構造の是正なんていう罨に落ちて、三重構造を助長するだけなもの。しかも、仮に是正なんてものが上手く行つたとしても、誰も幸福じゃないなんて空し過ぎるわ。でも、夕子いつも言つてるじゃない、私には本来百年後の子供たちへ果たすべき義務はないつて、それなら他人事でいいじゃない」

「まあそうだけど」

言われてみれば、夕子の生涯設計には結婚も出産も含まれていないので、末裔を慮るのは老婆心と思えた。

麻由香はすでに食事を終えようとしていた。皿の上には人參グラ

ッセだけが、手を付けないまま残されていた。

「あら、もう食事終わりなの麻由香？」

夕子の呼びかけにびくつと反応した麻由香は、まるで母親に注意された子供のように下を向いた。

「人参ちゃんと食べようね」

夕子にそう言われると、麻由香はしばらく躊躇するように皿を見詰めていたが、意を決したように全ての人参グラッセにフォークを突き刺し、一口杯にほおばったままトレイを持って席を立ち、そのまま戻らなかった。

「あーあ、夕子が苛めるから」

令子はまたかと、咎めるように夕子を見た。

「ごめん……ふーんだ、どうせ私なんて口うるさい母親ですよ」

夕子はわざとふてくされたような言い方をした。

「悪いと思つてないくせに。麻由香にはいつもそうなのね、何故なんだろう」

麻由香の嫌いな食べ物、人参、ピーマン、セロリとかの子供じみたものばかりで、昼食のたびに残していた。令子は、まだ麻由香と二人で食事していた時から気付いていたが、何も言わなかった。

相手がいくら子供っぽいとしても、余計なお世話と思っていたからである。それをまた、よせばいいのに夕子は、同席するようになって一カ月もたない頃から、ずっと指摘し続けているのだ。夕子が言くと麻由香は、ピーマンでもセロリでも残さずに食べてしまふのだ。

「麻由香も、言われてから食べるのなら、最初から食べておけばいいのに」

令子は大人気ない二人に、呆れたというように言った。

「麻由香がそうして欲しいのよ。それでもあの子には結構気を遣つてるのよ私」

「へえ、そうなんだ、全然見えないけど」

「私が麻由香に食事のマナーの駄目出しをするまで、麻由香は食後



お腹が痛いとか、購買部に行くとか言って、先に席を立つてたじゃない」

「ええ、二人で食べてた時も、いろんな理由を付けて、先に席を立つてたわ」

「だから私がきっかけを作ってあげてるの。もし一緒にいたいなら、人参食べればいいだけなもの」

「ふうん……あなたたちの関係ってまるでメビウスの輪ね。表か裏か全く見当付かないもの」

「ま、彼女のことを子供扱いしたい向きには、とんだ食わせ物ってことね」

「夕子は麻由香が実際はそんなに子供じゃないと言いたいのね」

「そうよ」

「週一回食事のマナーをとにかく言ってるだけで、彼女のことを解るっていの？」

令子は夕子の麻由香についての印象が独善的に思えてならなかった。

「あんた、私に初めて出会ってどんな印象を持った？」

令子は少し考えて「どんなって、生まれてこの方あんたみたいな美人見たことなかったもの……」と答えた。

「どんな人間だと思ったってことよ」

夕子は具体的な質問に切り替えた。

「一般的な美人に輪を掛けたような人間になって……」

依然として令子の答えは具体性に欠けていた。

夕子は自ら答えを用意して「美人に輪を掛けた性格ってつまりは、わがまま、高飛車、冷淡の極みってとこね」と問い詰めた。

「まあそうと言えなくもないけど……確かにそうね、それに加えて何か特別な才能や靈感の類を持ち合わせているやも知れないなどと……私としたことがステレオタイプな見方をしてごめんね。でも逆に夕子からすれば、麻由香以外のほとんどの人間は似たもの同士ってことね」

「それで、今は？」

夕子は矢継ぎ早に質問を浴びせた。

「意外に普通……」

「私はまあこんなだから、麻由香のようなそれに類する人間の、意外とつまらない考え方なんかが見えるの。超資産家のご令嬢なんかと同じように、美人とか可愛いとかいうのも、その子が置かれている環境だと解釈すると、社会との係わりの中で利用出来るものは利用しようとする者もいるってだけのことよ。もう一つ言わせて貰えば、利用出来るものを利用しないということは、利用出来るものを持たない者よりも、ある種の覚悟が必要になるの」

夕子の親友を自負している令子にとって、その発言には身につまされるところがあった。

「それじゃ、麻由香は子供っぽく見えることを利用しているの？」

「その逆よ、あんたこの前デイベイトのときの麻由香の様子話してたよね」

「ええ、英語の講義でデイベイトをするときなんか、誰とチーム組んでも陰に隠れて、でも……でも……しか言わないし、他の課題はトッブクラスだから、麻由香は引っ込み思案ということでみんなは黙認してるけど、もちろんアメリカ人の講師も含めてね……あれで大人なら誰が子供って感じだけど」

令子が納得できない風なのを遮るように、夕子は「あんたもメディアでのデイベイトに危機感を抱いている割には、前向きに取り組んでるのね」と言った。

「うーん……だけどたわいもない内容だし、英語力が付けばまあいいかと思って」

令子は以前夕子とメディアリテラシーについて議論したとき、夕子がデイベイトも槍玉に揚げたことを思い出していた。それにもやはりメディアが深く係わっている。

ちっぽけな問題に関しては、どちらに転ぼうと支障ないように思

えるし、仮に争うのであれば、とりあえず裁判というディベートの場があるのだ。それがメディアを利用しての国家レベルの問題に関するディベートの場合、対立する意見を述べ合っている、最終的には必ず最初からの決め事に落ち着くのである。

要するに、ディベートの方法を学び、効用を信じる者が、国家の予め決められている政策を、プロパガンダを駆使したディベートにより、国民の総意であると誤認させられる可能性があり、民主風ファシズムを助長する。憲法や核や経済について、テレビのディベート番組を見ながら、自分も参加しているように錯覚し、あっちへふらふら、こっちへふらふら、最後にはメディアを操作している者の思惑に賛同するくらいなら、貧しい生い立ちから来るハングリーなお笑いに郷愁を掻き立てられ、涙している方がまだましというのが結論だったように思う。

ディベートに参加するには、正しいリテラシーが必要で、正しいリテラシーがあるのなら、ディベート以前に答えは出ているはずなのだ。ただ、裁判員制度での量刑の決定のように、元々正しい答えがないものには、ディベートで責任をあやふやにするというのも、ストレスを回避するには良策のように思える。殺人など日常茶飯事となりつつある時代、見せしめとしての死刑を増やそうとすれば、みんなで決めたという言い訳があるほうが好都合だろう。本来、個としての（本来は多数であろうと）人間には人間を裁くほどの尊厳は備わっていないのだから。

「私にとつては、英語のお勉強以外の何ものでもありません」

令子はやや開き直りとも取れる発言をした。

「麻由香は英語の講義でもディベート以外では的確な発言をしているのよね、それがディベートの時だけ、でも…でも…としか言わないのは、気おくれとかで発言出来ないのじゃなくて、周りの学生たちが相手をやり込めようと躍起になっていることに、不安を覚えたのよ。でも…でも…は警鐘のつもりよきつと」

「何故そんなに自信たっぷりと言えるのよ、ちゃんと話をしたこと

もないのに。もしそうだとすれば、私がすごく無責任みたいじゃない。子供がいる大人たちの義務を肩代わりする必要があるって言うの？」

令子は、夕子が直感だけで麻由香を自分の同類としていることに置き去りにされたような気分になっていた。

「でも……でも……が根拠なんだけど、ある意味で麻由香は大人過ぎるのよ。ただでさえ子供っぽく見られて、大人びたことを言っても説得力がないことが齒がゆくて仕方ないの。今日の麻由香を見て、自信は確信になったわ。危うい仮説だったけど、やっと真実となり得たって感じ」

「何の説明もなしに、納得する訳ないじゃない」

「今日渡した本を読めば分かるわ」

「夕子の言ってる意味、全然分らない」

令子は力が抜けたように肩を落とし、ため息をついた。

「麻由香があの本を読んでいるということよ。令子は気付かなかったと思うけど、さっき令子に本を渡したとき、表紙を見て目が点になっていたのもあの子。それともう一点、子供もいないのに未来を危惧する老婆心は、あの本のせいだということよ」

「じゃあ読んでみる。解るかな私に……」

令子は、自信なさ気に夕子の顔を見た。

「ただの娯楽小説よ。それに、あんたは案外ニュータントに近い存在だし」

「何それ、モスラの敵？怪物？」

「いえ、むしろ味方って言うか、ニュータントがいなければモスラは繭から出ることすら出来ないわ。小説の中で、未来の夢に出てくる子供たちの中に混じって暮らしている、洗脳されていない子供のこと……でも、いつも独りぼっちなの」

「なしてー！それってそんなに珍しい人種？私のような人間なんて、履いて捨てる程いるじゃない」

「今の世界ではまだしもね。未来は違っているの」

令子には喜ぶべきことが悲しむべきことなのか、判断が付かなかった。

「今日も取材よね」

「六時からだけど。今度はちゃんとした会社の社長だから、問題ないと思うけど」

令子は、陽平のことがあったので、夕子が売春斡旋のことを心配しているのかと思った。

「そのことなんだけど、もういいわ。あんたにも重荷になってるみたいだし」

「えっ！もう斡旋しないでいいってこと？」

令子は、大きな声を出してしまったので慌てて周囲を見回した。食堂にもう学生は殆ど残っていなかった。午後からの講義の時間が迫っていた。

「英国で尼になるの？」

「ならないわよ」と夕子は笑って答えた。

「相手のことを知りもしないで直接交渉は絶対やめてね。夕子の場合、金額が金額だから特に危険だし、私のことなら大丈夫だから」

令子は、声を潜めながら懇願するように言った。

「心配いらないわ。四年生になればフリーメイスンへの根回しとかで忙しいでしょ。だったら今から卒業設計に向けて準備しておこうと思ってさ」

「えーっ！こんなに早くから？まあ、そのほうが私は嬉しいけど、そんなこといつ決めたのよ」

「ついさっき。私思いついたの、『モスラが好き』の中で女の子が見る未来の夢の中に、廃墟と化したオフィス街みがあったのを。しかもそれらのビルディングは、現在最も未来的と思われる新丸ビルクラスの建築物よりも、遥かに環境への負荷に配慮していたにも拘らずよ……。どのような配慮がなされているかと言うと、設計段階で既に解体に至るまでの間に考え得る全ての合理的方法が取り込まれていたの。建設材料のモジュール化及び単純化、外周部の柱を組柱

に集約し、リニューアルを容易にするスーパーフレーム、損傷制御による耐震、コアスペースの合理化、スケルトン・インフィルの徹底、C A S B E E（環境評価システム）により評価した環境性能はSプラス超になっていたのよ…。もちろん建築物の環境破壊への影響以上に、考えなきゃいけないことは多いけど、私の専門じゃないし……この時代の技術を最大限に駆使したところで結果がそれなら元々適当に選んだ学部だけど、一応最先端を自負して勉強していたことが腹立たしくなったの。『モスラが好き』で、まだ足りない何かがあることを示唆しているんだったら、本腰を入れて未来建築つてのはこれだ、みたいなあーつてのを設計したくなっちゃったのよ。いかに頑張り屋さんの私でも、さすがにこればかりはちよつとねえつて感じ……かな」

「そんな大変なことを、そんなすぐに決めれるの？」と令子は呆れて尋ねた。

「はい！社会的な方へと向かうときは、行き当たりばったりでいいのよ。四カ月集中して無理だったらすわ。そのときはよろしく」「はっやーい！四カ月ってなによ？」と令子は呆れて尋ねた。

「私のサイクル」

「そうですか……講義に遅れるから行くね」

夕子と別れた令子は、足早に歩きながらショルダーバッグの中に入れた、よれよれになった娯楽小説「モスラが好き」に触れてみた。それは子供の頃からずっと探し続けている、不思議というものの形のようなだった。

## 第十四章 取材活動

午後六時少し前に訪問したオフィスには女性社員が一人残っているだけだった。

その人の年齢は三十歳くらいで、清楚な私服を着用していた。

「お待ちしておりました、こちらへどうぞ」

女性社員は席を立てて丁寧に挨拶し、飾り気のない笑顔になった。洗練された言葉遣いと、立ち居振る舞いの優雅さからおそらく社長秘書であろうと思われた。

女性社員は「こちらへどうぞ」と、令子を社長室へ案内してくれた。

サインボードに社長室と明記はされているが、そこはオフィスの一角をパーティションで区切って、応接セットを配置しただけの狭隘なスペースに過ぎなかった。スチール製のドアを開けた女性社員に促され中に入ると「わが社へようこそ」とソファから立ち上がった社長が迎えてくれた。社長の方から手を差し出して来たので、令子は軽く握手しながら「先日は電話での勝手なお願いにもかかわらず、取材にご協力いただけることを感謝しています」と謝辞を述べた。

「どういたしまして、私どもで何かお役に立てるのであれば、喜んで協力させていただきます。どうぞお掛けください」

令子はテーブルを挟んで社長と向き合った。

「それはそうと、大学から直接来られたのですか？」

「はい。講義が終わってすぐ、こちらへ直行しました」

令子は、取材の場所は極力会社でお願いすることになっていた。当然その方が美味しい資料を収集出来る可能性が高いからだ。今回の会社も電車を乗り継がなければならなかったので、訪問するのに一時間近く掛かってしまったが、それは珍しいことでもなかった。「それはお疲れ様でした。まあ、お茶でも飲んで一息入れてくださ

い」

「ありがとうございます」

令子はお茶を注いでくれた女性社員にも会釈して、改めて社長の顔を見た。

「失礼ですけど、お若いんですね」

「学生さんからしたら、すっかりおじさんになっちゃいました。今年四十歳になるんですが、未だに学生気分が抜けきってないんですよ」

「えっ、四十歳ですか、全然見えませんね」

令子は驚いたように言った。それは、お世辞ではなく、実際三十歳を少し超えたくらいにしか見えなかったのだ。彼は今まで取材した社長とは、何処か違っていた。

「実は私もあなたと同じ大学へ通っていたんです。院生になった夏に親父が亡くなりましてね。私は父の仕事を継ぐ気などなかったの、しばらくは大学へ通ってましたが、時代の流れというんですか、結局大学を止めて父の会社を継いだ次第です」

「そうなんですか。あの、学生がいきなり会社を継ぐって可能なんですか？」

令子は、社長の風貌に院生っぽいところが見受けられるのは、途中でリタイアしたことに對する葛藤に起因するトラウマの一種なのかと感じた。

「会社を継ぐと言っても、その頃は町の小さな不動産屋さんというようなものでしたけど……親父の闘病期間が長かったので、亡くなったときにはすっかり左前になっていました……こんな話役に立たないですね」

「いいえ……こちらこそ、そんなことまで話していただいて、恐縮です」

令子は、目の前にいる院生風の社長が、どのように今の会社を発展させて来たのか、その経緯に興味を持った。

「親父が亡くなった頃がちょうどバブル創成期でした。団塊の世代



がそろそろマイホームを考え始めるタイミングを見計らったように地価が高騰し、そのために投機的な需要が発生しようとしているといった状況でした。見かけは今のアメリカの状況と似通っていたと言えますが、世界を巻き込む金融経済から程遠い実物経済の優先に固執しているだけでは、経済成長など期待できるはずもありませんでしたけれど。私は母と相談して、父から相続した私どもの住居以外の僅かばかりの土地を処分しようと考えました。その金を従業員といっても親父の友人だった営業の人が一人でしたけど、退職金として支払って、余った金で母子二人細々と暮らしながらも、なんとか修士課程は修了出来るかなと思ひまして。それに営業の人は不動産取引の資格を持っていたので、何処でもやって行けると思っただんです」

そこまで話して社長は「普通はこんなことは話さないんですが」と言つて、湯呑み茶碗に手を伸ばした。

「たまに学生が訪ねて来るんですよ、卒業論文や修士論文のデータ収集が目的でね。そんなときはもつと端的に対応しているんですが、相手が美人の女子学生となると、つい余計なことまで話してしまつて、申し訳ない」

「いえ、ありがとうございます。大学院生の方も訪ねて来られるんですね」

令子は、もし相手がタ子だったら社長は両親の馴れ初めから話をするに違いないと考えていた。

「それで、結局修士課程は修了されなかつたんですよね？」

「ええ、ある人に店終いの件を話したところ、これから先、大学院なんかへ通っているよりも凄い経験が出来るからと説得されたんです。言うまでもなく、実物経済の最後の切り札とも言ふべき、土地バブルによる経済効果のことです。日本国内の土地にはメイドインチャイナなんてないのだから、どれだけ内需が落ち込もうと、取って代わられる心配はないとのことでした。結局は相続した家屋敷を含む全てを担保に借りたお金を元手に、その時点で抱えていた販売

物件である土地を、売主の希望価格で買い取ることになりました。購入価格と、その物件を担保に融資を受けれる金額との差額を、相続した不動産で融資を受けたお金で補填して、可能な限りの土地を購入しました。保有期間中は資金繰りに苦労しましたが、土地の価格は青天井かと思うほど上昇しまして、最終的にとてもない金額で売却することが出来ました」

「本当に凄い時代だったそうですね」

俗っぽく言えば土地成金か、そろそろ佳境に入って来たなと令子 thought 思っていた。

「あなたの大学の山根学長ご存知ですか？」と社長が質問した。

「ええ、なんでも教授時代はすごく変わり者だったとか……」

令子は社長の唐突な質問に少しとまどっていた。

「私に土地を購入することを勧めてくれたある人というのが山根教授でした。実は、私は四年生のとき、山根教授のゼミだったんですよ。大学院でも山根教授の研究室にいましたが」

「あつ、すみません、よく知りもしないのに」

「いえ、確かに変なところありましたから。本人は経済学の教授だったのですが、英語以外の外国語は必要ないと、その頃の学長に執拗に意見していましたからねえ。おかげで、国際的な経済社会実現へのヴィジョンに欠けるとか言って、学長が政治家にこっぴどく叱責されたそうです。」

その時点での山根教授の言い分は、ビルゲイツがアメリカ人だということでした。グローバル経済が推し進める金融経済の下では、ハードウェア産業よりも、ソフトウェア産業の優位性が絶対的であるから、アメリカより遥かに資源の乏しい日本では、パソコンや液晶ディスプレイ、増してや自動車などという、時代遅れの製品に執着している場合ではない。

仮に英語を国語とするなら、ソフトウェア産業でアメリカと競合することは十分可能であるというのが、山根教授の考え方でした。学長になってからも、グローバルな分野に関しては、例え相手が母

国語至上主義のフランス人であろうと英語でという意見に変わりはありませんが、ビルゲイツの影響力については以前よりも否定的な考え方になっておられるようです。最近は日本発IT革命を大学のスローガンにしているくらいですから」

「よくご存知ですね」と、令子は感心して言った。

確かに令子の大学では、従来のストラクチャード・データを処理するリレーショナル・データベースよりも、アンストラクチャード・データの処理に適したインデックス・ファブリクスの研究に力を入れていたからだ。

社長は隅に置かれた小さなオーディオへ歩み寄った。パーティションだけで仕切られた部屋で、オーディオは無用の長物に思われた。令子がそんなことを考えているうちに、音楽が流れ出した。

「ちよつとの間この音楽を聴いてください」

「はい……」

令子は意味も分からないまま、音楽に耳を傾けた。モーツァルトの有名な弦楽四重奏曲「狩」だったが、第一楽章も終わってないのに別の音楽が流れ出した。その音楽を令子は初めて聴いたが、響きの端々から現代クラシックの香りを漂わせていた。

「君はどちらを選びますか？」と社長が尋ねた。

令子はお見合いでもあるまいし、音楽の趣味など聞いてどうするんだろうと思ったが、取材の都合もあるので、少し考えてから、後の方にしますと答えた。

「そうですか、分かりました、変なことを聞いてすみません。先ほど私は、学生時代に現在学長をしておられる山根教授のゼミにいたと言いましたよね」

「はい……」

「当時、様々な問題があったにも拘らず、山根ゼミは希望者が多く、毎年趣向の違う試験があったんです。実は、今聴いていた音楽が、私の年の試験だったんです。実際の試験では、後の音楽を選

んだ学生の方が教授の予想より上回っていたので、レポート用紙を配られて、その理由を英語で書かされました。要するに英語の重要性を認識しているかどうかのテストだったのですが、最終的には希望者の五分の一くらいになりました。そのとき教授が理論値どおりだと言われたのを聞いて、さすが山根教授だと感心してました。よく考えてみると、教授の一存で選んでるのだから、当たり前のことですが」

「そうだったんですか」と言いながら令子は、頭の中でその音楽を選んだ理由を英語で考えていた。

「私は取材に応じているだけなので、そこまで厳密に線を引こうとは思っていません。」

山根教授にしても、高い能力を持った学生を選ぼうとしていたのではなく、自分と同じ切り口で研究に取り組むのに、より適した者を選んでいただけなのです。私は取材に来た全ての院生に情報を提供しています。それでは何故こんな試験のようなことをするのかといえば、これは私の都合でもあるのですが、学生を混乱させることなく短い時間で済ませたいからなのです。だから私は、おおまかではあるんですが、二種類の対応をしています」

「あの、お言葉ですが、私は何も論文を書くために取材している訳ではありません。もちろん、遊び半分ではありませんけど。単刀直入に言いますと、会社を経営する中でのターニングポイントがありますよね。そのときの経営者の心理とそこから導き出された結果が知りたいんです。不動産業ならバブルを助長する要因となった土地転がしという現象の渦中で、大抵の不動産業者なら売却した資金で別の不動産を購入して、結局は損失を被っているのに、社長は何故異業種への転向をされたのかとかな……」

令子は、論文のための仮説を理論化するためのデータが欲しい訳ではなかった。そんなものは大手市場企業の会社情報でも参考にすればいいことだった。大企業ともなれば社長個人の心理が会社の経営方針に直結しない、要するにサラリーマンなので、取材する意味

がなかった。

令子の取材対象は、株式を上場している企業以外の会社の経営者であった。個個の会社のターニングポイントにおいて、経営方針を決定するに際し、経営者心理がどのように作用していたのかを知りたいのだ。その成果を同時期の同業種平均値と比較し、一般的にこの時期にはこうだったが、こう考えることにより平均値を上回ることとなったという成功例を収集したいのだ。また、中には社長のようにな、違った事業を展開することにより、利益を得るという方向性もあるだろう。その乖離部分こそが、令子が求める理論なき現実であり、検証不能な仮説である。

令子は何故そのようなことに興味を抱いたのか。それは、幼い頃からの謎だったパチンコを始めとする、自分の欲望の尻尾を追い駆けて消費し、拳句の果てに人生を消耗するシステムと、それを尻目に成功する者との相関関係を明らかにしてみたい欲望であった。

「ああそうだ、君はまだ大学一年生だと言ってたね」

「統計学で証明出来ないのが、経営心理学の理論だと思うんです」

「山根教授がおっしゃっていたこともそういうことでした。多数決で証明した理論は経済の動向を予想するのに役立つても、発展的経営の指針にはならないと」

その後社長は、バブル末期に土地を売却して得た利益で、現在の事業を立ち上げたときの状況から将来の展望についてまでを話してくれた。

バブル終焉期、都市部の農地の固定資産税は、宅地並み課税により営農利益よりも税金の方が遥かに高額となっていた。また、戦前からの小作地においても、小作料の何倍もの税金が課せられることとなった。地主と小作をしている人の協議により、何割かの離作保障を支払うことで多くの農地が売却され宅地となった。その一方で、先祖から引き継いだ農地を手放すことに抵抗を感じている地主も多数存在した。しかも、農業の担い手が不足している中で、草刈等の

維持管理に別途費用が必要となっているケースも多く見受けられた。折も折、世の中は土地の高騰に加えての核家族化により、最早マイホームを持つことを諦めざるを得ない状況となっていた。

そこで、これもまた山根教授のアドバイスにより、現在の事業、即ち都市計画法で言う市街化区域に農地を所有している地主に、その土地を担保に銀行から融資を受けていただき、アパートを建設し、家賃収入により幾ばくかの利益を得ていただくという事業だった。それによる固定資産税及び相続税の低減が謳い文句であった。社長は、土地を売り払って得た利益を、事業遂行に必要な事務所、営業マン、プロジェクトマネージャー、アパート経営に関するアドバイザー等を整備する資金としたのだった。

「ご存知ないかもしれませんが我が社の特色として、アパートでありながら百年住宅の実現があります。これは山根教授の助言というよりは、命令で取り組んで来たのですが……。そのためには建物の構造自体に関する建築費用が若干高くなっていることが、市場では不利な条件となっています。経営というより理念上の問題ですから、当然のことだと思っています」

社長は少し寂しそうな顔をした。

「オープンビルディングに取り組んでおられることは、ホームページには掲載してありませんでしたが」

「そんなこと掲載したからって、プラスにはならないからね」

「ですけど、アパートの経営者にとっても、結局そのほうが有利になるのではないのですか？」

「大抵の人は百年も先のことを考えないからねえ。我が社を選んでくれる人の大半は、見えない将来の利益を望んでいる訳じゃないんだ」  
社長の言葉は現実への諦めとも受け取れたが、眼差しに不満の影はなかった。

「サステナビリティへの無関心ですか」

「今じゃ話にもならないけれど、この会社を始めた一九九五年は、

サステイナブルエコノミーが可能な最終期限だったからね。もつとも、これは山根教授と私だけの主張で、世間では今でも可能だと考えているようだけど……」

一九九五年というのは、令子の祖父が言っていた日本経済のターニング・ポイントと一致している。内需産業の流通部門の労働生産性を向上させることと農業部門の復興が、日本経済の目指すべき方向であるというものであった。にも拘らず日本は、アメリカの用意周到な経済計画に偶然生じた隙間に乗じて、相変わらず輸出中心の経済政策を継続した。京都議定書へのアメリカと中国の反発により、間違った経済政策は一見正解であったかのような様相を呈しながら、近い将来の経済破綻、食糧危機、環境破壊へのシフトを加速したのであった。

「現在は少子化の危機が叫ばれていますが、賃貸住宅の将来の需要予測についてはどのようにお考えですか？」

令子には、将来日本の人口が減少すれば、土地の価格が下がり、アパートの需要は少なくなると思えた。

「核家族化が一層進展するので、住宅需要は減少しません。その上日本という国は、若年者人口を減らす訳にいかないんです。未開発国で増加した人口が減少するのは国にとってあまり悪影響はないんですが、日本では状況がまるで違っています」

「年金の問題ですか？」と令子が言うと、社長は「年金に関しては少子化以前に制度そのものの問題であると言えます。ちゃんと機能していれば、老後の生活への不安を解消し、現状での内需を拡大させて、景気を良くする方向へ働きますが、最早老後を年金に委ねることに何ら安らぎを求めることが出来ません。バブル崩壊後間もなく山根教授が、どのような方法でかは聞いてませんが、国民年金基金の積立額を試算したところによれば、実際の積立額の方が少なく見積もっても二十兆円程度不足しているというような、面白いことを言っていました。面白いなど言えば不謹慎ですが、国としてはどのように辻褄を合わせるのでしょうかと質問したところ、データ

を改ざんした上で、不明金を二十兆円捻出し、その部分については積み立て期間が二十五年に満たない加入者への最低保障として支払うというものでした。もちろん不明金と言っても何処かへ消えてしまつて、基金には残っていないのですから、税金を投入するしかないのですが……。日本経済は団塊の世代の人口を基準として発展して来ましたが、例えば経済の根幹を担う道路網にしても、税の担い手である働き盛りの割合が減ればその機能を維持することは困難になるでしょう。それと土地の価格が下がることも、日本経済にとっては致命的です。経済大国日本の遺物であるインフラストラクチュアを支えるキーワードは少子化対策と核家族化の推進です。出産から義務教育終了までの福祉、教育、税制面での優遇は強化されますが、その後の保障は一切ありません。低賃金、低所得税、高消費税時代への邁進があるばかりです。理解してはいるが、いまいが、よかれ悪しかれ、政治はその方向にしか向きようがないのです。政治家がいくら討論を重ねようと、マスメディアがいくら問題提起しても、それは予め用意された解答への伏線でしかあり得ないし、私たちは自分が出した答えという大義名分の下、団塊の世代が築いた経済機構と運命を共にするしかないのです。私には小学四年の子供がいまいます。孫が出来る頃には海外へ移住するというのが、私の政治であり、日本の政治同様に決定事項です。唯一違っているのは、子供に対して頭ごなしに伝えていること、言わば一党独裁のようなものだということです。ですが、独裁と言っても十分に証拠を与えてますし、子供は全面的に支持してくれています。もちろん正しい意味でのリテラシーによつてね。自分の理想を子供が認めないと悩んでいる親は、怒ったり嘆いたりする以前に、まずその理想が間違っているとの仮定へフィードバックすることから始めなければなりません。それが出来ない人は、社会でもリーダーにはなれません」と続けた。

「高齢者対策や、障害を持つ人への対策はどうなるのですか？」

令子は本題からそれた質問になつてしまつているなと感じていた。「私がとやかく言うべきことではありませんが、あくまで私見であ



ることを念頭に置いて聞いてください。障害を持つ人はマイノリティーですから、保険制度への移行は国民の同意を得ることが困難なので、国の政策は、障害者自立支援法の制定以降、詭弁を弄しながら徐々に負の方向へと向かっています。その立場になってみないと政策の不備を実感出来ないというのも、人間としての悲しい性ですね。

高齢者医療に関しては、誰しもいずれは我が身という考えを持っているので、税制面での国民の同意は得やすい状況にありました。日本固有の医師会の権力と相まって、高齢者の延命政策が花を咲かせた訳ですが、ここでも当然のことながら税の担い手である労働者世代にしわ寄せが来ています。

二〇〇〇年に満を持して登場した介護保険制度ですが、三年毎の見直しの都度保険料が上昇し、実質は既に破綻しています。今後介護報酬の際限のない減額に対応するため、事業者としてはサービスの質を低下させるか、賃金を下げるか、誤魔化すか、撤退するかの四者択一を迫られています。撤退を選択しない限り、サービスの質を低下させることや大きな誤魔化しが、個人のモラルとして、或いは社会通念上許されないのであれば、賃金を下げる道しか残されていません。マスメディアで、福祉に従事する人間は高潔な精神を持ち、劣悪な就業環境にも耐えて然るべきだなどと発言する輩がありますが、大変な人権侵害だと言えるでしょう。誰しもが生計を維持することが正に死活問題である状況で、ボランティア精神を高揚する人々には正義のひと欠片も感じられません。もしも、その発言をした輩が、家族のことも犠牲にした上で、ボランティア活動に全身全霊を傾けている人間であるなら、その人の家族を気の毒に思わざるを得ません。

現行介護保険制度の歪みは、超高齢化社会の進展により、今後地価の安い市や町に集中して、老人ホームやケアハウスの建設が行われるだろうことです。それによる地方公共団体の財政負担の増大、それ以上に、もともと高齢化率が高く、高額な負担をしいられてい

る介護保険被保険者である住民の、更なる負担額の増加を考えると恐ろしいものがあります。もっとも、浅い知識なので、現時点ではもっと深刻な事態が顕在しているでしょうが……」

その後、社長は女性社員に幾つかの資料を持って来るように言った。女性社員がテーブルの上に置いた資料は会議で使うもののよう  
に整然と揃えられていた。

「ありがとうございます。あの、遅くさせてしまつてすみません」  
令子は申し訳なさそうに女性社員に頭を下げた。

「いえ、気になさらないでください、仕事も残っていましたから。それよりお役に立てたのでしょうか？」

女性社員の問いかけに驚いた令子は、返答に窮して社長の顔を見た。

## 第十五章 学長の娘

「女房なんですよ、秘書兼事務員それに雑用：いろいろしてもらっています」

「そうですか、とても綺麗な方だなと思っていました」

令子はそう言ってから社長の奥さんの方に向き直って「とても参考になりました」と言った。

「いいえ、取り留めのない話ばかりで：あの、田所さんでしたね、この資料について話はなさらないのですか？」

社長の隣に腰を下ろした真理子は、今更のように令子に尋ねた。

「この人はいいんだよ、ね、田所さん」

「はい、数字とかについては後で今日聞かせていただいたことと照合しますから」

令子が答えると社長の奥さんは「そうなの……他の学生さんのときは最初から資料に基づいた話をしていたのに、変だなと思って。もしかしてあなた、セシル・テイラーを選んだのかしら？」と尋ねた。

「えっ、何のことですか？」

令子は意味が分からず聞き返した。

「モーツァルトは選ばなかったのね」

令子はモーツァルトの方は知っていたので「はい」と答えた。

「実は、女房は山根学長の娘なんです」と社長が言った。

「えっ、そうなんですか？」

令子は驚いて奥さんの顔を見た。

「真理子と言います、よろしくね。私も卒業生なのよ。だからあなたみたいな可愛い人が訪問してくれたことが嬉しくて……ごめんなさい引き止めてしまつて」

「いいえとんでもないです、お子さんは大丈夫なんですか？」

令子は、社長が話していた男の子のことを思い出した。

「ええ、すっかりもののお祖母ちゃんが付いてくれていますから」  
「あの、失礼ですが……真理子さんはお若いですよ、社長と知り合われたことはすごく偶然のように思われますが……」

令子は、目の前の夫婦がどのような偶然が作用して結ばれることになったのか興味を持った。テーブルの上には誰も気に止めようともしない資料が置き去りにされたままだった。

「歳はそんなに違わないですよ。主人は今年四十歳、私は三十六歳になりました。主人とは高校三年生の秋に始めて会ったんです。私は大学の近くにある女子高に通っていたのですが、その日は母と一緒に建築間もない観光ホテルMARINEWINDのレストランでということだったので、学校帰りに大学の方へ父を迎えに行ったのです。そうしないと父は学生たちと話し込んで約束を忘れてしまうことがしょっちゅうだったものですから。教授室に入ると父は案の定四年生の学生三人とレコードを掛けながら雑談をしているところでした。その中の一人が主人でした」

「それからお付き合いされるようになったのですか？」

二人はどう見ても実年齢より優に五歳は若く見えた。これも似たもの夫婦ってことかと令子は一人納得していた。

「いえ、確かに主人は初対面にも拘らず、女学校に通っていて同年代の男の人には尻込みしてしまうような私でも、普通に話が出来そうな人だなと漠然と感じましたが……要するに一目惚れだったのでしょう。のろけ話みたいでごめんなさいね。でもその頃の私は、父のことを凄く堅物な人間と思っていたので、男の人とお付き合いすることなんか考えたこともありませんでした」

確かにのろけ話だった。それに学長が堅物……これについては夕子にも教えてあげなければ……最早令子はこの夫婦の馴れ初めに興味津々で、テーブルの上の貴重な資料は既にものの哀れを漂わせていた。

令子の様子で興味を示しているのを確認すると、真理子は我が意を得たりとばかりに話を続けた。

「その日レストランで食事しながら、私はそれとなく主人のことを父に聞いてみました。父も主人のことが気に入っていたようで、すぐに誰のことか分かったようでした。父は、彼は大学院に進むことを希望していて、将来は博士課程を選ぶことになるだろうと、嬉しそうに話していました。それが私の大学選びの原点でした。」

「知らなかったなあ、そんなこと」

社長が、初めて聞いた話だと言うように口を挟んだ。

真理子は構わず話を続けた。

「大学へ通うようになった私は、キャンパスで主人に会うことは殆どないにも拘わらず、幸福な気分でした。何故かと言えば、午後の講義が終わって教授室を訪ねると、主人に会えましたから。主人とその一味はいつも父とレコードを聴きながら雑談していました。音楽を聴くために集っていたと言う方が正しいのかも知れません。私は、近所にジャズ喫茶のようなものがなかったことを喜んでいました。父は不思議と私が訪問することを迷惑がらず、むしろ喜んでいました。私は、自分の居場所を確固たるものにするため、せっせとコーヒーを淹れ、たまには近くの店で買って来たショートケーキを振舞ったりしました。そんな日に主人がいないと、本当にがっかりしましたが、もちろんそんなことはおくびにも出さず健気に立ち回っていました。しばらくして、元々病気がちだった主人のお父様の具合が悪くなり入院されたのです。私は心配でたまりませんでした。誰に話をするともなく、一人気を揉んでいました。やがて主人は教授室へ顔を出すことがなくなり、自然と私の足も遠のきました。冬休みが終わってすぐに、私は父から主人のお父様が亡くなり大学を止めたと聞かされ、溢れる涙を抑えることが出来ませんでした。主人は夏休みの間にお父様がお亡くなりになったことを、誰にも言っただけです。ところがある日、家での夕食が終わった頃主人が訪ねて来たのです。玄関のドアを開け出迎えた私に彼は、父に研究のことで相談したいことがあると呼ばれたと言っていました。二人とも父の書斎に籠ったままでしたが、しばらくすると

父が私を呼んでコーヒーを淹れるように言いました。その日は書斎のコーヒーメーカーで二人分のコーヒーを作っただけで、すぐに部屋を出ました。大切な話の邪魔をしてはいけないと思ったからです。でも二人の様子を窺うと大学でのときと同じように、レコードを聴いて雑談しているだけのようでした。その後、主人は月に二度くらいのペースで家を訪ねて来るようになりました。最初の頃はコーヒーを淹れるとき以外書斎に入ることを躊躇していましたが、いつもいつもレコードを聴いているだけで、大切な話など微塵もしていないと確信してから私は私も仲間に入って、書斎はすっかりジャズ喫茶の様相を呈していました」

「君が泣いていたなんて知らなかった。父が亡くなったとき、私は大学の仲間や教授に伝えることをためらいました。そうすることは大学を止めるという報告のように思えたからです。結局は三カ月長く在籍しただけで、修士論文を完成することもないままに退学することになりました。えーっと……それじゃ教授は君のために私を招待してくれていたってことかい？」

「そうよ」

「ふうん……」

「ぶっ……あつごめんなさい、いいとこなのに、あつ、すみません。」

令子は子供みたいな夫婦の掛け合いに思わず吹き出していた。丁重に取材に応じてくれたこの二人には失礼だが、友達に対する以上の慇懃さを維持することには無理があるように思えた。

「ねえ、田所さん」

「はい……」

真理子の呼び掛けに令子は少し身体を硬くして身構え、笑ったりして失礼だったかなと、恐る恐る真理子の眼を覗き込んだ。

「あなた、主人の秘書をして頂けないかしら？」

「えっ!？」

「おいおい、この人はまだ一年生なんだぞ」

面喰らっている令子より早く、社長が答えていた。

「何だそうなの、四年生じゃないんだ。そうよねえ、女子高生と言われても違和感ないもの。いいじゃない、卒業してからということ、ねえ田所さん」

「あの、秘書なら奥さんがされているのでは……」

「そっか、卒業まであと三年か……この会社も年々大きくなって、オフィシャルな場所へ出向く機会も増えて来たのよねえ。その頃私は四十歳に手が届いてるわ。秘書にも賞味期限があるの、分かるでしょ。もつとも、その十年後には海外で隠遁生活を送っているはずだけ」

「私に秘書の仕事は無理です」

令子は断る口実にそう言った。

「心配しなくていいのよ、私は事務員として会社には残るから、どんなことでもフォローするから、約束するわ。ねえあなた」

「ああ。私たちが海外へ移住するときは、君が望むなら経営を任せてもいいよ」

社長はさも当たり前のように返事をした。

「何故初対面でいきなり私なんですか？私は採用試験を受けに来たのでもないし、履歴書も出していないのに」

令子は当惑していた。

「あなたは主人が今日まで知らなかったことだって、既に知っているじゃない」

「それは……真理子さんが今日初めて話をされたからで……」

「それが信頼関係っていうものじゃないかしら、ねえあなた」

真理子は同意を求めるように社長の顔を見た。

社長は頷きながら令子に「どうだろう田所さん、よく考えてみてはくれないかな？」と

真剣な顔をして言った。

社長秘書が、社長と奥さんとの馴れ初めを知っていることが、会

社を経営して行く上で、何の役に立つというのだろうか。不倫関係にあれば有り得ることだが、それは公私混同というものだろう。

取材に来たのが夕子だったとしたら、真理子は秘書になってくれなどという話を気軽に持ち出すだろうか？ まあ夕子の場合、あまりの美人だからということでは警戒される以前に、人間性の部分でさじを投げられる方が先に立つだろう。



## 第十六章 昭和の戦争

令子が下宿に帰り着いた時には、午後十時を過ぎていた。社長秘書の件は大学三年になったときに返事をするということで妥協した。令子はベッドの中で夕子に借りた「モスラが好き」を開いてみたが、睡魔に襲われそのまま眠りに就いた。帰りの電車の中で読んだ冒頭の何ページかが、夜明け前の夢に現れた。それは陽平が見た夢のシーンだった。

第二次世界大戦も終わりに近付いた夏、日本の何処かでの物語。その海岸線は小さな漁港がある以外は自然そのものだったが、MARINEWINDからの景観と良く似ていた。砂浜を小学生くらいの子供が何人か裸で走り回っていた。泳いでいる子供もいたが、近くに大人の姿はなかった。

海岸から少し離れて一本の短い道路が眼に入った。横に粗末な建物があ、近付いてみるとそれは兵舎で、道路のように見えたのは急ごしらえの滑走路だった。格納庫らしきものはなかったが、良く見ると滑走路の奥には木の枝や草でカムフラージュした戦闘機が数機あった。

間もなく兵舎の中から兵隊が出て来て、教官らしき者が五人訓練生らしき者が十人戦闘機の前に対面して整列した。敬礼が終わるとすぐに教官の中心にいた人物が話し始めた。兵隊たちの顔ははつきり認識出来ないにもかかわらず、声だけは鮮明に聞き取れた。遠い潮騒が通奏低音のように、過去に小さな世界で起きたささやかな瞬間を調和していた。教官の決して威圧的ではない重く透明な声は、戦争という現実を超克して海底で呼吸する音楽だった。

「君たちには今更隠し立てなど無意味なことであると思えるので、私の率直な考えを述べる。戦況は非常に深刻であり、首都は壊滅的打撃を被っている、にもかかわらずいつ果てるともなく戦争は続い

ている。我が国の人民が絶えるより早く、石油が絶えることを願うのみである……。早朝軍部から指令があつた」

訓練生の列に一瞬緊張が漲つた。

「北上している敵航空母艦を攻撃せよということだ……護衛はない。往路の燃料を積んだあの五機で明日の早朝に出撃する」

教官は振り向き、木の枝に覆われた機体を指差した。

「出撃する者はくじ引きで決定することとしていたが、私が決めることにした。異存はあるか？」

「異存ありません」

ほんの短い逡巡のあと、訓練生たちは一斉に返事をした。

「それでは発表する。攻撃機には私を含む教官五名が搭乗する……以上だ」

暫くの間波の音だけが響いていた。十五人の兵隊は風の中で静止したまま、命の重さを推し量るように、ただその音に身を預けているようだった。

「そんなことが許されるのですか？教官がいなくなつて、この先やつて来る訓練生はどうなるのですか？それに教官には奥さんや子供がえられるではありませんか」

訓練生の一人が発した言葉には少年のような一途さが残つていて、やり場のない憤りに震えていた。

「短い期間ではあつたが、君たちには操縦技術を始めとして、人生の先立ちとしてのささやかな教訓じみたことまで伝えて来たつもりだ。君たちがどのように思つていたかは知らないが、我々は君たちのことを自分の子供と思つて指導して来た。気に沿わぬことも多々あつたと思うが許してくれ。操縦技術に関して言えば君たちはもう教官としても十分通用するだろう。君たちが私の妻や子供のことを慮つてくれたことに感謝する。そこで君たちに質問したいのだが……君たちは何のために命を賭して戦つているのか？」

「日本国民のために……」

別の訓練生が答えた。

「その中には私の妻や子も入っているのかね」

「当然であります」

「非日常で構築された時代の声に惑わされてはいけない。子供を助けるのは親の役目だ」

「守るべき者には私たちの親も含まれております」

「自分を守るために子供を死なせてまで、生きていたいと思う親がいるかね……回れ右！」

訓練生は一斉に身体を反転した。彼らの前にはいつもと変わらない海があり、空にはかもめが群れていた。

「アメリカとの戦争に至ったロシアの影響を初めとして、君たちに伝えるべきことは伝えて来たつもりだ。君たちが私たちの指導方針に疑問を抱いていたことは知っている。この非常時に何を悠長なことをとっていただろう。私たちは操縦にしても戦闘機に搭乗させるために指導していたのではない。いつかあのかもめたたちのように、自由な空で羽ばたいてくれることを願っている」

翌朝五機の戦闘機は朝焼けの空へ飛び立って行った。十人の訓練生は敬礼をして見送っていた。機体が水平線の彼方へと消えたあとには、波の音が静かに別れの時を刻んでいた。

場面が変わり、終戦後の長崎で、GHQ三人と日本政府高官らしき者が五人、会話を交わしながら歩いている。

「原爆投下について、将来においては合衆国の責任に言及することもあるかと思われるが……」

GHQの一人が、慎重な面持ちで切り出した。

別の一人が「これ以上この戦争を長期化させれば、本土の非戦闘員をも巻き込むこととなり、そうなれば戦争責任を国民総意に転嫁することは非常に困難になるだろう。仮に現在をやり過ごせたとしても、将来において誤魔化しきれる保障は全くと言っていいほどないだろう。天皇を擁護する限りにおいて、原爆投下は日本国民の犠牲を最小限に抑えるための最終通告である。このことは未来永劫に

において普遍の真実とする」と、見解を述べている。

天皇擁護なんてソビエトの台頭を警戒する、アメリカの都合だったということは、今の日本では誰もが知っていることだ。そのときの世界が現在の状況であれば、本土決戦が首都に及び天皇制は崩壊していたかも知れない。

敗戦国日本の責任は、戦勝国の言い分であることにして、問題なのは、まるで自分たちが天皇制を擁護したかのように、臆面もなく戦後の日本に君臨し続けている者たちだ。アメリカによる支配を同盟という言葉にすり替え、永きに渡り自治国家であると幻想を抱かせて来たことが、幸福であつたのか不幸であつたのかはどうでもいいことだが、少なくとも戦前の歴史を否定し続けたことは、彼らの犯した最も大きな罪悪の一つであり、日本国民にとっての不幸であつたと言える。

日本民族唯一のアイデンティティーの拠りどころであつた神話を否定しながら、天皇制を存続させるパラドクスに陥った日本人は、リベラリズムを誇張する教育を受けた占領軍の兵士により洗脳され、ギヴミー・チョコレートと口にするに馴らされたまま、大人への階段を上って行つたのである。それにも拘らず誇りを失わなかった者があるとすれば、沖縄やアイヌの人々であろう。彼等はそれまでもマイノリティーとしての境遇に耐え、民族共通の確固たるアイデンティティーを持ち続けていたからである。

その後の日本人は、金と肩書き以外のものにアイデンティティーを見出せない国民に成り下がってしまった。同時にそのことこそが、アメリカの占領政策が目指したところであつたのだ。許されないのは、ドルが弱いときも、強く見せ掛けているときも、アメリカに有利な「構造改革」「規制緩和」等を実行する者たちである。ドル安になつてからの郵政民営化は、アメリカにとっては全く魅力のない出来事である。郵貯の株式が上場された後しばらくすると、アメリカは全ての日本の株式を売り抜けて、ドル安へとシフトするのである。そのとき、強いドル政策を敢行する上で、苦渋を舐めさせられ

ていたアメリカ自動車産業が、世界市場を席卷することになるのである。

強大な通信情報産業を武器とするアメリカは、体力を消耗する競争を回避しながら世界に君臨するシステムを完成させた。それは日本の功績に拠るところが大きいのであるが、現在国を挙げて新しい燃料やエンジンの開発に邁進しているアメリカは、アメリカ自動車産業への穴埋めの準備を完了しつつあり、ドル安に突入した途端に日本の自動車産業は壊滅の憂き目を見ることになる。

その日通学電車の中で、令子は夕子に明け方に見た「モスラが好き」の中の陽平の夢の話をした。

夕子は、これから陽平が見る夢は、張作霖事件、南京事件、ロシア革命、アメリカ独立戦争へと遡って行くことになると言ってから「ネタばらしちゃいけないよね」と肩をすくめた。

「革命や戦争ばかりね」

令子がそう言うと、夕子は「お国の事情や、ファシズムの形成されて行く過程のようなものが中心になってるの。南京事件後のイギリスのクリスマス・メッセージとか……。私なんか『モスラが好き』を読んだせいで、中学生だというのに思想やら古典経済やらの本を読むことになったんだから……。まっ、娯楽小説だけどね」と言って笑った。

下宿へ帰って自転車に乗りパチンコ店へ向かいながら、令子は陽平と夕子が並んでパチンコをしている姿を思い浮かべていた。

パチンコ店には令子はもとより、陽平の姿さえなかった。その日は「有り金摩っちゃったかな？」などと考えていたが、翌日も陽平は来ていなかった。「風邪でもひいたのかしら？それとも……」令子の脳裏に「デートしてホテルでご馳走してもらったよ」と言ったときの夕子の笑顔がよぎった。

木曜日、金曜日と過ぎて、土曜日も日曜日も、陽平は姿を見せな

かった。令子は陽平からもらった「ポンポコリンククラブ」の名刺を取り出し、意を決して電話した。

「先方の都合により……」と応えたきり、電話は繋がらなかった。

## 第十七章 陽平の失踪

月曜日の朝、電車のドアが開くと夕子が「よっ！」と右手を挙げ愛想を振り撒きながら乗り込んで来た。令子の周囲にいた女子高生全員が、夕子に手を振って笑った。

「この頃本当に調子いいわね。選挙にでも出るつもり？」

「通学電車の中で無償のサービスするくらい別にいいじゃない。それよりあんた浮かない顔してるけど、どうかした？」

令子は陽平の消息が掴めないことを説明してから「心当たりない？」と切り出した。

「知らない……。山へでも籠っちゃったのかな。もうすぐ冬だし」夕子は、令子が真剣に陽平のことを心配しているにもかかわらず、平然と冗談を飛ばした。

「イノシシや熊じゃあるまいし、そんな訳ないでしょ。本当に知らないの？」

「知らないって！怒るよ本当に」

「怒ってるじゃない。そっか知らないか……」

令子には、夕子と陽平が変なことになっていないというだけでも、不幸中の幸いと思われた。

「まっ、小説家の都合とか気紛れとかじゃないの」

「締め切りに追われて行方をくらましてるって？」

「そのうち『モスラが好き2』なんて小説が出たりして」

夕子はそう言って笑ったが、実際のところ少し動揺しているようだった。

「そうね」

令子は相槌を打ったものの、そんなことはないだろうと思っていた。「モスラが好き」を読み終えた後で、作品の随所にどうしても陽平と結び付かない違和感を覚えたからだ。陽平が見る「過去の夢」のくだりはともかくとして、中学一年生の少女が見る「未来の夢」

のくだりは、どうしても陽平のイメージと重ならなかった。

小説とはそんなものだと言われればそれまでだが、令子の胸中では密かに「ゴーストライター」疑惑が芽生えていた。令子はそのことを夕子には話していなかった。夕子は雰囲気だけで人となりを類推する、ステレオタイプな捉え方を極端に嫌っていたからだ。そのくせ、子供っぽい麻由香のことを、まるで逆で訳ありのように言ってるのはどうだろう？

見せかけと実態の相関について夕子はただ天邪鬼なだけかも知れない。ステレオタイプを毛嫌いする余り、幸福や不幸、善と悪、いい子悪い子などの判断基準が真逆になっているのだとしたら…？

令子は自分のこともそうなのかも知れないと不安になった。

「私のこと過大評価してない？」

令子は、つり革に手を通して、気が抜けたように外の景色を追っている夕子を見上げて言った。

「えっ？何よ唐突に……。してるわよ」

令子は「そんなことない」という答えが返って来るのを期待した自分が馬鹿だったと反省した。それと同時に落ち込んでいる夕子が可哀相に思えて来た。

「ねえ、今度モスラ4のシナリオ持って来ようか。読む？」

「えっ、うつそー！そんなのあったっけ、読む読む」

眼を輝かせた夕子はいつものげんきんなやつに戻っていた。

「私のおじいちゃんが亡くなる前に書いてたもので、映画とは全く関係ないんだけど……」

令子は、大学へ入り下宿先が決まったとき、祖父が遺したもののうち、歌詞とモスラ4のシナリオだけを持って来ていた。

「いいなあ令子は、小学校のときに映画館へモスラ観に連れて行ってもらったって言ってたわよね。私にもそんなおじいちゃんがいたら、人生変わっていたかも知れない。弟だつてきつとそうよ」

令子は小学生の夕子と二人で祖父を質問攻めに行っているところを想像して、夕子にまで付き纏われることになれば、さすがの祖父も



音を上げることだろうと苦笑した。

「九条さんは？」

「うーん……。たまたま見たテレビでのインタビューが面白くなければ、『モスラが好き』も、あんたのことも知らずにいたってことよね。荒れ狂う海を渡る橋は幾つも用意されているけど、どの橋を渡り始めるかというきつかけは全くの偶然よね。たとえ眼の前に最良の橋があっても、別の飾り立てた橋を選んで、途中で海に落っこちちゃったりして。結局選ぶのは自分自身だしね。令子のおじいさんは、最後まで渡り切れる橋として、初めからそこにいてくれたんだもの」

「まあ……、家族だから」

「家族ねえ……。それが家族なら先生はいらないつつの。まっ、そうでなくても先生はいらないか。今は小学校や中学校で先生が教えてくれることなんか、インターネットが教えてくれるしね。昔の先生には模擬社会のリーダーとしての役割もあつたらしいけど、それさえ放棄しちゃってるし」

「現代の模擬社会っていうのもぞっとする響きがあるよね」

「そうそう、実際、学校において子供たちは現代社会を体現していて、先生はリーダーの座からドロップアウトしてしまった。いや、させられてしまったと言うべきかな、誰かの思惑どおり法治小学校や法治中学校が産声を上げているわ。聞こえて来ない？」

令子はずり革に通していない右手をバッグごと耳にかざしてみせた。

「まるでよその国の日常じゃない。世が世なら言論統制でつかまっちゃうよ」

だが、情報過多の上にリテラシーのかけらもない日本で、そんなことを危惧する必要のないことは、令子も理解していた。

「だけど、見えない統制にかけては我が国の右に出る国はないわね。先生にしてみても、気の毒なものよね。能力を発揮する機会を奪われて、無能呼ばわりされて、もうすぐプロパガンダの手先だもの。」

私立の小中学校の先生には、どのようにして圧力を掛けるのかしら。幾つもの私立の小中学校が潰されて行くんでしょね」

夕子は、やれやれという表情をしてみせた。

「大部分は楽になって喜ぶはずよ。だって、反抗する生徒には法律を振りかざし、リテラシーを鍛えるまでもなく、たった一つの真実というまやかしを提示していればいいのだから」

令子は小さくため息をついた。ストレスの溜まる話をする、最後はいつも馬鹿馬鹿しくなってしまう。それにしても、未来に果たすべき義務も責任もないとのたまっている夕子が、こんな話に真剣になるなんてらしくない。もしかすると、将来チャンスがあれば結婚して子供でもと考えているのかも。だがそれはあり得ないことだ。夕子は三途の川を渡る途中で子供を産むほど狂っていない。相手がターミネーターの中に登場する、未来を担うカイルであれば、話は違ってくるかも知れないが……。

電車を降りるとき、夕子は愛想を振り撒くのを忘れていたが、女子高生たちは手を振ってくれていた。

「あんたってほんとに王女様だねえ」

令子の口調はちびまる子になっていた。

昼休みの食堂で、令子と夕子は既に昼食を食べ終わり、消息が途絶えている陽平のことを話していた。その横で麻由香は、ハンバーグを口一杯にほおびりながら、令子と夕子とを交互に見ていた。

「ちよつと電話してみるね」

そう言って令子は九条陽平に電話を掛けたが、やはり「先方の都合により……」としか返事がなかった。

麻由香が最後に残ったブロッコリーを食べている。

「あんた、ブロッコリーは嫌いじゃなかったの？」

素早く夕子が突っ込んだ。

「あまり好きじゃないけど……」

「はーん、何か話があるんだ。しかも私に」

夕子に機先を制された麻由香は、ブロッコリーを突き刺したフォークを手に、しばらく固まっていたが、思い直したように口に運び、食べ終えてしまってから「あの、今日私の家に来れないかなと思つて……」と言つた。

「えっ！私っ？」

今度は夕子が固まりかけながら、令子の方を見た。

「両方……」

麻由香はそう言うつと下を向き、冬眠中の栗鼠のように動かなくなつてしまつた。

「あんた今日は取材の日でしょ？」

「今日はないんだけど、夕子は？」

「私は未来住宅のための勉強ばかりだから、まあたまには息抜きもいいかなつと……あつ、失礼」

夕子が麻由香の方を見ると、まだ冬眠中だつた。

「まーゆかつ」

夕子の呼び掛けに麻由香が顔を上げた。

「行くつちゅうの」

夕子がそう言うつと、麻由香は嬉しそうに笑つた。夕子も令子も麻由香が笑つところを見たのは初めてだつた。

「あの……どうしてつて聞かないの？」

「いいわよ。家へ行つたからつて別に拉致される訳じゃないんだし。ま、私はそれでもかまわないけど。この先、この国もあの国もどっちもどつちだし……」

夕子の言葉に、麻由香が困つたような顔をしたので察知した令子が口を挟んだ。

「そんなことを言つてはいけないわ。拉致被害者のご家族のことを考えてご覧なさいよ。ねえ麻由香」

麻由香は小さく頷き、上目使いに夕子を見た。

「そつよね、考えが足りなかつたわ。以後気を……つて何よ二人して」

夕子に睨まれた麻由香は、逃げ場を探すように眼をキョロキョロさせながら「ごめんなさい。私、人と話するのが苦手で、どうか合わせなきゃと思うと凄く疲れてしまうの。でも、令子さんなら話をしなくとも一緒にいてくれそうな気がして、あの、悪気はないの」と言っただ。

「分かってるわよ、あんたは他人の土俵で相撲を取れないし、かと言って自分の土俵に上がってくれる人などいないってタイプでしょ、麻由香のことはお見通しなんだから。だけど令子なんか今までの人生で、自分の土俵に上がってくれたのっておじいちゃんだけだしね。まっ、可哀相過ぎるから私が上がってあげてるけど。今日からはあなたの土俵にも上がるから心配しないで。それにしても令子ってくすんでる割には、変なのを引き寄せるオーラだけは持つてるみたいよね」

「可哀相だから私の土俵に上がってくれてるって？……まあいいか。くすんでる割にはって？……まあいいか。麻由香の土俵に上がるから安心しろって？あんた何様よ。麻由香も黙ってないで何か言いなさいよ」

「あのー……」

麻由香が令子のバッグにぶら下がったモスラのストラップを指差した。

「へっ？これって私のオーラ？」

令子はストラップのモスラをまじまじと見ながら言った。

「わーい！一緒だ一緒だ、令子のオーラっていつもモスラのストラップなんだ」

夕子は秘密を暴いたとばかりに、得意げにはしゃいでいた。

「そもそも夕子の言ってる土俵って何よ。同じ橋を渡っていれば途中で土俵があっても邪魔なだけじゃない」

「あのー……」

麻由香が恐る恐る口を開いた。

「例えば私たちにしても、同じ橋を渡ってることなんてあり得

ないと思うの。それに、渡ってる橋がちゃんと未来に向けて架かっているか、それとも途中で途切れているかってことも、自分では判断出来ないと思うの。だからたまには海の上の浮遊島、夕子さんの言う土俵に上陸して話をしたり遊んだりすることが大切なんだと思う……刹那的な自己満足で、未来への約束が途切れた橋を渡ってる人は、浮遊島へ上陸して色んな友達と有意義な時間を過ごしているつもりでも、実際は同じ途切れた橋の上でづるんでいるに過ぎないと思うの。例えば本人たちは地球の将来なんてことを真剣に考えているつもりでも、全ては不毛の未成熟な意見で、時代の波に吞まれていることにさえ気付けなくなってしまう。自分が途切れない橋を渡っているという確信がある人は、土俵を創って色んな人にながって貰うように行動する義務があるんじゃないかと……」

麻由香は、熱く語ってしまったことを後悔するように下を向いた。「途切れない橋を渡ってる確信なんて持つてる人は、途切れている橋を渡っている人の中にしか存在しないんじゃないの？ そんな傲慢さを持ち得ない、自省の念を持ち合わせている人だからこそ、途切れない橋を渡れるんじゃない。いつの時代も幅を利かすのは前者だから、世界のシステムは変えられないのよ」

夕子は子供を産む気などさらさらなく、地球がどうなろうと関係ないという立場から、麻由香の発言には否定的だった。

「そうねえ……『モスラが好き』に登場する中学一年生の女の子なら、確信が持てなくもないだろうけど。夕子は麻由香も読んでいると言ってたけど、読んだことある？」

令子の問いかけに麻由香は「ええ……まあ……」と齒切れの悪い返事をした。

令子が首を傾げていると、麻由香が呟くように言った。

「今、私の家に九条さんがいるの……」

「えーっ！」 x 2

## 第十八章 風力発電

麻由香の家は大学からそう遠くない所にあつたので、歩いて行くことになった。麻由香は自転車を押しながら少し先を歩いていった。

二十分くらい歩くと、通学電車の窓からいつも見ていた風力発電用の白い風車が、どんどん巨大化して来た。

「わーい風車だ。こんなに大きい構造物造つてもいいのかなあ？まあ敷地は広いけど……この家の人は一体何を考えてるんだろ？多分二酸化炭素排出しまくり企業の役員かなんかで、こんな言い訳がましいアピールをしてるんだよきっと。ほんと、お金持ちの考えることって馬鹿げているよね」

風車の真下に来たところで、夕子は思いつくままに風車批判をしていた。

「ここが私の家なの。風車はシンボルみたいな……」

「え、えーっ！」

令子と夕子は風車を見上げて、転びそうになった。

麻由香の家は周囲の建物とはデザインにおいて一線を画していた。町並みの優雅さを損なわない気遣いで建てられた上品な住宅建築物の中にあつて、麻由香の家だけは二階建てのオフィスを思わせた。塀や門はなく、建物の前面には十台分の駐車スペースがあり、今は緑色のパンダが一台置かれていただけだった。玄関は普通の家と変わりなかったが、ドアを開けて中へ入ると一階全体が会議室になっていて、折りたたみ式のテーブルが二十脚程並べられていた。

下駄箱は大きな本棚のようなで、たくさんのスリッパが並べられていたが、そのうち半分は子供用のスリッパだった。麻由香は無造作にスリッパを取り出し靴と入れ替えた。片隅には病院にあるようなスリッパを消毒する器械が置かれていた。踊り場からは二階へ行く階段と地下へ降りる階段があつた。二人は麻由香の後に付いて二階への階段を上った。二階は真ん中に廊下があり、両方に二つずつ

ある部屋には、それぞれドアがありまるでホテルのようだった。突き当りのドアを開けると、そこはダイニングキッチンになっていた。麻由香は二人にダイニングチェアに腰掛けるよう促した。

「あんたのお父さんって、二酸化炭素排出しまくり企業の重役だったんだ」と夕子が尋ねると、麻由香は「いいえ、去年兄が海外留学した隙に、家を新築したの。そのとき私の意見で風力発電にしたの」と答えた。

「私の意見ってあんた、建築費だってもしかしたら居宅本体より掛かってるんじゃないの？」

さすがの夕子も呆れたように窓越の風車を見つめるばかりだった。

「分かんない」

「分かんないって、それじゃあのエレベーターは？」と再び夕子が問い詰めた。

トイレと浴室洗面所の隣には、たかが二階建てなのにエレベーターが設置されていた。

「地下に蓄電池の部屋があるから……」

「そんなのわざわざ地下に作らなくても、それにエレベーターなんかないじゃない」と夕子が言うと麻由香は「あの、ついでにスタジオも作って、サーフボードとか楽器とかの大きな荷物を運んだりすることがあるから……」と答えた。

「それもあんたの意見？」

夕子の問いに麻由香は「それはどちらかと言えば父の意見かな……」と答えた。

「会議室も、お父上が必要だったという訳ね」

「ええ……まあ」

「まあいいじゃない、それはそうと麻由香、九条さんがいると言ってたわよね」

令子がそう言うと麻由香は「少し待っててね」と夕子から逃げ出すように部屋から出て行った。

「麻由香って一体何を考えているのかしら？というか、風車を建造

するなんてこと、子供にねだられたからって、普通家族は反対するでしょ。お金持ちの見栄ってものかしら？どう思う令子？」

「分かる訳ないじゃない、そんなこと。まさか見栄では造らないでしょ。奇特なお金持ちで、個人負担の公共事業のつもりかも。行政が造る変な箱物やインフラよりよっぽどまともかも……。確か麻由香、風車がシンボルだって言ってたわよね。それなりに何か特別な意味があるんじゃないの」

「それにエレベーター付きのスタジオって、もしかして家族はプロのミュージシャン？なんちゃって」

しばらくして戻って来た麻由香は「陽平おじさん、兄の部屋にも書斎にもいなかったわ」と言った。

「陽平おじさん？ってお兄さんの部屋にいる訳？」

夕子が尋ねると麻由香は「ええ、先週から兄の部屋に住んでるの。そこにいないってことはスタジオね」と答えた。

「ええっ！あんたそんな親しい間柄だったの？」と驚く夕子に麻由香は「ええ、父の幼なじみだから。私は中学生になってからの付き合いだけどね」と平然とした顔で答えた。

「スタジオへ行ってみる？」と麻由香が言った。

「行かいでか」「うん行く」

二人は麻由香の後に付いてエレベーターに乗り込んだ。三人乗ってもエレベーターの中は余裕があり、搭乗定員6名と書かれたシールが貼られていた。

地下室は一階の会議室と同じくらい広かった。先ず蓄電器や配電盤が置かれた部屋があったが、それはほんの一部で、残りのスペースがスタジオとなっていた。そこにはドラムセットやアップライトピアノとキーボード類が配置されていた。壁に沿って十数個のロッカーが並んでいて、その前にはオーディオが置かれ、一番奥の壁にはサーフボードが6本立てかけてあり、その手前の大きな台の上にも一枚サーフボードが置かれていた。



オーディオの前にはパイプ椅子が十客程置かれてあり、一番前の中央に陽平が陣取っていた。陽平の前には会議室にあった折りたたみ式テーブルが置かれ、その上にはノートパソコンが置いてあった。陽平は邪魔にならない程度の音量でジャズを掛けながら、ワープロで文章を作成しているようだった。

「陽平おじさん、今日はその辺にしておいたら？」

麻由香が陽平に近付きながら話しかけた。

「……」

陽平は振り向いて三人の顔を順に確認したが、何も言わなかった。

「こんにちは、こちらにおられたんですね」

令子が挨拶した。

「先日はありがとうございました。夕食までご馳走になってしまつて……」

夕子がお礼を言った。

「……」

陽平は黙ったままだった。

令子と夕子は陽平が気分を害しているのかと心配になり麻由香の方を見た。

「気にしないで、ワープロの前では陽平おじさんはいつもこの調子だから。そのままにしておくといつまでも黙ったままだから、遠慮しないで話し掛けていいわよ。」

麻由香は陽平への対応について、何もかも心得ているような話し振りだった。

「お母さんはまだ帰ってないの？」

「病院から帰ってまた何処かへ行った」

陽平は何かを思い出そうとするように時々首を左右に傾げていた。「小説書いておられるんですか？」

夕子が、興味津々なのは表情を見れば明らかだった。

「夢のことを書いてる」

陽平が答えてくれたので、夕子是有頂天になって「わーい、小説

書かれてるんですね、今度の小説にも過去の夢や未来の夢が出て来るんですか？」と質問した。

「僕は過去の夢を書く」

夕子は陽平が何を言っているのか理解しかねていた。

「私たちも座りましようよ」

麻由香が陽平の前にもう一台テーブルを追加し、パイプ椅子を陽平の隣に一脚、向かいに二脚置いて、自分は陽平の隣に腰掛けた。令子たちは、オーデイオに背を向けるように腰を下ろした。

「陽平おじさんは、過去の夢を書いているの」

「じゃあ、未来の夢は？」と夕子が尋ねると「私が小学生の頃から見続けていた夢を、中学生のときにまとめて書いたの」と麻由香は答えた。

「えーっ！」

令子と夕子は同時に声を上げたが、令子は夕子に借りた「モスラが好き」を読んだときから、陽平以外の者の介在をおぼろげに感じ取っていた。未来の夢を見るのは子供という設定だったので、意図的に幼い文体で書かれているのはあり得ることだが、子供でなければ到底思い付くことの出来ないような、閃きだけで描かれていたのだ。ただ、それがまさか中学生の麻由香であったとは思ってもよらないことだった。夕子が「モスラが好き」に出会ったのは、まだ中学生の頃なので、子供にしかあり得ない表現に違和感を覚える方が、むしろ不思議なことだろう。

「じゃあ、その他は？」

夕子が恐る恐る尋ねると麻由香は「それだけよ」と答えた。

「それだけって……意味が分からないんだけど」

ほの暗い地下室の照明が、蒼白な夕子の顔に宿った困惑を浮かび上がらせていた。

「陽平おじさんが書いているのは、小説なんかじゃなくて、カウンセリングのためのノートなの。……ちゃんと説明するわね」

麻由香は少し考え込むようにしていたが、やがてゆっくりとした口調で説明を始めた。

「私が初めて陽平おじさんに会ったのは、中学一年生の頃だった。高校を卒業してからずっと海外で暮らしていた、父の幼馴染で高校時代のサーフィン仲間が、日本へ帰って来たのがきっかけで、父はまたサーフィンを始めたの。そしてもう一人のサーフィン仲間が陽平おじさんだったという訳。初めて会ったときから陽平おじさんとはすごく気が合って、私も一緒にサーフィンするようになったの。」

その頃から陽平おじさんは自分が経験したことのない過去の夢を見るようになっていて、私は小学校二年生の頃から未来の夢に悩まされていたから、よくお互いの夢の話をしたわ。

今でもだけど、私の見る未来の夢は、眩いばかりの諦念に満ちているの。生き続けるためには夢を客観視する必要があったけど、小学生の私には困難だったので、自宅で父にカウンセリングを受けていたの。それは今でも続いているわ。

父の勧めで、陽平おじさんも病院の方でカウンセリングを受けることになって、そのとき認知症の兆候が認められたの。MRIで検査した結果、脳細胞の萎縮が確認され、初期の若年性アルツハイマーと診断されたの。陽平おじさんの見る過去の夢と、アルツハイマーの因果関係については今も謎だけど。

陽平おじさんは、毎週月曜日に、夢についてのカウンセリングとアルツハイマーの治療を受けるようになったの。カウンセリングのためには、夢の内容を把握していなければいけないけれど、若干の記憶障害があるので、見た夢を毎日ノートするようになったの。

そんな生活を続けているうちに、程なく経済的に困窮した陽平おじさんは、私の家に同居するようになったの。」

「いくら幼馴染でも同居なんて、お母様は納得されたの？」

「陽平おじさんがアルツハイマーだと聞かされた母は、自分の身内でもあるように心配して、それなら一緒に暮らせばいいのにと自分の方から提案していたの。おかしいでしょ。母は陽平おじさんの夢

に、私の夢を解き明かす秘密が隠されていると、思っていたのかも知れない。それに母は、陽平おじさんが高校卒業後すぐにご両親を亡くし、天涯孤独だということも知っていたから、多少は同情心もあったのかも。私も兄も父も、誰も反対はしなかったけれど、最初陽平おじさんは固辞していたわ。でもお金がなくなった機会に無理やり同居させたのよ。ちょうどアパートも追い出されるところだったから」

「同居してから『モスラが好き』が出来たってことね」

やや落ち着きを取り戻した夕子が言った。

「ええ、私もカウンセリングのために、夢をノートしていたから、陽平おじさんの夢と、後は祐介おじさんの海外での話やポンポコリンクラブというサーフィンの活動とか、私の父の勝手な私見とかを、陽平おじさんが一まとめにしたの。私の夢は今も進行形で新しい知識に比例するように、細部までくつきり再現できるようになって来たわ。」

『モスラが好き』では陽平おじさんの夢に比べて私の夢の表現が稚拙だし抽象的であることは否めなかったけど、出版社にはその部分が良かったという感想も寄せられたりして、有頂天になったこともあったわ。あなたたちの世代では知られてないけど、大学生や、定年後のおじさん世代の間では、一時期ブームになったのよ。小説が結構売れたので、私が高校へ入学して間もなく、陽平おじさんはマンションを購入して、また一人暮らしを始めたの」

陽平は三人の話には無関心に、じっと考え込んでいるようだった。「陽平おじさんは、朝病院にメールした夢を、もっと辻褄の合ったものにしようとしているのよ。でも無理なことなの。もう夢のメモを見たって、ほとんど思い出せないんじゃないかな」

「九条さんが麻由香の家にいるのは、小説を書くためじゃないの？」夕子の問い掛けに麻由香は「単に持ち金を使い果たしたからよ。もう、さすがに印税収入は期待できないし。陽平おじさんにとって、マンションで独りで暮らすより、この家でいる方がいいと思う」

けど、本人が戻りたいのなら、もう一度作ってもいいとは思っているの」

「少し見せていただいてもいいですか？」

夕子が陽平のパソコンを覗き込むように言った。

「……」

陽平は黙ったまま、夕子に席を譲った。

夢の内容は、確かに統一性に欠けていたが、それが病気のせいであるかどうかは、夕子には判断し兼ねた。

いきなりオスマン帝国が登場するので、さぞかし過去に遡っているのかと思えば、物語の舞台は日本であり、しかも近未来の出来事のようにもあるのだ。

オスマン帝国本体の消費活動が、数十年間にわたる異常とも思われるほどの活性化の後、一挙に衰退を辿り、単なる国民国家としての機能しか果たせなくなった。ちょうどその頃、帝国の傘下にあった日本は経済の飽和状態であった。

新しく傘下になる国を探して、帝国の復興を目指すオスマンは、最早傘下に置く理由も必要性も消滅していた日本を、トカゲの尻尾のように切り捨ててしまった。

ところが、日本は帝国の傘下にあった時期も、堂々たる国民国家であるとの幻想を抱き続けていて、本来の意味においての国民国家になってしまった現状を把握することが出来ないまま、何ら意識変革を行っていない。

そのような文章の最後は次のような一考察で締められていた。

新たに国民国家として歩み出すのであれば、揺らぎない国民性を持つて慎ましくすればいい、また飽きもせずに経済発展を目指すのであれば、パトロンを見付けて今までがそうであったように偽装して、国民を騙し仮想自治国の立場を回復すればいい。

選択肢は二つだが、前者を選ぶためには我々は愚か過ぎる。オスマン帝国とその手先により、世界で唯一の国民性喪失国家となった日

本国民が、国家というアイデンティティーを取り戻すことは不可能だ。何故なら学校教育とマスコミが、戦後以来現在においても国民性消滅のプロパガンダにより支配されているのだから。

それなら後者を選ぶしかないだろう。しかし仮想自治国になるとしても、オスマンに見限られた今、どの帝国の傘下に入れてもらえるのだろうか。今となつては、何の取り柄もない老弱小国を、それなりの尊厳を認めながら、帝国の一構成国として扱ってくれる奇特な国などないように思える。

早い話が生き残る道などないのだ。あるのはただ衰退と貧困のみ。しかし、国家としてのアイデンティティーの欠片でも残っている人間なら、裕福でれ貧困であれ、慎ましさの同義語であるので、そんなの関係ねえってことになるのだが……

インターフォンが鳴って麻由香が取った。

「夕飯の用意出来たって」

四人はエレベーターで二階上がった。ダイニングキッチンのテーブルにはご馳走が並べられていて、麻由香の母親が笑顔で迎えてくれた。

「お邪魔してます」

夕子と令子は母親に挨拶した。

「買い物行つてたのね」

麻由香が言うとお母は「麻由香が今日、お友達が二人見えるかも知れないと言つてたから。気難しい麻由香に付き合つてくださる奇特な方には、是非ともご馳走しなくちゃと頑張ったわよ」と言つて夕子と令子に笑いかけた。

陽平は既に手を洗つて食卓に着いていた。夕子と令子も洗面所で手を荒い食卓に着いた。

「お父さんは？」

「少し遅くなるんだって」

「ふうん……」

麻由香の父親は医者だが、経営者兼院長であつたので、普段は家族揃つて夕食を取るのが常であつた。

「今日は訪ねて来てくださつてありがとうございます。九条さんまで一緒にいるなんて、麻由香も何考えているのかしら、氣詰まりだつたでしょ、ごめんなさいね」

麻由香の母親は申し訳なさそうに二人を見た。

「いえ、私たち九条さんのファンなんです。急に連絡が取れなくなつて、心配していたところに、麻由香の家におられると聞いて驚きました。あの、私田所令子と言います。こっちは汐屋夕子です」

「そうなの、珍しいこともあるものね。この人一応小説家だけど、住所とかも含めてほとんどマスコミに露出していないから、読者の方にも知り合いはいないんだけど……。それにしても、しおやさんつて物凄く美人ね、ため息出ちゃうくらい」

「困つたことにそうなんです」

夕子はいつもの調子で応答した。

「いただきますあす」「いただきます」「いただきます……」

「夕子は前から九条さんのファンだつたんです。でもまさかこの町におられるなんて。夕子も驚いたと思います」

「驚いてなんかいないわよ。まあ確かに初対面の際は心の準備が出来ていなかったから、少し動揺したけど。私は小説の中の場面を繋ぎ合わせ、情報収集してこの町だと確信していたわよ」

夕子の反論には令子の方が驚かされた。

「ええっ！じゃあ夕子は九条さんに会うために大学を選んだ訳？」

「そうよ」

「まあ、九条さんにまさか追っかけのファンがいるなんて、世の中捨てたものじゃないわね。今度の小説も売れるかしら？私は無理して書かなくてもいいと思つてはいるけど、麻由香も何かと忙しいみたいだし……。余計なこと言つちやつたかしら、御免なさいね。だけど、もしかすると次回作を待つてゐる人もいるのかしら？」

麻由香の母親は、麻由香が九条陽平の小説の片棒を担いでいることを、いとも簡単に暴露して、平然としていた。

「あのつ、もちろん私は購入しますけど、九条さんの小説にゴーストがいるということは、公になっていることなんですか？」

他言してもいいものか確かめるように夕子が尋ねた。

「少なくとも麻由香が無理やり売りつけた後輩たちは知っているわよね」

母親の言葉に麻由香はむっとしたように「無理やりじゃないってば、教材よ教材。殆どの子が読書感想文に感動したって書いていたんだから」と言った。

麻由香は家庭教師のアルバイトでもしていて、教え子に「モスラが好き」を売り付けていたのだろうか？大学での麻由香しか見ていない令子には、意外な側面と思えることも、夕子にとっては何の不思議もないことだった。

その思いは、麻由香が「モスラが好き」の執筆に関係していたと聞かされて、なお更強いものになった。大学でのうじうじした様子に苛立ちを覚えていたのは、麻由香が内に秘めている何ものかによって、夕子の内面が見透かされているように感じられたからだった。

夕子の超越的な美しさに怯えるでもなく、媚びるでもなく、平気でうじうじしている麻由香という存在を夕子は警戒し、反動形成として先制攻撃を加えていたとも取れる。

別の言い方をすれば、麻由香は夕子が畏怖の念を抱く数少ない人間の一人なのだ。しかし、夕子に出会った多くの人間が、否応なしに畏怖の念を抱かされることがあったとしても、麻由香にそんな感情を抱く者など、他にはいないはずなのに、夕子が麻由香に一目を置いているというのも変な話だ。

おそらく普通の人間は、自分が何者かに操られたり見透かされていることに、とんでもなく鈍感なのだろう。夕子の突出した感受性あればこそ、初めて麻由香の存在が畏怖すべきものとして捉えられ



るのだ。

食卓にはご馳走が用意されているにもかかわらず、麻由香が冷蔵庫から納豆のパックを取り出して、箸でくるくるかき混ぜたと思うと、麻由香の分の野菜サラダの上に乗せて、バジルやパプリカやベーコンまで入っているバルサミコ仕立てのドレッシングを振り掛けて、美味しそうにぱくぱく食べていた。

「あの、お二人は九条さんとよく話をするところがあるの？」

麻由香の母親が少し興味を持ったように尋ねた。

「はい、私はパチンコ屋さんでアルバイトをしていて知り合ったんですけど、九条さんの負けっぷりの凄さに感動したというか……あの、私は色んな会社の経営者の取材をしているんですけど、九条さんの場合は消費者側の心理を取材させていただこうかと……」

「まあ、それは眼の付け所が良いと言うか、それで何か役に立つデータは収集出来たのかしら？」

「いいえ……」

麻由香の母親の質問に令子はそう答えるしかなかった。

「パチンコをしている九条さんは、お客様というより、聖職者のようでした」

「それを言うなら反面教師じゃないかしら？」

麻由香の母親は厳しい意見を言うときも、穏やかに微笑んでいるので、決して悪意を持つてはいないということだけは明らかだった。

## 第十九章 サステイナブルアース

夕食後、麻由香たち三人は、まだ食事を終えていない陽平を残し、再度地下のスタジオへ降りるエレベーターに乗り込んだ。

「父があなたたちに会いたいみたいなので、帰って来たらちよつとだけ会ってくれる？」

麻由香が、パソコンの置かれているテーブルの横にもう一台テーブルを追加しながら言った。

「いいけど、夕子は権威に靡かないから、気を悪くさせるかも」

令子が心配そうに言った。

「バーカ、私がそんなつまらないことにこだわる訳ないじゃない」

「冗談よ、まっ、失礼のないようアテンションプリーズということ  
で」

麻由香は、二人がいつものようにつまらない言い争いをしているのを無視して、オーディオのプリアンプをいじっていた。

「多分友達と一緒にだけど、何のこともない人だから気を遣わないで  
ね」

「何のことないと言っても、相手は年配なんだし、多少の慇懃さを持って接してあげる必要はあるでしょ」

令子は、風力発電と言われて風車を造ってしまう麻由香の父親の友人が、何のことないはずがないと思っていた。何といっても友人の一人が、陽平なんだから。

「サーフボードって色んな長さのがあるのね。この台の上に置いてあるのは子供用？って麻由香のよね。」

夕子はすでにスタジオ内の探索を開始していた。

「それは父の友達のボードよ、修理するために持ち込んでるの。壁に立ててある左端のショートと隣のセミロングが私ので、あとの父と陽平おじさんのロングとセミロングがそれぞれ一本ずつよ」

「お父様の友達って、子供なの？」

夕子が台の上のショートボードを指差して言った。

「まさか。海へ行ったら知らない子供でも友達のようなものだけだ。祐介おじさんは何種類もサーフボード持ってるから、これより短いものもあるはずよ」

「ふうん、何種類もあるんだ。」

そう言いながら夕子は首を傾げた。

「波の大きさや、サーフィンのスタイルによって何種類もね。祐介おじさんは小舟ほどもあるボードも持ってるわ。でも日本では使えないんだけどね。」

「ハワイとかで使ってたんだ、ビッグウェンズデー！なんちゃって」  
「カリフォルニアじゃん。まあ、そんなとこね。それに、嘘か本当かは知らないけれど、三〇フィートもある波でトゥインサーフィンしてたんだって……。トゥインサーフィンっていうのは、ジェットスキーで引つ張ってもらうらしいんだけどね。」

「どんだけー！って、三〇フィートってどんだけ？」

訳も分らず驚いている夕子に、令子が「九メートルちょいよ。」と説明した。

「ひえーっ！こっわー！さっすが経営学部、計算高いねえ」

「どこがよ、あんたこそ建築学部でしょ」

「ロッカーには何が入ってるの？」

雲行きが怪しくなったとみるや、夕子の視線は既に別の所へと向けられていた。

「楽器よ、個人の持ち物だけど、どのロッカーにも鍵は掛けてないから、開けていいわよ。左端には陽平おじさんのベース、二番目には父が揃えた物が入ってるから、使ってもいいわよ」

夕子が左端のロッカーを開けると、エレキベースが入っていた。

「わっ、かっちょいいい！パンクジャズ？」

「夕子詳しいのね」

「ロックにフレットレスじゃフニャフニャじゃん」

「まあね、スタンダードなジャズもそれを使ってるけど」

「アコースティックベースは使わないんだ」

夕子は独り言のようにつぶやきながら、二番目のロッカーを開けた。そこには色んな形の黒いケースが入れていた。

「トランペットとクラリネットとそれにアルトサックスが二本…か」

「バスクラリネットだけだね」

「エリック・ドルフィーもやるんだ。麻由香は何をやってるの？」

「私はベースとキーボードとアルトサックスをたまに使うけど」

「へえっ、多才なのねえ」

夕子は感心したように言った。

「小学生の頃から家族の音楽会に付き合わされていたから。去年造ったこの部屋だって、元々は家族で音楽するために作った部屋だもの」

「へえっ、どんな編成で？」

「母がピアノ、父がサックス、兄がドラムス私がベース…かな」

「レパートリーは？」

「クレオパトラの夢……みたいな、まあ父の好きなもの中心にってことで」

「他のロッカーには何が入ってるの？」

戻って来て令子の横に腰掛けた夕子が麻由香に尋ねた。

「三番目のロッカーに私のベース、その他のロッカーには私の後輩の楽器とかを収納してあるの。ロックバンドやってる人とかのスタジオのようなものね。デモテープも作ってるのよ」

「ここに置きっ放しじゃ不便なのにな」

「高校近いし、ロックバンドなんて親に内緒の子も多いしね。それに騒音なんて気にしなくていいから」

「練習のために開放してる訳？」

「いつもいつもという訳じゃないのよ、そこにスケジュールボードがあるでしょ」

壁の隅には、日付と曜日の下にバンド名が書かれたボードが掛けられていた。どの週も、火曜日から金曜日のスケジュールは概ね埋

められていた。

「利用しているバンドは全部で何組あるの？」

「今は四組よ。まあ、それがキャパの限界だと思うけど」

「しょっちゅう訪問者があって、お母様、大変じゃないの？」

「高校が終わってから、遅くとも八時頃までの時間だし、私がいなくても母がいるから大丈夫、ピンポンと鳴らして、そのまま地下室へ直行だから。父とその一味がここを使つとしても、もう少し遅い時間だし」

「高校生が来たとき、九条さんは？」

「どちらにも別に気にしていないようだけど、陽平おじさんへビメタも好きだし。でも余程やかましなければ、ノートパソコンを持って自分の部屋へ退散ね」

「後輩と親交があるって、お母様が言っただけだけど、何繋がりな訳？」

「サークル活動」

「どんな？」

「サステイナブルアース」

「なにそれ？面白そうだけど、説明が長くなりそうだからもういいや。このスタジオ私も使っている？」

「ご自由に。あなたどんな楽器を使うの？なんならバンド組む？」

麻由香に誘われた夕子は、少し考えた後で「うーん……私ヴォーカル。令子がキーボードとドラムスとギター」と応えた。

夕子の言葉にオーディオから流れているジャズに耳を澄まさせていた令子が口を開いた。

「何言ってるの、そんなに一人で出来る訳ないじゃない。そんな暇もないし。夕子も卒論に取り組むって言うてたでしょ」

「あれっ？そんなこと言っただけ」

「またまた、あんたって人は……」

「令子さんは色んな楽器を演奏出来るのね」

麻由香が二人の会話に分け入るように言った。

「夕子の口から出任せよ。ピアノ少々、クラリネットは高校の部活で少々…」

「でも出来るんじゃない。夕子さんは本当に楽器は演奏しないの？」

麻由香は夕子ではなく、令子に尋ねた。

「バンドは無理ね、ダンサーだもの」

「かつこいい！夕子さんらしいわ」

麻由香の珍しく取って付けたような賛辞に、夕子は「麻由香は、いつの間に社交辞令が言えるようになったのかな」と、少し不機嫌な顔で言った。

「未だに無理よ、変ね。よく考えてみると誰かにかつこいいなんて言ったの、多分生まれて初めてよ」

「よく分かんないけど、麻由香に褒められると、何だか嫌味に聞こえるのよ」

かつこいいなんて、言われ慣れている夕子にしては、珍しい反応だった。

「まあーゆうーかあー」

夕子が不意に呼び掛けた。

「なに？」

「あんたって、お世辞じゃなくて可愛いよね」

「な、な、なによ急に、変なこと言わないでよ」

麻由香は困ったようにうろたえて言った。

「あんたたち、褒め殺しコンビか。夕子はかつこいいし、麻由香は可愛い。そんなの今まで散々言われ続けてたことじゃないの？お互い、自分を超えたものを意識し合っているから、自分の方が褒められると違和感があるのよ」

令子が二人の心理状態を解説した。

「そっか、道理で、あんたに言われたときは、素直にうなずけるわ」

夕子が言っと、麻由香も「うん、そうだね」と同意した。

「どうせ私は、あんたたちと違って平凡な容姿ですって」

令子はそう言っと「ふっ」とため息をついた。

「そうねえ、でもあんたの賢いところは尊敬しているよ」

夕子が言くと麻由香が「うん、私も」と後に続いた。

「そう、ありがとう」

令子はさらりと受け流した。

「あつ、動揺してない。あんたやっぱ私より賢いと思っているんだ」と夕子が言った。

「当たり前じゃない、あんたらと付き合っていたら、せめてそれくらい自信持てなきゃ、やってられないわよ」

「結構せこい考え方してるんだ」

「そんな人を傷つけるようなこと他所で言っちゃ駄目よ。あんたの批判めいた発言は負け犬の遠吠えには聞こえないから、言われた人はショックだと思うよ」

令子が夕子を諭すように言った。

「言う訳ないじゃない、それを老婆心つて言うのよ。令子とか麻由香のような価値観を持っている人間になら何でも言うけど。そんな人間に出会ったことが奇跡ね」

夕子に他の友達はいなかったが、令子と麻由香以外には家族に対しても大人に対しても、批判めいた意見をすることはなかった。夕子が言えば致命的な打撃を与えることを心得ていたからだ。

「さつきから聴いてるけど、これって誰の曲？」

令子が麻由香に尋ねた。

「ジョナス・エルボーグ、ベースストよ。知らないの？」

夕子が即答した。

「えっ、そんなに有名なその人って？」

ジャズなら令子の方がよく聴いているはずなのに、夕子の知っているミュージシャンを令子が知らないのは意外なことだった。

「そんなこと知らないけど『モスラが好き』に書いてあったから、私も聴くようになっただけよ」

令子は、先週夕子に借りて読んだ「モスラが好き」にそんな名前が出ていて、気になっていたのを思い出した。

「ふうん、麻由香はこんな音楽を聴いているんだ。コテコテのゲージョツ指向ではなく、スーパーフラットでもない、えーっと！という感じ」

「あなたたち、普段どんな音楽を聴いているの？」

「ちよーどいい機会を得たとばかりに麻由香が尋ねた。

彼女たちはみんな流行に疎遠であつたし、自分の趣味や音楽について人に語ることは、どちらかと言えば避けていた。

「私は中学二年の頃からジョナス・エルボーグを聴いていたわ。好きで聴いていた訳じゃないけど」

夕子が言うと令子が「ジョナス・エルボーグは好きで聴いているんじゃないの？」

と尋ねた。

「もちろん、今は好きよ。パンク・ジャズって言うのかな？こんな感じの音楽、中学生が好きな訳ないじゃない。令子はどんな音楽を聴いているの？」

「私は、おじいちゃんと一緒に小学生の頃からジャズを聴いてたわ。ジョナス・エルボーグはパンク・ジャズと言うより、大御所ドラマー、シャノン・ジャクソンのと同じカテゴリーのレイヴン・ロックよ。どちらがどう影響しているのか知らないけど、ベース中心の都会派とパルス中心の大地派って感じね。」

「あんだ、ピアノ弾いてたのにクラシックは聴かないの？」と夕子が言った。

「小山実稚恵のノクターンやラ・カンパネツラとかよく聴いたよ。クラシックは色んな人が演奏してるから、技術的なところがよく分からなければ、どうしても雰囲気が好きか嫌いかってなっちゃうのよね。ジャズはスタンダードを別とすれば、好き嫌い云々よりも、これしかないっていうのがあるじゃない、ピアノで言えばブラッド・メルドーとかさ。麻由香はどんな音楽なの？」

「私の番？不思議だけどみんな同じ方向の音楽を聴いているんだ。クラシックでも聴き方だと思っけど、川のせせらぎを聴くようじゃ



なく、次から次へと押し寄せる波の音を聴くみたいな、メロディーと言うよりパルスの塊が流星群のように押し寄せる映像を見るように聴くから、モーツァルトとかはピアノソナタ以外はかつたるいでしょ。交響曲も指揮者によっては旋律重視のも多いけど。ポップスは聴かないの？」

麻由香が質問した。

「演奏に主眼を置いて聴くことは、ほとんどないわ。ポップスは、歌詞が良ければ、音楽として成り立っていると言えるんじゃないかな。愛少女ポリアンナ物語の主題歌『微笑むあなたに会いたい』とかは、メッセージとしていいなあって思うけど。ラヴソングで好きな人のためにどうのこうのなんて歌とか歌詞だけで愛と平和とかって言うのも駄目。世の中に溢れている偽善を認めないと言いつつ、自分だって同じ仲間ですって暴露しているようなものね。要するに、何のための音楽かってことだけだ」

令子の答えに夕子が付け加えるように「綺麗ごと並べて世の中と馴れ合いながら、結局自分のことしか見ていないってやつね。理解出来るものしか知ろうとしなければ、感性なんて磨耗するばかりよね。お年寄りの特徴として、笑ったり涙を流す壺が少ないというのがあるけど、それさえも若年化の傾向にあると思わない？しかもみんな同じ壺だったりして」と言った。

「同じことで笑い、同じことで泣き、同じことで怒る。ファシズムの土壌としては理想的だね。クオリアが発動するのは第一ステージのみね」

令子が独り言のようにつぶやいた。

「ステージってなんなの？」と麻由香が質問した。

「令子のおじいさんが言ってたことで、シンパシーが第一ステージ、深遠が第二ステージ、センスが第三ステージ、ゆらぎが第四ステージ、そして有頂天が第五ステージなんだって。自分でも体感したから覚えちゃった。それ以上のステージは知らないけど」

夕子が令子に代わって説明すると、麻由香は「具体的にはどんな

音楽がどのステージに当てはまるの？」と質問した。

「解らない人には説明しても無駄だし、麻由香には説明しなくともすでに解っていると思うわ。読書にも同じステージがあるの」

令子は、麻由香には詳細を説明する必要はないと思っていた。

「じゃあ自然科学とかにおけるクオリアのステージは？」

「理論を証明しようとしている数学者とかは、次元を超えて思考する時点で第六ステージ以上でクオリアを発動しているかも知れないわ。でも、証明された理論は真理として踏襲されて行くから、ただの知識でしかなくなってしまうの。例えば文学では真理なんてないから、積み上げられた知識として踏襲出来ない。どんなに素晴らしい文学であっても、個人のクオリアのステージの段階によっては、全く意味がなく、つまらないものになってしまうの」

令子の説明を聞いた麻由香は「孔子だったかしら、法によって治めればせいこい人間になり、徳によればちゃんとした人間になるっての。あれがクオリアのステージを考慮していない孔子の限界と同時にあらゆる道徳の限界よね」

麻由香がそう言うのと、夕子が「法は一般的理性を成文化したものだし、徳は個人的理性の表象だから、徳によるということは眼には眼をも、右の頬をぶたれれば左の頬をであつても、その人の理性次第ということになるわね」と、補足するように続けた。

「クオリアを第一ステージでしか発動しない人は、おそらくはリテラシーにおいても認知的儉約を必要以上に多用していると思われるわね」

令子がそう言うのと麻由香が「リテラシーにもステージがあるということね。第一ステージでしか物事を見ない人は、至る所でファシズムを形成する」と念を押すように付け加えた。

「麻由香さつき高校のとき、サステイナブルアースっていうサークル活動していたと言ってたわね」と、思い出したように夕子が言った。

「ええ……」

「それって麻由香の徳の表出？」

「私はルールには従うけれど、いい人でいようなんて理性はないもの。私がいつも夢に見ていた世界が運命なら、何をしようと変えられないと思うの。ただ、事実是这样ですよと淡々と告げるだけ。振り返ってみると、今までの活動中にもクオリアの障壁があったように思えるわ」

「そんなサークル、都合良くあったものね」

「私が作ったの」

「やつぱり……。ね、令子、麻由香ってしたたかでしょ」

令子が返事に困っていると、麻由香が「夕子も令子も同類だと思うけど」と言った。

「滅多にいないと思うけど。こんなのばかり一緒にいるって、偶然よね。何か意味があるのかしら」と令子が言った。

「いつかモスラを呼ぶために決まってるじゃない。今の子供にモスラを呼ぶ意志が欠落しているから、喚起するためよ。麻由香がサステイナブルアースなんてサークルを作ったのだから、その一環じゃない」と夕子が言った。

「でも、私なんか何も出来ないよ」

令子は自信なさそうに言った。

「あんたは既におじいちゃんの代から、貧乏の勧めを実践してるじゃない。家族以外への影響力はないけど。『モスラが好き2』に参加しちゃえばいいじゃない。私もそうするけど。ねっ、麻由香」

「別にいいけど……ロハだよ。元々がハーフィクションなので、ノンフィクションのバリエーションが増えるのは、ありがたいわ。陽平おじさんも喜ぶわきつと」

## 第二十章 再会

エレベーターの方から人の声が聞こえて来た。

「父が降りて来たみたい」

麻由香が少し迷惑そうな顔で言った。

「今晚は、麻由香の父です」「コンバンハ、ユウジンデス」「……」

麻由香の父は缶ビールを、友人はウーロン茶やコーラのペットボトルを、トレイに載せて運んで来た。

「今晚は。おじゃましています」「今晚は。先日はありがとうございました」

夕子は、一瞬驚いた顔をしてから、簡単に御礼を言っ頭を下げた。

「もう、行儀悪いわね。酔っ払いの上に年寄り臭さ全開じゃ嫌がられるよ。っってお父さん、夕子さん知ってるの？」

「ああ、あのときの可愛いお嬢さんだね、覚えているよ。」

「えっ、あんた知り合いだったの？」

令子も驚いて夕子の顔を見た。

「パチンコで摩っちゃって、九条さんに家まで送って貰った日、ヨットハーバーの付近で魚釣りされてたのよ。友人さんが九条さんとお話している間、お父様に魚釣り教えて頂いたの」

「夕子が初めて九条さんと会った日ね。その日のうちに麻由香のお父様にも会っていたんだ。友人さんは若しかして『モスラが好き』に登場されていたサーファー？」

「ソウ、ワタシガサーファーノユースケ」

「私が今田総合病院の院長です。君たち『モスラが好き』を読んだことあるんだ？」

「はい、発売後すぐに」

「私は、つい最近。お父様は梶木真久郎でしたっけ？」

「そうなんだよ。今田真久郎が本名なのに、梶木なんて名字にする

なよな」

「オレナンカ、ニホンゴのロレッツガマワラナイトコトデ、セリフガミンナカタカナナンダゼ、ドウオモウユウコ？」

少し酔っている祐介がたどたどしいながらも馴れ馴れしく言った。  
「それについては、ノーコメントとさせていただきます」

夕子は冷たく切り返した。

「私なんか、昔からマセラティが好きで乗ってるというだけで、女たらしの産婦人科医って設定にされたんだぞ」

「だったらマセラティなんて乗らなけりゃいいじゃない、なるべく事実に沿って書かなきゃハーフィクションにならないし」

「だったら、幼稚園のとき彼女が舟虫まみれになったというのは、事実ですか？」

夕子が質問した。

「ああ、それは事実だよ。私の出番が少ないので、無理やり入れたんだ」

「お父様の出て来るところって、適当なのが多かったですよね」

「私や祐介はまあ彩りってことで。なっ」

「オッ、オー」

「そんなことないですよ、私の弟なんか祐介さんのファンで、こんな人がいるなら一緒にサーフィンしてみたいって言っていましたから」

夕子が言うと祐介は「ウレシイネ、イツデモイイヨ」と御機嫌な様子だった。

「夕子さんの弟さんはサーフィン好きなのかい？」

真久郎が尋ねた。

「とんでもない。引き籠りで、ほとんど外へ出たこともありません。今、全寮制のフリー・スクールに入ってます」

「そうですか。あの、こんな場所ですが、もし差し支えなければ、そのことについて少しお話を聞かせて貰えますか？興味本位ではなく、私の専門分野ですのよ」

真久郎が言うと麻由香が「プライバシーに立ち入っちゃ駄目よ」

と釘を刺した。

「いえ、聞いていただければありがたいです」

「じゃあ少しだけ。弟さんは何歳ですか？」

「私より一つ下、学年で言えば高校三年生です」

「引き籠りが始まったのは、いつ頃ですか？」

「中学一年生の頃からです」

「何か思い当たる原因は？」

「私が同じ中学の二年生のとき、苛められていたことだと思います」

「そうですか……。お姉さんとしては責任を感じている訳だ」

「ええ……」

「弟さんとは、よく話をしましたか？」

「はい、昔から私は内気で友達と遊ぶよりも、龍之介と遊んでる方が楽しかったし、龍之介が中学校へ行けなくなっただけから、フリー・スクールに入るまではよく話をしました。」

「龍之介君は、何かに対して批判めいたことを話していましたか？」

「いえ、弟が何かを悪く言うのを聞いたことがないです」

「趣味のようなものは？」

「ベースを弾く以外、取り立ててありません」

「好きな本とか、音楽は？」

「『モスラが好き』は気に入ってました。あとは、ベースの教則本。音楽は、ジョナス・エルボーグなんかを、浜崎あゆみの『イマチュアー』なんかも好きでした。それと安室奈美恵、リッキー・リー・ジョーンズ、ビョークなんかを」

「それって、ほとんど夕子と同じね。それに、安室奈美恵以下は夕子がよくダンスに使ってるって言うた曲じゃない。あ、ごめんなさい」

令子は口を挟んでしまったことを詫びた。

「しょうがないじゃない。だって私の部屋にしかオーディオなかったんだもの、私が踊って、龍之介は隅っこで聴いてるみたいなの……」  
「そうですか……。当然カウンセリングは受けられたと思いますが、

その結果について何か聞いてられますか？」

「社会不適合性症候群だそうです」

「普通はそうでしょうね。夕子さんは龍之介君のドクターにお会いしましたか？」

「いいえ、会っていませんが。なにか？」

「サーフィン行きましたようか。私たちはいつでも大丈夫ですから、龍之介君の連絡先教えてください」

「えっ、そんな、連絡なら私に取りますから。それにサーフボードも用意しなければいけないし」

夕子は、真久郎の突然の申し出にとまどっていた。

「龍之介君の身長はどれくらいありますか？」

「170cmくらいです。」

「それなら陽平のウエットスーツとボードを使えばいいじゃないか、なあ陽平」

「……」

「いつまで寝てるのよ」

麻由香に小突かれて、陽平は目を開けた。

「五十肩でも、サーフィンのコーチなら出来るよな？」

「……ああ、龍之介君の？」

「そんな、ご迷惑じゃないんですか？」

夕子に続いて麻由香が「私たちは、どうしたらいいのよ？夕子も令子も何も持ってないし。見学ってこと？」と言った。

「男だけで行くんだよ。龍之介君は私たちの友人ってことさ。それに早くしないと、十二月になれば、サーフィンに行くのは祐介一人になっちゃうからね」

「真久郎さんは、冬はサーフィンされないんですか？」と夕子が尋ねた。

「五月から十一月までだね。冬でもよほど波のいい日には、麻由香は行ってるが、海に入っているときはいいとして、サーフィンが終わった後の冷水シャワーといえば、ほんとに死ぬ思いだしね」

「麻由香は行けばいいじゃない」

夕子が麻由香

「男子が初心者なのに、私なんかいると気まずいと思うわ。それに、終わってからを着替えも外ですることになるし」

「お前もそんなこと気にするようになったのか」

真久郎が、意外だというような顔で言った。

「私はいけど、思春期の男子ってそんなところあるんじゃない？ 何処かにいい波があって、どうしても行きたくなったら、お母さんに車借りてバンドのメンバーで行くからいいわよ」

「麻由香バンドもやってるの？ 車も運転するの？」と夕子が聞き返した。

「ええ、ピーチ・ガールズというサーフィンバンドで、私もメンバーなの。サステイナブルアースの後輩に、サーフィンしたいって子がいて、ポンポコリンクラブのメンバー、と言っても父と祐介おじさんと陽平おじさんだけど、に連れて行って貰ってたの。たまたまギターとキーボードをやってたから、バンド組んじやう？ みたいな乗りで。ドラムスの子は掛け持ちでサーフィンはやらないけど。私はベースやりながら歌作り。作詞作曲は他のメンバーもやってるけれどね。ピーチ・ガールズは夏はサーフィン、冬はバンド中心みたいな活動で、冬でも波があれば、祐介おじさんとピーチ・ガールズの四人でサーフィン行くことあるけど」

「麻由香って、ほんと多忙な人ね」と、令子が感心して言った。

「おまけに、大学に入ってから子供同盟なんての作ったもんなあ」と真久郎が言った。

「子供同盟って、どんな活動しているの？」と、令子が麻由香に尋ねた。

「月三回のカウンセリング及び、コンサルテーション……無資格だね。重大な問題があれば、父にも相談するの」と、麻由香が答えた。「カウンセリングしながらコンサルテーション？ 訳分かんない」と夕子が言った。



「ええそうよ、第二、三、四金曜日の午後三時から六時の間に近隣の小学四年生から中学生三年生までの子供たちが、ここに集まって話をするの。第一金曜日には、上の会議室で総会」

「麻由香って、苦労性なんだね」

夕子が半ばあきれたような顔をして言った。

「サステイナブルアースってサークルまだあるの？」と、令子が尋ねた。

「ええ、高校では会員の数も増えているわ。私も時々顔を出すけど」

「麻由香はもう啓蒙活動しないの？」と、令子が言った。

「啓蒙活動なんて、元々サークルの趣旨じゃないもの」

「じゃあ、サステイナブルアースの理念ってなんなの？」

「省事省物」

「それって、座右の銘じゃないの？」

令子が言つと夕子が「あんたの家族が、自分たちだけで貧乏の勧めなんかを实践しているのが、まさしくそうね」と言った。

「私とこは、おじいちゃんが少し変わり者だったから……」

「かつこいい！だから、いつも清楚な服装なんだ……。私は夢のせいで、環境負荷にある種の強迫観念を持っていたから、サステイナブルアースを作ったんだけど、作ってみて気付いたことは、世界は変えられないし、変える必要もないってことよ。サステイナブルについて、ある程度勉強した後では、百年先の友達のことを考えるかどうかで、その人の目指すところって決まってくるじゃない。サステイナブルの原点は友情にあると結論が出てからは、サークルの目的はサステイナブルを広めるなんてことじゃなく、ただ勉強して、自己責任において実践しようとする者だけが引き継いで行く、というシステムになっているの。」

百年先の世代への友情と、同世代の友情で違ふところは、見返りを期待出来るか出来ないかじゃない。だからサークルでは、先ず友情のあり方について考察するようになって、派生的に子供同盟が出来ちゃったのよ。だから子供同盟の開催日には、私が通っていた高

校の三年生で、サステイナブルアースのリーダーも来るのよ。リーダーは二人なんだけど、どちらかと言えば子供同盟での活動の方が主になってるかも。

サステイナブルなんて、知識の分野だから、正しい情報に基いて勉強すれば身に付くけれど、百年先への友情がなければ、自分一人の環境負荷さえ、マイナスには出来ないと思うの」

「子供同盟で、百年先の友情を身に付けることが出来るの？」

令子には、その方法論について、全く見当が付かなかった。

「こうしては、駄目です。こうしなさいみたいな紋切り型じゃ駄目ね、考えるようにしなきゃ。でも、考えるとと言っても、直接アプローチするんじゃないくて、私たちは、考えるために何が重要かを考えているの」

「要するに、一言では表現出来ないってことね」

夕子がそう言うのと麻由香は「私たちもそうだったけど、現代の子供は同世代交流ばかりじゃない。ボランティア活動とかでよくある三世代交流とかは、子供の側からすれば与えられるばかりだし。近世代交流でなければ意味がないと思うの。でも、そういうのってクラブ活動くらいしかないでしょ。まあ子供同盟もそう言われればそうだけど…」と、歯切れの悪い言い方をした。

「今度、子供同盟を見学させて貰っていいかしら？」

令子がそう言うと、夕子が「結局はそういうことね」と頷いた。

麻由香は、我が意を得たりとばかりに「うん」と返事をして、少し恥ずかしそうに笑った。

「さっきの令子さんの家族の話なんだけど、今の時代に貧乏の勧めってすごいよね。私の父なんて、マセラティ乗り回しているもの。まあ、十数年乗っていることだし、壊れたら、軽自動車にでもさせるけど」

「『貧乏の勧め』は、確かに亡くなった祖父が提唱したんだけど、それも若くして自殺した友人の影響が大きいかも」

「へーっ！めっちゃ進歩的な人だったのね？」

「一九七〇年代初頭にテレビコマーシャルの映像で一世風靡した人よ。祖父は広告代理店に勤めていたから、よく一緒に仕事してたの」「知ってるわよ、その人『消費の勧め』を具現化するのに一役も二役も買った人じゃない。謎めいたメッセージを残して自殺したのよね。そんな資本主義の旗手のような人が、どうして対極の『貧乏の勧め』に繋がる訳?」

麻由香は彼のことを知っていて、どちらかと言えば批判的な考えを持っていうようだった。

「本当のメッセージは別にあっただけど、公表されなかったの……。過去において、誰しも悪意で資本主義経済に邁進して来た訳じゃないじゃん。豊かな世界が実現出来るという理想を持った純粋な人もいたはずよ。そんな人ほど、限界や危機に気付くのも早いから贖罪の意識が生まれた。でも、三十年以上経って、棺おけに両脚突っ込んでいても、世論なんて興味本位じゃない。彼のセンスやパワーをもっとしても、時代の流れには抗えなかったということね。それに、彼には分かっていたのよ、何を伝えようとしたって、伝わらない人には伝わらないって。何も彼が伝道師にならなくとも、例えばノストラダムスのように始めから全てを見通している人間もいるのだから、誰かがきつと継承するだろうこともね」

「伝わったところで、義務でもないし。この人なんか百年先のことなんか、まるで気にしてないようだし」

麻由香は父親を指差すと、履き捨てるように言った。

「修理して、一生乗り続けてやる」

今更ながら、真久郎がきつぱりと決意表明した。

「修理のために、お小遣い何年分前借りしているんだっけ?」

「……。それはそうと、麻由香もだけど、君たちはすごいなあ」

「さすが、精神科医。話を摩り替えるのがお上手ですね。あの、『モスラが好き』の中で、お父様のご職業は産婦人科医でしたよね。祐介さんはプロサーファー、まあそこまでは理解出来るんですが、九条さんの職業が競馬でしたよね。具体的なレース名とかも挙げて、

さも本当のことであるかのように書かれていた部分は、フィクションですか？」

夕子が少し皮肉を言った後で、質問した。

## 第二十一章 エピソード

「まぎれもないノンフィクションだよ、一九七〇年から一九九五年頃まではね」

真久郎が話してくれた陽平のエピソードは「モスラが好き」に書いてあるとおりだった。

高校を卒業した陽平は、両親の不慮の事故死によって、真久郎と同じ大学の医学部への進学をあきらめた。といっても、陽平は大学へ進学して医者になりたいという目標を持っていた訳ではなく、真面目に勉強していたら、結果としてレールが敷かれていたというだけのことだ。大学へ行く気であれば家を処分して、その金で七年や八年の学費には事欠かないはずであった。

しかし、陽平は家を処分することもなく、アルバイトしながら、生真面目に競馬法第28条を遵守しつつ、競馬のサイアーラインと産駒データ解析に専念した。そして二十歳になるとすぐに、二年の間にアルバイトで蓄えた資金を元手に、華々しい馬券デヴューを飾った。

一九七〇年代の日本の種牡馬界には、エクリプス系でスピードのあるテスコボーイ、スピードよりも重馬場やダートに強いチャイナロック、長距離が向く、追い込み型のセントクレスピ、ヘロド系で全ての馬場を平均にこなすパーソロン、マツチエム系でテスコボーイと似通った、より先行逃げ切り型のヴェンチャなどの、世界の三大サイアーラインがひしめき合っていた。

しかし、当時世界の主流はエクリプス系であり、日本のように三つのサイアーラインが繁栄しているのは、珍しい現象であった。理由はいたって単純である。日本ではネアルコからナスルーラを経てプリンスリーギフトからテスコボーイへ至るラインが主であり、このラインは良馬場、平坦でのスピードはあるが、距離の延長や、重馬場には向かず、同じエクリプス系のチャイナロックやセントクレ

スピンにしても、一長一短であり、その頃ヨーロッパ、アメリカでは淘汰されていたヘロド系、マツチエム系であっても、十分対抗出来たのだ。

ところが、一九八〇年代に入ると、同じエクリプス系でも、ネアルコからニークティックを経てノーザンダンサーからノーザンテーストへと至るラインが種牡馬として導入されたことにより、遅ればせながらヘロド系とマツチエム系の淘汰が始まり、この段階でマツチエム系は殆ど滅亡したと言っても過言ではない。ヘロド系においては、パーソロンが世に送り出した最後の大物シンボリルドルフからトウカイテイオーに至るラインが燦然と輝いていた時代でもあった。

一九七〇年代は馬券の買い方も至って単純なもので、例えば天皇賞（当時は春も秋も距離は三二〇〇m）で、雨が降って馬場状態が悪く、しかも、テスコボーイの産駒などが人気している場合などは、それ以外の産駒の中から、その馬のオッズと、そのレースにおける自分なりのレーティングを検証し、一頭を単勝で購入するのだ。何故単勝かという点、単勝、複勝の払い戻しは八〇%に対しそれ以外は七五%だからである。

一九八〇年代になつての馬券の買い方にあまり変化はなかった。ノーザンテストの産駒中心に、ブルードメアサイアー（母の父）を考慮して適性を判断するだけのことだった。

当時、陽平がどれ程の利益を上げていたかというと、一年に百レース、一レースにつき二〇万円程度の馬券を購入し、五回に一回的中で平均配当が六百円程度、要するに年間四〇〇万円程度の儲けだった。

陽平の競馬生活に翳りが差したのは一九九五年頃からであった。これについても、理由は単純明快で、アメリカでも主流であるエクリプス系からネアルコを経てロイヤルチャージャーからターントウヘ、更にヘイルトゥリーズンを経てヘイローからサンデーサイレン

スに至る超強力血統が導入されたことによる。

その頃の日本競馬界におけるブルードメアサイアーは、十一年連続リーディングサイアーであったノーザンテーストが大勢を占め、サンデーサイレンス×ノーザンテースト産駒の最強伝説が始動したのである。それにより陽平の生業は終焉の憂き目を見ることとなったのである。それ以降の五年間で家を売り払い、その資金も底をつき、おまけにアルツハイマー発症、今田邸に居候し「モスラが好き」を執筆、印税によりマンション購入、パチンコで財産を使い果たし、現在に至っている。

「競馬が好きな動物愛護団体の人が、サラブレッドは走ってなければ死んでしまうから、競馬は動物愛護そのものだと言ってましたが、詭弁なんでしょうか？」

夕子が陽平の方を見て言ったが、陽平は居眠りしていた。

「牧場で走っていれば十分でしょう。サラブレッドはコストの高い食肉だという考え方が私たちの間では主流です。そのために、競走馬として高く売れた馬のお陰で経営が成り立っているんですが、競馬で走らせることは確かに動物虐待と言えますよねえ」と、腕組みをした真久郎が、自分自身を納得させるように言った。

「一般には食肉にすることが虐待だと叫ばれてますけど」

夕子が、さも意外だという顔で言った。

「動物愛護団体以外の人でも、サラブレッドを食肉とするのに異議を唱えながら、馬券を購入している人が、全て競馬を止めれば、資金繰りに困窮したサラブレッド生産者は、肉牛生産に転換すると思いますよ。馬を食べるのも、牛を食べるのも変わらないと思います。が、さし当たって、競馬という動物虐待は解消される訳です」

「消費を悪徳とすれば、環境問題はすぐにでもクリアになるのに、そう言えない経済事情と似通ってますね」

夕子が言つと令子が「同じものじゃない」と言った。

陽平は相変わらず眠っていて、軽いいびきの音がした。

「九条さんってほんとに罪のない寝顔していますね…。起きてると

きもだけど」

夕子が言つと真久郎は「五十五、六にもなればそんなもんだらう。『モスラが好き』にも書かなかつたことは、結構あるんだよ」と意味深な言い方をした。

夕子は、そんな言い回しをされると、問い質さなければい仕方がない風「結婚詐欺とかそういうことですか？」と尋ねた。

「ああ、そこまではいかなければ、陽平の女性関係についての噂は、よく聞いたなあ。私は大学へ進学してから十年くらい他所にいたので、その間のことは直接には知らないんだが、こちらへ帰ってからも現在進行形の同級生の女子だけで四、五人の名前が拳がつていたよなあ。それが、競馬が駄目になつて家売り払つた頃から、ぱったり噂が途絶えて、舟虫女と付き合い始めたつてことだっけ。私の病院へ顔を出した頃はまだ、彼女と同棲していたんだ。まあ、彼女と付き合つてた男は枚挙に暇がないけどなあ。それがあの日、カウンセリングに来たとき、彼女の家を追い出されたと言うじゃないか。訳を聞いてみると、ポケットからおもむろに、小豆よりも小粒の赤い玉を取り出して、セックスが終わつた後、シートにそれが落ちていて、それを見た彼女が『あなた、もう終わつてるね』と言つて、それから程なく追い出されたと言うんだよ……。よく見るとそれって、陽平が食べていた梅仁丹だつただけだね。いや、お嬢様方にこんな話して悪かつたかな」

真久郎は話し終わつてから、後味悪そうに言つた。

「別に紐のような生活を送つていた訳ではないんですね。誰でも若い頃は元氣潑刺ですものね」

夕子は容認するように言つた。

「いや、ここだけの話、今あいつはアルツハイマーを発症しているが、ボーツとしているのは子供の頃からああなんだ。まあ、セックスは強かつたという噂だけだね」

「それだけで十分じゃないですか」

夕子がしたり顔で言つと真久郎は「夕子さんは、若しかして男性



経験が豊富なのかな。おつと失礼」と、半分冗談めかして言った。  
「お父さんだったら…。気にしないでね夕子。父は仕事柄プライベートルに立ち入ることがあるの。悪気はないの……多分」と麻由香が慌てて父の言葉を遮るように言った。それはフォローのようで、そうでもない言い方だった。

夕子の横では令子が、少なからず動揺した表情を必死に隠し、努めて平静を装いながら「あの、祐介さんはご結婚されていないんですか？」と唐突な質問をした。

「ビーチビーチニオンナリ」

祐介は、待つてましたとばかりに、ベタな答え方をした。

「お前の話は聞き取り辛いんだよ。私が要約して話してやるから。『昔は世界中のコンペティションで時には優勝したり、その頃は女にはこと欠かなかったなあ。だけど今じゃ体力も無くなり、祐介フリークの女もいなくなり、いたとしても所帯染みてしまい、情熱も失せてしまった。何を隠そう、俺こそが紐生活を送っていた唯一の男だ。』結局は誰にも相手にされなくなって、ノースショアにも乗れなくなって、何年か前に郷里へと流れ着いた。ってことだよな」  
「ケツコンシマショウ」

真久郎の代弁の内容には触れず、祐介はその一言をつぶやき、沈黙した。

「事实は小説よりも面白いなり。僭越ではございますが『モスラが好き』の中のキャラクターより、人間臭があつて、いいですねえあの、先生はマセラティと舟虫女以外のエピソードをお持ちですか？」

夕子の問い掛けに真久郎は「うっ！」とつめき声を上げた。

追い討ちをかけるように麻由香が「それ以上でも以下でもないわ。私が小学生の頃から、研修医時代の武勇伝めいたものを聞かされてはいたけど、いざ小説にするとなれば、あまりにも如何にもつてのが耳に付くので、遠慮させてもらったの。本人はいたってご不満のようだったけれどね」

「へえつ、研修医時代のエピソードですか、素敵ですね」

夕子がそう言うのと真久郎は、次に「聞かせていただけませんか？」などの台詞を期待していたようだが、誰も二度とその話題に触れることはなかった。

「みなさん煙草は吸わないんですか？」

令子が尋ねると祐介が「テキザイテキシヨ」と答えた。

「今、臨機応変って言われました？」

夕子がすかさず突っ込みを入れると、祐介は「オツ、オー」と言った。

「ほんと、お前はボキヤが少ないなあ。あつ、みなさん勘違いしないでください。こいつがこんな話し方なのは、決して海外での生活が長かったせいではないんですよ。高校のときから十分こうでしたから」

「あらお父さん、自分にスポットライト当たらないもので、八つ当たり？ 大人気ないわよ」と、麻由香がさがりがなく言つてのけた。

「た、煙草は臨機応変ということ、と言つても殆ど吸っていないなあみんな。酒は食事と同じで、決意表明して飲むものだから、飲む機会を無くせば、理論上止められる。煙草は、呼吸のようなものだから、今から吸うんだなんて構えなくても吸うことが出来る。悪癖と呼べるだろうな。だから止めにくいんだよな。身体に悪いからといって私は禁煙を勧めはしません。仕事中に煙草を何十本も吸っていた人が、禁煙になつて落ち着かないと相談に見えるんですが、集中力の問題ですから、カウンセリングをお断りしています。その後、禁煙教室なんかに通われる方もおられるようですが」

「煙草を吸えば集中力が高まつて、仕事が進むと言う人もいますよね」と、令子が言つた。

「ええ、確かにそんな部分もありますが、前提として禁煙があるのなら、仕事に対する集中力を維持する意志を持つ必要があるでしょう。そして、仕事が一段落したときには、煙草を忘れるのではなく、

吸わないことに集中するのです」

「すぐく、大変な気がしますけど……」

「そうですね、私は職業柄いともたやすく禁煙しましたと言ってますが、出来てませんからねえ」

「極端に意志の弱い精神科医なの……」と麻由香がため息混じりに言った。

「私は聖職者ではないので、身をもって示す必要はないと考えております」

真久郎は、悪びれた様子もなしに言った。

「医師を聖職者だと考える向きもありますが」と令子が言った。

「聖職者とは、広辞苑によれば神に奉仕する者ですから、神父様のことでしょう。喫煙は考え方によれば自傷行為ですから、戒律違反と言えますよね」

「教師はどうなんですか？」

「全く問題ないと考えます」

「公務員は？」

「聖職者ではないですが、法律を遵守することを、身をもって示さなければならぬと思いますよ。認識していることについて全て守る義務があるし、また、知らなかったで許されることに甘んじることなく、認識することに努める必要があるのは当然のことでしょう。喫煙とは関係ありませんが」

「お父様は確かにまともな方ですけど、それにしても九条さんも、祐介さんもほとんど仕事していませんね」と夕子がどちらを肯定するでもなく言った。

「ギャップ・イヤー」

祐介は英語のろれつも回っていないかった。

「どんだけー！」

真久郎の突っ込みは意味不明だった。

「ギャップ・イヤーって人生にメリハリを与えるための期間ですよ。祐介さんの人生におけるメリハリが見えて来ないんですけど」

と、夕子が普通に突っ込んだ。

「モ、モラトリウム」

ボキヤのない祐介は別の言い方を選んだ。

「で、出たあ！どうしよう令子、出ちゃったよ死語が」

夕子は緊急事態でもあるかのように、令子に告げた。

「でも、祐介さんの年齢で本気でそんなこと言うはずが…」

「マジ…」

「ぷっ！」

夕子がたまらず吹き出した。

「戦場で生まれ育った子供にモラトリウムなんてないですよ。あやこうやと考えを巡らせる間に、廃人にされてしまします」

令子の言葉に祐介は「ニッポン、センジョウ」とおどけて見せた。テレビで、討論会のような番組あるけど、私たちにすればさつさと結論を言えよみたいな」と夕子が言った。

「そうね、仮にモラトリウムなんてものが有効だった時代があるとするれば、それも許されると思うけど、私たちの時間は逼迫しているから、必要なのは議論を尽くすことではなく、過程をはしよった結論だけよね」

「それなら結論の正当性について、判断出来ない可能性があるじゃないか」

令子の話を聞いていた真久郎が口を挟んだ。

「世の中の殆どの事象が、何の説明もなく既に結論として提示されていますから。私たちに必要なのは、ただリテラシーだけでしよう。討論会を最初から最後まで傍聴したって、リテラシーが欠如していれば、結論を鵜呑みにするだけのことですから」

令子が言々と夕子が「私たちに望まれることは、ディベートの技術じゃなく、的を射たりテラシーってことよね。世の中は私たちに真逆のことを強いるけど」と念を押すように付け加えた。

「失礼ですが、先生の危惧されていることは、インターネットの普及した時代には無意味だと思います。現代人においては、幾千の情

報を自ら検閲する力を持っていることが当然なのです。それが正解であるか、不正解であるかは重要ではありません。パブリシティーに汚染されないことが重要なのです」

令子が、真久郎を諭すように言った。

「君たちと話していると、驚かされてばかりだよ。私は麻由香には小学生の頃から驚かされることが多くて、いつもハラハラしていたんだよ。何しろ小学二年生にして自殺未遂で、その理由が世を憐んでだから。次は何をしでかすのか、予断を許さなかったからね。その頃からほとんど友達と遊ばなくなつて、苛められているのかと思つたりしたものさ。」

後で解つただけけれど理由は単純で、ただ話をしたくなかつただけなんだ。その頃の麻由香は未来の夢を見始めたところで、友達や上級生、おじいさん、おばあさん、それに学校の先生にする話が、死生観や未来の地球環境についてだものね。返つてくる答えは年齢によつて見事に区分されていて、麻由香の考えは誰ともかけ離れていたんだね。

それが中学生になつて、陽平と夢の話をするようになり、一緒に『モスラが好き』を執筆した頃から、麻由香にも自分の本分が漠然とでも見えて来たようで、ようやく安心したんだよ。高校に入つてからはサスティナブルアース、大学に進学したと思つたら子供同盟と、落ち着きはないのですが、一応一貫性がありますからね。麻由香と君たちが出会つたことが、私には何かとても意味のあることのように思えてならないんですよ」

真久郎が珍しく真面目な顔をして、感慨深げに話した。

「モスラが鍵ですよ。私のおじいちゃんがモスラフリークだったし、夕子は『モスラが好き』に少なからず影響を受けたし、麻由香はその執筆に関わつていた。私は九条さんにも麻由香にも出会つていたけど、夕子がいなければ、こうして一堂に会することなんて、絶対になかつたよね」

「私は令子がモスラをくつつけてるのを見たとき、懐かしさのよう

なものを感じたけど、今日色んなことを話してみて、麻由香との出会いには、眼に見えないものの意思を感じたわ。」

「夕子さんは見かけによらず謙虚なんだねえ」

真久郎が感心したように言うのと令子が「そうなんです。だから苦労して来たんですよ。解っていただけますか？」と言った。

「まあ、その、精神科医ですから。一般に謙虚さは美德とされますが、夕子さんの謙虚さは自分自身を殺す毒薬になり兼ねませんね」

「すごいですね。極めて希少なケースなのにすぐに見抜くとは、精神科医恐るべし」と、夕子が言うのと真久郎が「麻由香を小学生の頃からずっとカウンセリングしているからね。中学生になった頃からは、謙虚にならないようにと助言していました。親馬鹿ですが」と言って笑った。

「なるほど、謙虚にならないようにか……。麻由香、苛められたりしませんでした？」

夕子が興味を持ったように質問した。

「誰とも話をせず、友達を作ろうともしないし、授業中には先生に突っ掛かるわで、生意気だといって苛められていたようですよ。ですが、反発から苛められる方が、妬みで苛められるよりも、気持ちがいいでしょう」

「そうは言っても、結構きつかったのよ。自分が謙虚でないことを呪ったりもしたわ」と麻由香がその頃を振り返るように言った。

「でも惨めな気分にはならなかったでしょ。そっか、謙虚にならないようにか……」

夕子は良からぬ何かを決意するようにつぶやいた。

「あんだ、大学生にもなれば大人気ないって言われるのが落ちよ。謙虚さが美德、分かる？ 謙虚な夕子は誰にも好かれるんだからね」

令子は懸命な説得を試みた。

「大学生にもなれば、嫌われたっていいもん」

夕子の発言にも一理あるように思われた。



## 第二十二章 子供同盟

その週の金曜日、令子と夕子は最終の講義をさぼって麻由香の家へと向かった。

麻由香は金曜日は午後の講義を入れていないので、子供同盟の準備をするため、一足先に帰っていた。令子と夕子が麻由香の家に着いたとき、時刻は既に三時を少し過ぎていたにもかかわらず、階段で地下室へ降りてみると麻由香しかなかった。

「三時からって言ってたよね」と、確認するように夕子が言った。

「三時から六時までの間で、随時なの」と、麻由香が釈明した。

「なあんだ、正規の会議って訳じゃないんだ。どの席に着けばいいのかな？」

夕子は、部屋の中央のオーディオの前に口の字型に並べられたテーブルを見回した。三人掛けのテーブルが二脚ずつ、合計八脚並んでいて、各テーブルの上に、それぞれ二人分のレジュメが用意されていた。

「私の隣のテーブルに座れば？」

麻由香が、自分の座っているテーブルの横のテーブルを指差した。「麻由香の隣は？」と夕子が言くと、麻由香は「この前言ってたサスティナブルアースのリーダー二人が来るから」と言った。

令子と夕子は席に着きレジュメを手にとった。レジュメと言ってもA4のペーパー二枚の右肩をステープラーで閉じた、簡単なものだった。内容はと言えば、先月の第二金曜日の会議録だった。

「何故ひと月前の会議録なのよ？」と、夕子が尋ねると、麻由香は「会議は第二、三、四金曜日だと言ったでしょ。第二金曜日は小学四年生と中学一年生、第三金曜日は小学五年生と中学二年生、第四金曜日は小学六年生と中学三年生限定になってるの」と答えた。「じゃあ、今日は小学四年生と中学一年生の会議ってこと？」

令子が聞き返し「そうよ」と、麻由香が答えた。



「会議録なんて親切なことね。普通はノート取っているはずなのに」  
夕子が首を傾げながら言った。

「会議と言っても随時だから、最初からいなかった子には分からないし、必要ならバックナンバーもプリントアウトしてあげてるの」  
「あつまあい！」と夕子が言った。

「会議録を読んでみてよ、会議と言ってもカウンセリングとコンサルテーションにシフトしているから、何か相談ごとがあれば、随時に顔を出して、解決すれば随時に帰っても構わないの、その方が保護者の受けもいいしね」

「そっか、そうだよ、時間の制約があれば、批判的な意見も出て来るし、必要のない秩序よりも効率を尊重するって訳ね」

夕子は感心したように、頷きながら言った。

「へえっ、子供同盟って答えを出すんだ。単なるお喋りの場でないところが面白いわね。面白いなんて失礼……」

会議録に目を通した令子が言うと、麻由香は「子供たちも含めて、結構みんなでワイワイ面白がってやっているのよ。ただ、答えを出さないんじゃない、父も含めて私たちが参加している意味ないし」と真剣な顔をして言った。

「ほんと、麻由香すごいよ」

令子の隣で会議録を読んでいた夕子も賛辞を送った。

「ありがとう、指導員も間もなく来るから、褒められたと言ったらきつと喜ぶわ」

夕子に褒められた麻由香は、照れ臭さを隠して素っ気なく振舞った。

ピンポンと鳴った後、玄関の方で賑やかな笑い声が響いた。

「お邪魔しまっす」と言いながら、スタジオへ入って来たのは、通学電車で既に顔なじみになってしまったガングロ二人組みだった。

「わあい！やっぱりそうだ。田所令子さんこんにちは、塩屋夕子さんこんにちは」

二人組みは、令子と夕子のをちゃんと見分けて、慇懃に頭を下げ

た。

「えっ？そ、そうだけど、どうして知ってるの？」

いきなり名前を呼ばれた令子は、明らかに動揺していた。

「昨日の夜麻由香先輩から電話があつて、友達が見学に来るからと知らされました。その時にフルネームを聞かせていただきました。

私は神島恵と言います。友達はメグって呼びます。アイドルはジェニファー・バトウンです。よろしく」

麻由香と似ている方の女子高生が、令子に説明を兼ねて挨拶してくれた。

「でも、どうして私が令子だと？」

「通学電車の中で、名前で呼び合つてられましたから。私は津田涼子です。ここでお会いできて嬉しいです。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくです。あの、私、通学電車の中であなたたちにマークされているように思えてならなかったんだけど、気のせいかしら？」

令子は、以前から気になっていたことを、思い切つて尋ねてみた。すると涼子は、床に置かれた令子のシオルダーバッグを指差して「モスラのストラップにビビッと来ました」と答えた。

「モスラか…。そりやそうよね、麻由香の後輩なんだもの」

令子は、今更ながらにモスラの導こうとしている未来を思い描いた。そこで自分は、夕子は、麻由香は、メグと涼子は、どのような役割を担っているのだろう。未来を見ている麻由香の眼には、既に私たちのあるべき姿が、現実のものとして映っているのだろうか。

そんな令子の思いをよそに、夕子は「モスラだモスラだ、やつぱりモスラだ」とはしゃいでいた。

「このまえの会議で、小学四年生のまりちゃんが、いつも独りぼっちでいる子と友達になりたいけど、なれないって言つてたじゃないですか。風景をシミュレーションするうちに歌詞が出来たので曲を付けたんです。やってみませんか？」

涼子が麻由香に楽譜を手渡したのを見て、令子は今日の朝ガング

ロ二人組みが、楽譜を見ながらリズムを刻んでいたのを思い出した。  
「やってみようか」

麻由香は楽譜を読みながらロッカーの方へベースを取りに行った。メグもその後続き、自分のロッカーからギターを取り出した。涼子はキーボードの前で楽譜を広げて既にスタンバイしている。

「出だしの部分だけ、二人でやってみますね。優しい歌なので、テンポはゆっくりです。3・2・1」

涼子の掛け声と共に、メグのギターと涼子のキーボードによる演奏が始まった。

「オツケー！」と麻由香が言うと、演奏は中断した。

「タイトルはtearsです。じゃあ、行きます。3・2・1」

tears 夕映えに肩をすぼめ

何故 そんなにも悲しい

smile 友達になりたいのに

うつむく瞳でさよなら

帰ろうとしたつま先に

ポツリと涙が落ちた

自分の弱さに気付いたとき

できることって なに？

暮れなずむ空には ほら茜雲

あなたの背中を見つめてる

誰かのせいにする気持ちのままじゃ

なおさらみじめになるだけ

迷っているうちに今日が終わって

夜空を星座がうずめても

涙をためている気持ちのままじゃ

きらめく明日に会えない

tears 振り向いた想い出には

何故 笑顔だけたりない

smile あなたならなれるはずね

優しい眼差しあるから

つぶやきかけた唇が

かすかに震えているね

素直になろうと思ったとき

邪魔するものは なに？

迷っているうちに今日が終わって

朝陽が背中を押したって

涙をためている気持ちのままじゃ

きらめくあなたになれない

寂しかった夢の涙を拭いて

まぶしい季節へ飛び出そう

いつだって私がそばにいるから

あなたの勇氣になりたい

「ブラボー！」

演奏が終わったときスタジオ内はスタンディング・オベーションの嵐だった。と言っても騒いでいるのは令子と夕子と、まりちゃんの三人だった。

「ちょうど良かったわ。まりちゃん、この歌いいでしょ？はい、楽譜ね」

涼子が、演奏が始まってすぐにスタジオに入って来たまりちゃんに、楽譜を手渡しながら言った。

「はい、ナナちゃんにも見せて、子供同盟へ誘ってみます。今日も誘ったんだけど来てくれなかったの」

ナナちゃんと言うのが、まりちゃんが友達になりたいと思っている、いつも独りぼっちの子らしい。まりちゃんは楽譜を四つ折にして、大事そうにポシエットの中へしまった。小学四年生のまりちゃんは、立ち居振る舞いから優しさと活発さが滲み出しているような

愛くるしい女の子だった。

「ということは、もう友達になっていってことね。まりちゃんのお姉さんはゆかちゃんだったかな？」

「はい。ゆかちゃんと三人で遊園地に行ったの。ゆかちゃんがナナちゃんを笑わせてくれたから、帰る頃にはいっぱい話ができるようになったの」

「今日はゆかちゃんまだ来てないね」

「もうすぐ期末テストだから、来れないの」

「そっか、だったら今日はあまり来ないみたいだね」

まりちゃんはまだ、席に着いていなかったの、夕子が手招きして令子と夕子の間に座るように促した。それは孤高の夕子にしては珍しい行為だった。まりちゃんといえば、にこっと笑ったかと思えば、なんのためらいもなく、二人の間にちよこんと収まった。

涼子とまりちゃんが話をしている間に、二人の男の子が並んで席に着いていた。一人は小学生で、もう一人は中学生だった。

「まあ君、先月の内緒の話は上手く行った？」

メグが小学生の男の子に尋ねた。

「うん。シュウ兄ちゃんが僕のことには内緒にして、その子と話をしてくれました。その子も僕と同じで兄弟がいなかったの、中学生のお兄ちゃんと遊んだんだって自慢してたよ。それで、その日からその子は誰も苛めなくなっただよ」

「そう、良かったね、バンザイ！」

メグがそう言うと、まあ君は嬉しそうに笑った。

「どういこと？」

小学生とのやり取りを聞いていた令子が、麻由香に尋ねた。

「今に始まったことじゃないけど、中学生や小学生には、一人っ子が多いじゃない。だから、子供同盟は兄弟を体感する場でもあるの。中学一年生と小学四年生という風に、三学年離れた者同士でパートナーになるの。小学一年生から三年生までは、弟、若しくは妹のみで、中学一年生から三年生までは兄、若しくは姉のみの役回りだけ

ど、小学四年生から六年生までは両方をこなさなければいけないの。例えばまあ君は、今回は中学一年生のシユウ君の弟だったけど、小学一年生の男の子が、何か問題を抱えていると気付いたら、子供同盟へ持ち寄り、相談するの。小学一年生から三年生までは、ここへ呼ぶ訳にはいかないから」

「小学生と中学生を連携して機能させているということか。形式として九年制を実施している学校はあっても、学年ごとに孤立しているのなら意味ないものね。今は統合されて、ほとんど消え失せてしまったけど、小学校の全校生徒が十人とかで、一クラスで授業を受けているのを見ると、みんな兄弟みたいで、喧嘩はあっても苛めの影すらないよね。サステイナブルアースの理念は省事省物だけど、子供同盟の理念は、ずばり近世代交流による子供の連帯感育成でしょ？」

令子が言つと麻由香は、またしても「省事省物」とつぶやいた。二人の会話を、まりちゃんの赤ん坊のようにふわふわとカールした髪の毛を、櫛でとかせながら聞いていた夕子が言った。

「三世代交流の是非が問われるところね。少子化で妹や弟がいない家族には、上から下という姉の立場のリレーションが存在しないのが問題なのに、何処からおばあちゃんやおじいちゃん、それに両親の代役を見つけて来たって、果たして何の意味があるのか？親のいない子供にとってなら、意義のあることだと思うけど、そうでないなら、本当の親が頑張れば済むことだもの。方向を間違えれば、親の義務放棄に繋がる恐れすらあるよね。」

「おねえちゃん、いいこと言うね。りれーしょんって何のこと？」  
まりちゃんが、夕子のことを褒めた。令子はまりちゃんの話し方が、幼い頃祖父に

質問ばかりしていた自分と似ていると感じていた。

「ごめん、繋がりのことよ。一人っ子でも親からの愛情は受け取れるけど、妹がいなければ、誰にも愛情をあげることが出来ないでしょ。まりちゃんは一人っ子なの？」

小学四年生のまりちゃんに褒められた夕子は、すごく嬉しそうな顔をして言った。

「良く分かりました。はい、私一人っ子です。子供同盟に来るようになってからは、小学一年生の子とお話するようになって、愛情をあげているかどうかは分からないけど、その子が何か困っていて、お母さんにも相談できないとき、話を聞いてあげています。難しいときは子供同盟に来て相談するけど。私もお母さんに相談出来ないことは、中学一年生のゆかちゃんに聞いてもらうの」

「私にも相談してくれる？」と夕子が言うのを聞いた令子は、心の中で「おいおい、お前はそんなことする柄じゃないだろ」と野次っていた。

「わーい……。でも、ゆかちゃんが本当のお姉さんのようにしてくれているし、ゆかちゃんのこと大好きだから……」

まりちゃんは少し困った顔になった。

令子は心の中で「そらみる、その場の気分で適当なこと言うから、純真な子供まで悩ませてしまったじゃない」とつぶやいていた。

「そっか……。気にしないでね、私は夕子と言うの、よろしく。まりちゃんのこと好きよ」

夕子が、そんな殊勝なことを言っているということは、あながち口から出任せではなかったんだと、令子は心の中で野次ったりしたことを、少しだけ反省していた。

「わーい。私もゆうこちゃん、だーいすき！」

令子は、まりちゃんが令子の年齢になったとき、夕子のような友達が出来ればいいなと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9853c/>

---

モスラが好き 2

2010年10月31日03時57分発行